京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二三－五

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2024年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2024年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

調査地全景（北西から）

瓦質土器炉

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、国立文化財修理センター（仮称）整備の実現可能性検討に伴う法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡の試掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

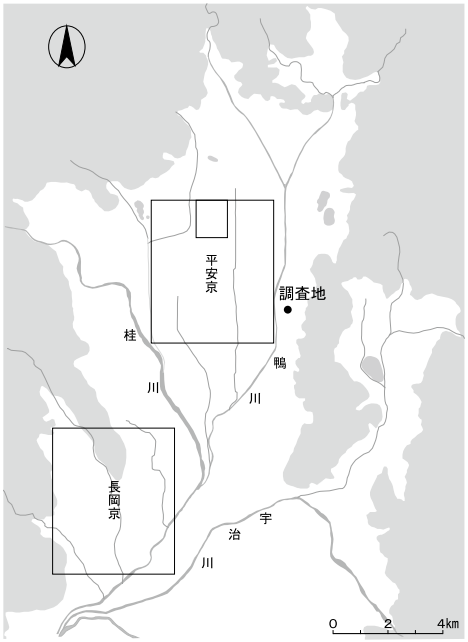
令和６年３月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡　（京都市番号　23S108）
2	調査所在地	京都市東山区茶屋町527　京都国立博物館構内
3	委　託　者	文化庁 支出負担行為担当官　文化庁次長　杉浦久弘
4	調 査 期 間	2023年６月26日～2023年９月29日
5	調 査 面 積	241.4㎡
6	調査担当者	古閑正浩
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	１区は101、２区は201、３区は301から通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	古閑正浩
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査経過 …… 2
２．位置と環境 …… 4
（１）地理的環境 …… 4
（２）歴史的環境 …… 6
（３）既往の調査 …… 9
３．遺　　構 …… 22
（１）基本層序 …… 22
（２）平安時代後期から室町時代初期の遺構 …… 24
（３）桃山時代から江戸時代前期の遺構 …… 27
（４）江戸時代前期の遺構 …… 28
（５）江戸時代後期の遺構 …… 29
（６）明治時代の遺構 …… 35
（７）時期不明の遺構 …… 35
４．遺　　物 …… 36
（１）遺物の概要 …… 36
（２）土器類 …… 36
（３）瓦類 …… 42
（４）土製品 …… 52
（５）石製品 …… 52
（６）木製品 …… 52
（７）その他遺物 …… 52
５．ま と め …… 54
（１）遺構の変遷 …… 54
（２）法住寺殿とその後の土地利用 …… 61

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構　調査地全景（北西から）

巻頭図版２　遺物　瓦質土器炉

図版１　遺構　１区～３区平面図（１：300）

図版２　遺構　１区実測図１（１：100）

図版３　遺構　１区実測図２（１：100）

図版４　遺構　２区実測図１（１：100）

図版５　遺構　２区実測図２（１：100）

図版６　遺構　３区実測図（１：100）

図版７　遺構　１　１区・２区全景（東から）

２　１区全景（北東から）

図版８　遺構　１　１区南半（北から）

２　１区西半（北東から）

３　溝111（南から）

図版９　遺構　１　溝111　礫群検出状況（東から）

２　溝111　礫群検出状況（北西から）

３　土坑102（北から）

図版10　遺構　１　池状遺構101（北東から）

２　池状遺構101（南東から）

３　土坑137・138（北東から）

図版11　遺構　１　２区全景（北西から）

２　溝214・215（南西から）

図版12　遺構　１　２区西端　基盤層傾斜状況（南西から）

２　井戸206・土坑201（東から）

３　井戸206（オルソ画像、南から）

図版13　遺構　１　土坑202（北から）

２　溝203（南から）

図版14　遺構　１　３区全景（北から）

２　井戸302（北西から）

図版15　遺構　１　柱穴列322（北から）

２　柱穴列322：柱穴314（東から）

３　柱穴列322：柱穴321（東から）

４　溝305（東から）
５　溝309・312（北西から）
図版16　遺物　溝111・井戸302・井戸206・基本層序４層出土土器
図版17　遺物　１　施釉陶器
２　須恵器・瓦質土器
図版18　遺物　瓦質土器炉
図版19　遺物　溝111・井戸302・井戸206出土軒瓦
図版20　遺物　溝111出土平瓦
図版21　遺物　井戸302出土丸瓦・平瓦
図版22　遺物　池状遺構101・土坑201・その他遺構・基本層序４層出土軒瓦
図版23　遺物　土坑202・土坑201出土丸瓦
図版24　遺物　池状遺構101・土坑201出土平瓦・桟瓦・道具瓦
図版25　遺物　土坑202出土道具瓦・金箔瓦、池状遺構101・土坑201出土瓦刻印
図版26　遺物　１　土製品・石製品
２　木製品
３　骨（ヒト）

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　…… 1
図２　調査前全景（南東から）　…… 2
図３　調査状況（北西から）　…… 2
図４　関係者による現地視察（南東から）　…… 2
図５　養生砂による埋め戻し状況（北から）　…… 2
図６　調査区配置図（１：1,000）　…… 3
図７　明治の仮製図にみる調査地周辺（１：10,000）　…… 4
図８　七条通の西門跡（屈曲地点）と阿弥陀ヶ峰（西から）　…… 4
図９　調査地周辺の交通路（１：25,000）　…… 5
図10　京都国立博物館構内調査位置図（１：1,500）　…… 10
図11　方広寺大仏殿院の復元図と調査位置図（１：1,800）　…… 11
図12　周辺主要調査地位置図（１：6,000）　…… 14
図13　溝111実測図（１：50）　…… 25
図14　井戸206・土坑222実測図（１：50）　…… 26
図15　井戸302実測図（１：50）　…… 27

図16　溝203・土坑204実測図（１：50）　…… 28
図17　柱穴列147実測図（１：50）　…… 30
図18　柵145・146実測図（１：80）　…… 31
図19　土坑102実測図（１：50）　…… 32
図20　土坑137実測図（１：50）　…… 32
図21　柵229実測図（１：50）　…… 33
図22　柱穴列322・ピット列323実測図（１：50）　…… 34
図23　溝111・井戸302出土土器実測図（１：４）　…… 37
図24　井戸206、整地層５a層、土坑102・201、基本層序４層出土土器実測図（１：４）…… 39
図25　土坑102出土瓦質土器炉実測図（１：４）　…… 41
図26　溝111出土瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 43
図27　井戸302出土瓦拓影及び実測図１（１：４）　…… 44
図28　井戸302出土瓦拓影及び実測図２（１：４）　…… 45
図29　井戸206出土瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 46
図30　土坑202出土瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 47
図31　池状遺構101出土瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 49
図32　池状遺構101・土坑201出土瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 50
図33　土坑201出土瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 51
図34　その他遺構、基本層序４層出土瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 51
図35　出土土製品実測図（１：４）　…… 52
図36　出土石製品実測図（１：４）　…… 52
図37　井戸302検出 鞭虫卵の生物顕微鏡写真　…… 53
図38　井戸302検出 鞭虫卵の実態顕微鏡写真　…… 53
図39　遺構変遷図１　平安時代後期から室町時代（１：400）　…… 56
図40　遺構変遷図２　桃山時代から江戸時代前期（１：400）　…… 56
図41　遺構変遷図３　江戸時代前期（１：400）　…… 56
図42　遺構変遷図４　江戸時代後期（１：400）　…… 57
図43　遺構変遷図５　明治時代（１：400）　…… 57
図44　遺構変遷図６　時期不明（１：400）　…… 57
図45　周辺遺構変遷図１　平安時代（１：2,000）　…… 58
図46　周辺遺構変遷図２　鎌倉時代・室町時代（１：2,000）　…… 58
図47　周辺遺構変遷図３　桃山時代・江戸時代（１：2,000）　…… 59
図48　周辺遺構変遷図４　江戸時代後半・明治時代初頭（１：2,000）　…… 59
図49　大仏殿・方広寺の復元と調査地、金属製品生産関係遺構（１：5,000）　…… 60
図50　法住寺殿の地割りと井戸の検出例（１：5,000）　…… 63

表　目　次

表１　京都国立博物館構内調査一覧表 …… 12
表２　周辺調査一覧表 …… 15
表３　遺構概要表 …… 23
表４　遺物概要表 …… 36
表５　大仏殿・方広寺所用瓦の同笵関係 …… 60
表６　調査地周辺における平安時代後期から中世前期の井戸の検出例 …… 62

付　表　目　次

付表１　土器類観察表 …… 65
付表２　瓦類観察表 …… 67
付表３　土製品観察表 …… 68
付表４　石製品観察表 …… 68

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

1．調査経過

（1）調査に至る経緯

本調査は、国立文化財修理センター（仮称）整備の実現可能性検討に伴う試掘調査である。

調査地は、京都市東山区茶屋町527番地の京都国立博物館構内に所在する。周知の埋蔵文化財包蔵地としては、「法住寺殿跡」「六波羅政庁跡」「方広寺跡」の範囲に含まれている。このうち方広寺跡の遺跡の範囲については、一部が、昭和44年（1969）に「方広寺石塁及び石塔」として国指定史跡となり、平成26年（2014）には追加指定・名称変更がなされ「方広寺大仏殿跡及び石塁・石塔」として保護されている。

現在、京都国立博物館にある国立文化財保存修理所は、美術工芸品の修理拠点としての役割を担う。しかし、修理スペースの不足や機能面の見直しの必要性を契機として、令和４年度（2022）に国では、新たな国立文化財修理センター（仮称）整備の実現可能性検討に着手した。そこで、京都国立博物館の敷地における遺構の状況を把握することを目的として、当該地を試掘調査することになった。文化庁と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）の協議のうえ、試掘調査は、文化庁から委託された公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施することとなった。

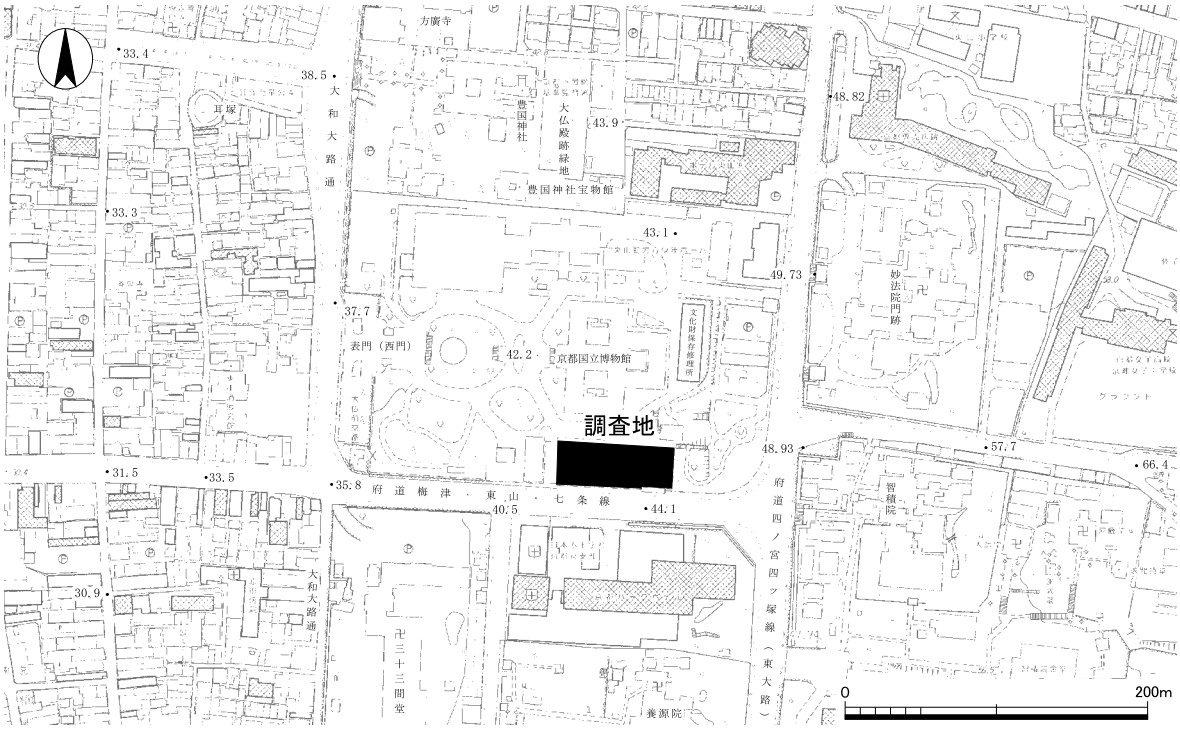


図１　調査位置図（１：5,000）

（２）調査経過

調査は、令和５年度（2023）事業として、京都国立博物館構内の駐車場敷地（図１）を対象として実施した。調査区の設定は、京都市文化財保護課の指導に従い、敷地全体の様相を効率的に把握する観点から、敷地の形状に即して、東西方向に中軸となる調査区を設定し、南北方向の調査区を東半・西半にそれぞれ設定した。調査区は、幹線排水路や下水管を避け、作業ヤードを確保する関係から３つの区画に分け、西から順に１～３区と称した。調査は、令和５年６月26日に着手し、９月29日に完了した。調査面積は、241.4㎡である。

６月26日の着手当初は、現駐車場舗装面のアスファルトとその下部のコンクリートをカッターで切断し、重機で除去後、処分のため搬出した。７月３日から７日まで重機による掘削作業を実施した。調査面より５～10センチ高い位置まで重機で掘削し、７月10日からは人力による掘削作業に着手した。８月17日には文化庁・京都国立博物館・京都市文化財保護課の関係者を対象に説明会を実施した（図４）。８月18日には、京都市文化財保護課の検証委員として襴冝田佳男氏の来訪を受け、調査の経過や成果について説明した。８月25日には京都国立博物館職員を対象に説明会を実施した。掘削・実測・撮影に関する作業は、９月８日に終了した。調査着手時および調査期間中には、京都市文化財保護課職員による検査を受けた。

９月11日からは、復旧作業に着手した。埋め戻し作業の当初には、遺構面を保護するため、その

図２　調査前全景（南東から）

図３　調査状況（北西から）

図４　関係者による現地視察（南東から）

図５　養生砂による埋め戻し状況（北から）

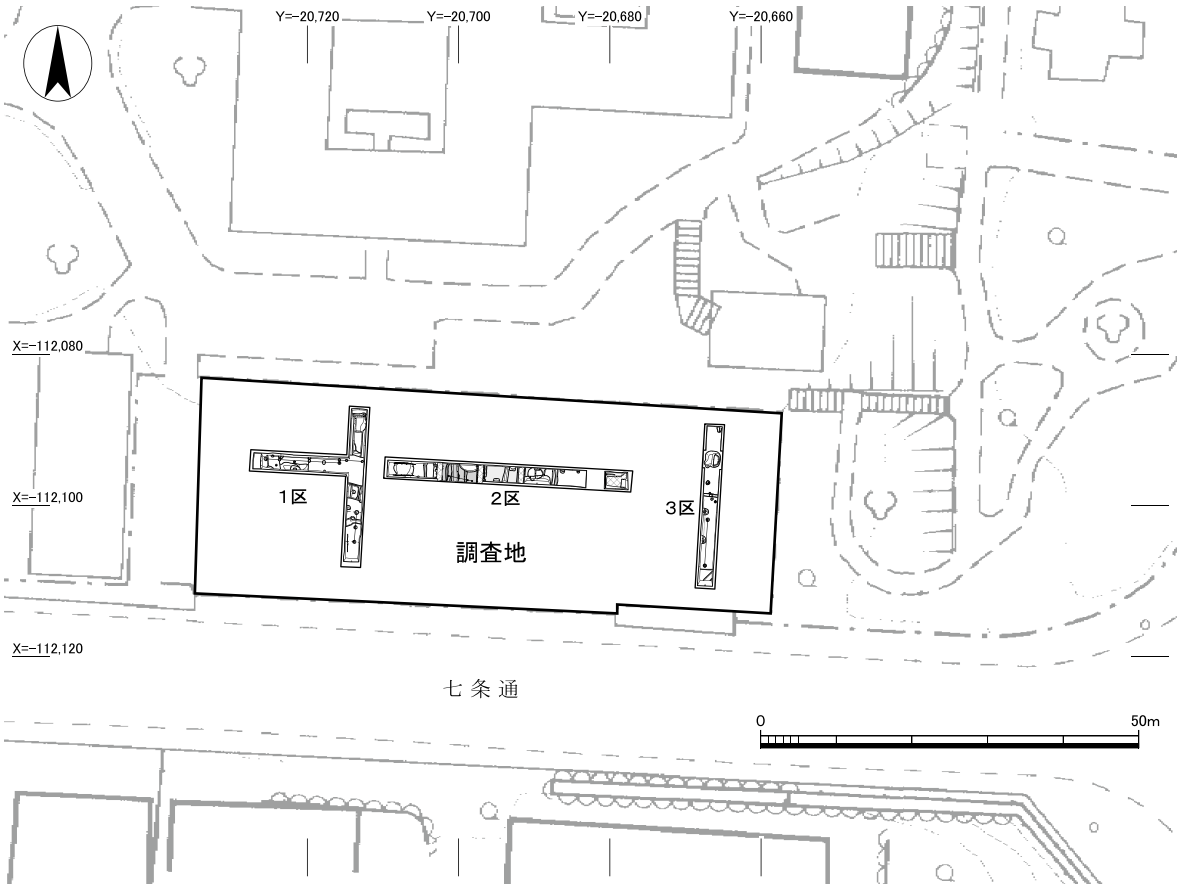


図６　調査区配置図（１：1,000）

直上に保護砂を厚さ約10センチ敷いた（図５）。掘削土を埋め戻した後、砕石を敷き、コンクリートを打設し、アスファルトで舗装した。復旧作業・資材の搬出など、全ての作業を９月29日に完了した。

現地調査及び報告書作成に際し、以下の方々からご協力・ご教示などを賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）

石田由紀子（京都国立博物館）、一瀬和夫（京都橘大学）、上村和直（元京都市埋蔵文化財研究所）、大西征爾・尾野善裕・桑原一平・豊原直樹（京都国立博物館）、藤井康隆（佐賀大学）、古谷　毅（京都国立博物館）、禰冝田佳男（大阪府立弥生文化博物館）

2．位置と環境

（1）地理的環境

立地　調査地は、東山連峰の一つである阿弥陀ヶ峰（標高196ｍ）の西側斜面にあたり、低位段丘から扇状地の変換点に位置する。地表面の標高は41.5～42.5ｍである。現在は、京都国立博物館構内の駐車場の敷地にあたる。京都国立博物館の敷地は、東は東大路通、西は大和大路通、南は七条通、北は豊国神社に接する。周辺の標高は、東大路通が南側48.9ｍ～北側49.7ｍ、大和大路通が南側35.8ｍ～北側37.7ｍ、七条通が西側35.8ｍ～東側4.1ｍで、北東が高く、南西が低い（図１）。構内の東辺には、一段高い地形が存在し、北側の文化財修理所と調査地の東側一帯の段差は、段丘崖とみられる。阿弥陀ヶ峰と六条山（標高201ｍ）の山塊が東西に連なり、その北と南にはそれぞれ東西方向の谷筋が通る。

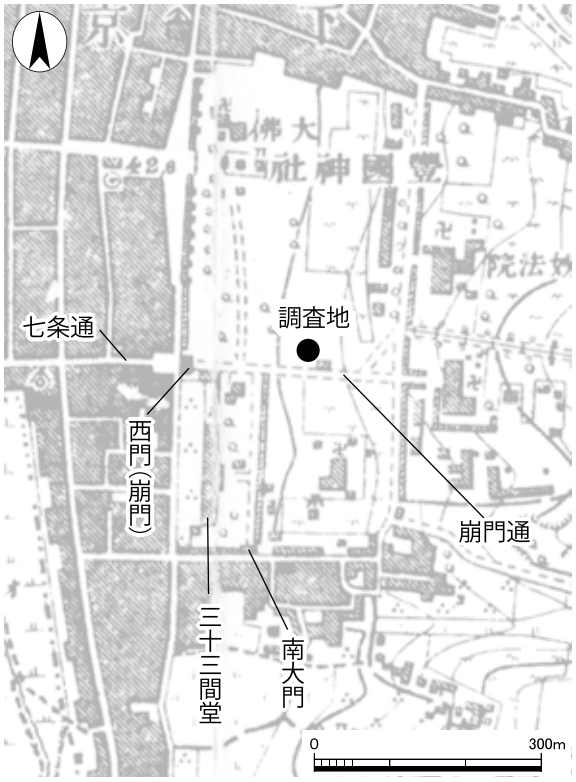


図７　明治の仮製図にみる調査地周辺（１：10,000）

図８　七条通の西門跡（屈曲地点）と阿弥陀ヶ峰（西から）

現況の景観　京都国立博物館の敷地が公有化された前史には、恭明宮の存在がある[1)]。これは、御所に安置された仏像や天皇の位牌を祀る場所として創設され、東京遷都に際して天皇に随行しなかった女官の宿所を兼ねた施設であった。敷地は妙法院が管理する方広寺境内地で、上知令によって明治３年（1870）に公収された。翌年には施設が竣工、明治６年（1873）に廃止された。明治30年（1897）、帝国京都博物館がこの跡地に開館した[2)]。

博物館の建設工事は、明治25年（1892）に着手され、27年（1895）にはほぼ完成を迎えた。この時点では、博物館の敷地の南面には、七条通は敷設されていない。博物館の当初の敷地の南端は、三十三間堂の北辺までであり、七条通と大和大路通の交差点には、方広寺の西門「崩門」が存在していた。崩門から東に向かう通路として崩門通がかつて方広寺境内に存在した。崩門通は上知令によって官有地となり、方広寺を管理していた妙法院の所有として崩門だけが残されていた。明治20年代前半に測量された仮製図（「伏見」）には、崩門・崩門通が表現されている（図

7）。崩門は、九頭竜門が転訛したと伝えられ、棟札によれば慶長六年（1601）に再興された建造物であり、三十三間堂（蓮華王院）の「南大門」とあわせて、方広寺の寺域を画す桃山時代の建築である（現在は、重要文化財に指定）。妙法院は、この門を献納しようと博物館へ願い出たが実現せず、結果的には東寺へ譲渡され、南大門として移築された。東寺の南大門は、明治元年（1868）に火災に罹り全焼し、再建されていなかったことによる。崩門の移築工事は、明治28年（1895）3月に着手された。これによって、崩門通には七条通が延伸され、智積院まで通じ、現在の景観となった。明治末年から計画された京都市の都市基盤整備事業によって、併用軌道として京都市電の東山線・七条線が敷設され〔大正元年（1912）開業〕、これに伴って路面も拡幅された。

交通路　阿弥陀ヶ峰・六条山の南北には東西方向の谷筋があり、北側に渋谷越、南側に滑石越の各行路が通る（図9）。前者は『明月記』では久久目路と称され〔建仁二年（1202）六月二一日条〕、保元の乱では、宇治・淀・大江山・粟田口とともに検非違使に警固される要地であった（『保元物語』上、官軍方々手分けの事）。調査地は、東山連峰を横断し、山科へ抜ける交通路の起点となっ

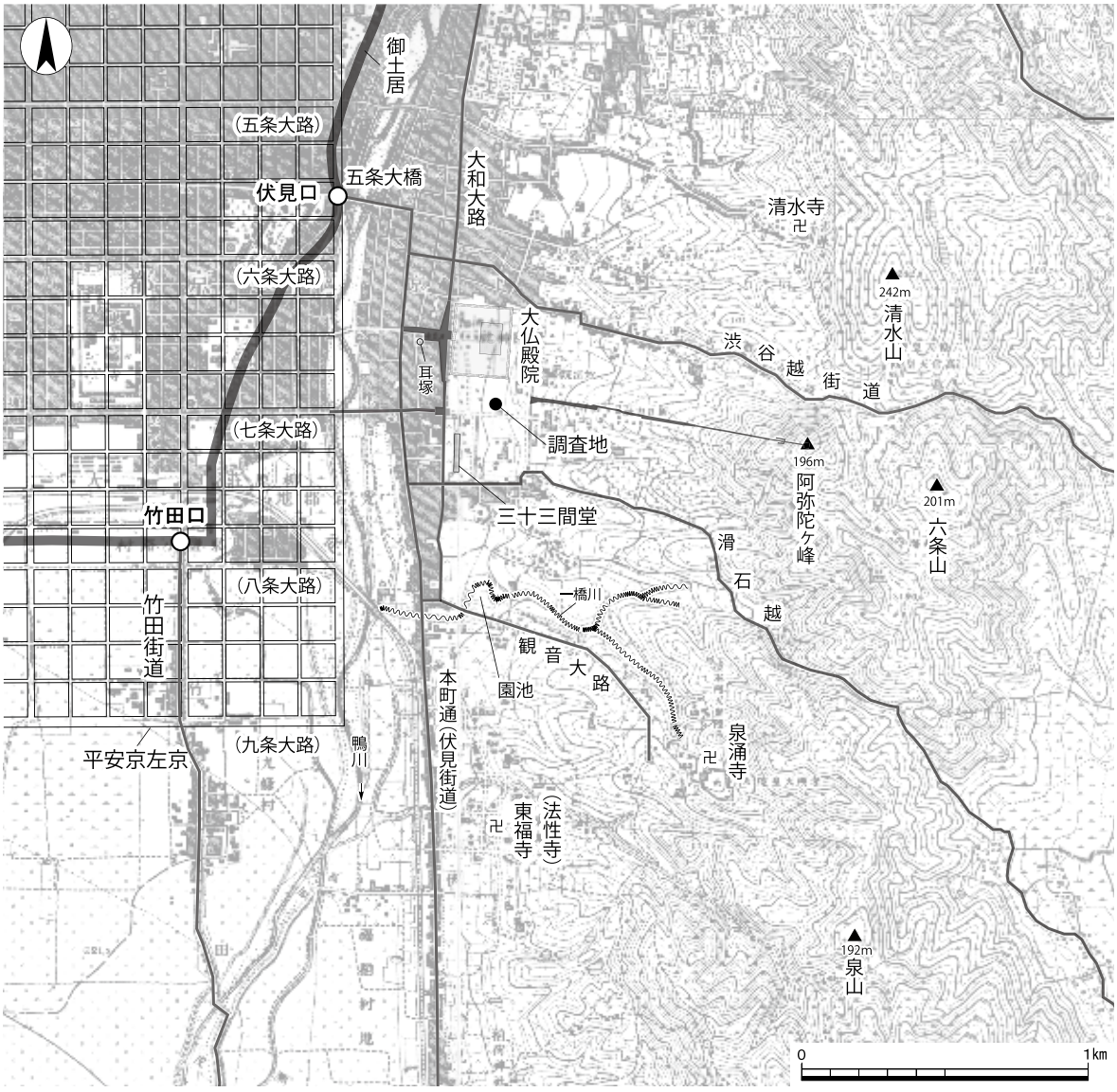


図9　調査地周辺の交通路（1：25,000）

ている。これらは、奈良との主要な往還路である。また、渋谷越えは、東へ分岐して、東海・東山・北陸道へとつながる。調査地の西面には、大和大路通が南北に通る。これは三条通の延長道路から南下する行路である。『明月記』の「法性寺路」〔寛喜三年（1231）八月十九日条〕、『百練抄』の「法性寺大路」（永万元年（1165）十二月十一日条）にあたる。泉涌寺から北西へ斜行する観音大路〔『明月記』天福二年（1234）七月十一日条〕と接し、西折して後述の本町通として南下する。調査地周辺では、大和大路通の西側には本町通（伏見街道）が南北に通る。この起点は、秀吉による五条大橋である。五条大橋は、大仏の造営に併行して、参詣路の整備として新たに造営された。架橋地点は、五条大路末[3)]（現在の松原橋）から南へ約２町（六条坊門小路相当）の地に移された。天正十九年（1591）に築かれた御土居には、伏見口が設けられ、五条大橋を渡って南へ曲がり、伏見まで直進する。大仏殿院仁王門（西門）から西へ延びる道（七条坊門小路末相当）と接続する。また、方広寺西門（崩門）を東限とする七条大路末と交差する。

このように調査地は、東は山科盆地を経て奈良、東海・東山・北陸への行路に接し、西は七条大路末によって平安京と近距離で結ばれている。また大和大路通・本町通（伏見街道）に接する。平安京の周辺地のなかでは、山科、伏見のそれぞれから入京する行路の結節点となっており、奈良との往還路としてはとりわけ至便の地といえる。

（２）歴史的環境

ここでは、史料によって知ることができる調査地周辺の動向についてまとめておきたい。

法住寺　永延二年（988）、藤原為光によって法住寺が造営される。金色丈六釈迦如来像を安置する本堂と法華三昧堂・常行三昧堂がその東西に配置されている（『扶桑略記』永延二年三月二六日条）。整った寺観だったようであるが、その位置については特定されていない。法住寺は、長元五年（1032）十二月八日に焼亡した（『小右記』同日条）。この一帯には、その後、藤原清隆の法住寺堂や信西入道（藤原通憲）夫妻の居住地があった。法住寺堂には、後白河天皇が行幸している〔『山槐記』久寿三年（1156）正月七日条〕。この際、鴨川を渡河し、八条坊門小路末路を用いて堂の西門から入ったという。

法住寺殿　後白河法皇の院御所である[4)]。平治の乱によって焼失した信西の居住跡地に造営され、永暦二年（1161）四月十三日に移徙された（「法住寺殿御移徙部類」『群書類従』巻第八十八所収）。平清盛が造進した蓮華王院（三十三間堂）が法住寺殿の一画に完成し、長寛二年（1164）十二月十七日に供養がなされている（『百錬抄』同日条）。女御の平滋子（建春門院）の御願になる新御堂は、承安二年（1172）二月三日に上棟がなされ、東向きであったことが知られる（『玉葉』同日条）。翌年に最勝光院と号した。法住寺殿は、これら院御所・蓮華王院・最勝光院によって構成されている。院御所は、北殿と南殿があり、両者は七条大路末を境に北と南に所在した。北殿は、七条殿とも呼ばれた。養和元年（1181）十二月十三日には、新御所が造営された（『明月記』同日条）。このほか、後白河法皇の御願として、近江の日吉神・紀伊の熊野権現が勧請され、新日吉神社・新熊野神社が所在する。『年中行事絵巻』巻一「朝覲行幸」は、高倉天皇が両親のもとへ行幸した場面と

みられ、法住寺殿南殿の壮美な様子が描かれている。

寿永二年（1183）十一月十九日には、木曽義仲により法住寺殿は襲撃され、焼失した（『玉葉』同日条）。再建は、源頼朝が諸国に課して実施された（『吾妻鏡』建久二年（1191）二月二一日条）。建久三年（1192）三月十三日、後白河法皇が六条西洞院邸で崩御、同月十五日に法住寺法華堂に埋葬された。法住寺殿の殿舎は、承元三年（1208）、後鳥羽上皇の院御所として新造された三条西殿へ、その一部が移された（「都禅記」『大日本史料』第四編之十所収）。建長元年（1249）三月二三日には、蓮華王院の塔・御堂（三十三間）・千体仏が焼失した（『百錬抄』同日条）。再建は、建長三年（1251）八月十日に上棟（『百錬抄』同日条）、文永三年（1266）四月二九日に供養がなされる（『一代要記』同日条）。

六波羅政庁　範囲については、北辺が五条大路末から六坊坊門小路末、南辺が六条坊門小路末から六条大路末の範囲に推定されており[5)]、ここでは詳しくふれない。

大仏殿　調査地周辺の歴史的推移をみるうえで、法住寺殿とならび重要な画期をなすのは、豊臣秀吉による大仏造営事業である[6)]。天正十六年（1588）五月十五日、大仏殿居礎の儀が行われて造営に着手した（『上下京町々古書明細記』）。天正十九年（1591）五月二十日には立柱（『鹿苑日記』）、文禄二年（1593）九月二四日には上棟が行われた（『多門院日記』同日条）。文禄三年（1594）九月には「大仏瓦葺き初め」（『高野山文書』）、五年（1596）二月二五日には中門が立柱する（『義演准后日記』同日条）。

地震による大破　しかし、文禄五年（1596）閏七月十三日に大地震が発生し（慶長伏見地震）、本尊は大破し、三方の築地は悉く崩れ傾いたという。ただ、大仏殿・中門は損壊を免れた（『義演准后日記』同日条）。慶長二年（1597）の段階では、地震で崩れた築地がいまだ出来ずと記す（『義演准后日記』同年八月二九日条）。なお、この地震で大破した大仏は漆喰で造立されたことが後の記述からわかる（『義演准后日記』慶長七年（1602）十二月四日条）。

秀吉臨終と豊国社　慶長三年（1598）八月十八日、秀吉が伏見城で臨終を迎えた（『舜旧記』同日条）。四年（1599）二月には、阿弥陀ヶ峰の太閤廟の前に社殿（豊国社）が造営され、四月十三日には秀吉の遺体が伏見城から阿弥陀ヶ峰へ隠密に移された。後陽成天皇から「豊国大明神」の神号が勅賜され、十八日に正遷宮が執り行われた（『義演准后日記』同日条）。

大仏復興と火災・寺域拡張　銅の鋳造による大仏復興を豊臣秀頼が計画し、慶長四年（1599）五月七日には、国役として唐銅の供出を諸大名に命じた（『薩摩旧記』）。『義演准后日記』慶長五年（1600）三月十八日条には、七層の大塔、講堂・回廊などの縄張りのことがみえる。また同年五月十二日条には、伏見地震で破損した三十三間堂千手観音像を修復し、さらに「今度大仏の築地を三十三間の西方に築かる、大仏と一所になる」とみえる。ところが、慶長七年（1602）十二月四日、大仏の鋳かけの作業中に失火、完成しつつあった大仏が炎上し、大仏殿とともに灰燼に帰した。回廊は、東辺が焼失したが、残りの部分は消し止められた（『義演准后日記』同日条）。

大仏・大仏殿の復興　慶長十二年（1607）、徳川家御大工の中井正清（大工大和守）が、大仏造営料を受け取るため、江戸より上洛し（『孝亮宿祢日記』同年十二月二三日条）、大仏・大仏殿の復

興の準備が本格化する。それまでの秀吉・秀頼の大仏造営事業は、高野山の僧、木喰応其が継続して指揮を執っていた。しかし応其は、関ヶ原の合戦での立場が影響して造営奉行の任を解かれており、大仏殿再建に際して、徳川家の御大工が棟梁の座についたことは大きな変化であった。

慶長十五年（1610）六月十二日に醍醐寺三宝院の義演によって地鎮が執り行われた（『舜旧記』同日条）。慶長十六年（1611）四月には「大仏柱ことごとく立ちおわんぬ」（『義演准后日記』同月二七日条）とあり、『当代記』慶長十六年十一月条には、大仏殿は「みなハギ柱なり」とある。『義演准后日記』によると、慶長十七年（1612）正月には「大仏瓦を葺く」（同月二九日条）、閏十月「大仏本尊後光金薄押すこと、ことごとく出来す、大座（台）の蓮花大都出来、堂中の敷石過半出来」（同月二十三日条）とあり、慶長十九年（1614）四月には鐘鋳（かねい）がなされた（同月十六日条）。この鐘鋳には、豊臣方と徳川方の双方（片桐且元、板倉重勝）が見物している（『舜旧記』同月十六日条）。六月には鐘楼に釣り上げられた（『舜旧記』同月二八日条）。

幻となった開眼供養　大仏供養については、八月に執り行う予定であった。真言僧と天台僧の席次やそれに関連して開眼供養と殿供養を同日執行とするか、否か、調整がつかず、家康が延期を命じることとなった（『本光国師日記』慶長十九年（1614）七月二六日条）。大仏復興事業については、「大旦那」として秀頼が費用を負担して進めたが、焼失（慶長七年（1602）十二月）後は、将軍家康の「下知」によって事業が可能となっていたことを見逃してはならない。供養の延期決定後、八月には「鐘の銘」と「棟札案」を家康が問題視した（『本光国師日記』慶長十九年八月六日条）。吉日を撰びて執行するはずであった大仏供養は、実現することなく、その年の十二月に大坂冬の陣を迎えた。

豊臣家滅亡後の大仏と豊国社　豊国大明神は大仏殿の内に移され、社頭は壊された（『舜旧記』慶長二十年（1615）七月九日条）。慶長二十年七月九日、妙法院門跡常胤法親王が大仏殿住持になった（『華頂要略』）。これにより大仏・方広寺境内は、江戸時代を通じて妙法院が管理することとなった。

寛文二年（1662）四月八日、方広寺大仏を木像とした（『続史愚抄』）。しかし同年五月一日、大地震により大仏殿崩壊（『玉露叢』）、寛文七年（1667）に復興した（『花洛名所図絵』）。寛政十年（1798）七月一日、落雷によって大仏殿炎上（『師資朝臣記』）。天保二年（1831）には半身像と仮堂として再建（『事々録』）。昭和48年（1973）に天保大仏が火災により焼失した。

『中御門家文書』に含まれる図[7]には、明治３年（1870）に恭明宮の用地として公収される以前の景観が記録されている。これによれば大仏殿院の南面回廊の南側、南門から南へ延びる道よりも東側は、妙法院の院家である日厳院と宝生院が所在していたことがわかる[8]。明治に入って廃寺となった日厳院の方丈は、方広寺の方丈として移築された[9]。恭明宮の設置に伴う調査地周辺の景観（方広寺境内地）の変化については、前節で述べた。明治13年（1880）、豊国社は、大仏殿境内に豊国神社として新社殿が官費で起工された（『豊国神社史』）。明治31年（1898）には、阿弥陀ヶ峰の豊国廟が再興され、墓標や拝殿などが新たに設置され、一新した[10]（『風俗画報』第164号）。

なお、大仏・大仏殿については、秀吉・秀頼期を通じて寺号が定められなかった。「方広寺」の

初見は、河内将芳によれば、寛文五年（1665）成立の『扶桑京華志』にみえる「大仏殿方広寺」あたりかという[11)]。本書では、大仏殿・大仏殿院を含めた寺域や、蓮華王院を含めて秀頼期に寺域が拡張された境内を指す場合は方広寺と称しておく。

（3）既往の調査

京都国立博物館構内では、石塁の石材の一部が落下したことに伴う緊急発掘調査を昭和53年（1978）に行い、石塁の修復工事に伴う発掘調査を昭和57～59年（1982～1984）に実施している。その後に実施された調査は平成６年（1994）であり、この調査を第１次とし、これまで16次におよぶ調査が実施されてきた（表１）。平成６年から平成21年（2009）にかけて京都国立博物館の再整備に伴う発掘調査が断続的に実施された（第１～11次）。平成22・27年（2010・2015）には、旧本館（現呼称、明治古都館）の耐震・免震の施工法の検討のため、建物基礎部分の周囲を対象に発掘調査を実施した（第12次・13次調査）。旧本館の建物基礎周辺においても遺構が良好に遺存していることが判明し、今後の調査に備える観点からさらに範囲を広げて、平成30・31年（2018・2019、第14次）、令和２年（2020、第15次）、令和４年（2022、第16次）に調査を実施した。これらの調査により、大仏殿院については、囲繞施設に旧（築地）・新（回廊）の先後関係が存在することや、新段階では南門の位置と規模を明らかにした。また、明治４年（1871）に竣工した恭明宮に関係する遺構を検出している。

既往の調査については、便宜上、京都国立博物館構内とその周辺地域を区分して示した。前者の位置図を図10・11に、調査一覧表を表１に掲げた。後者の位置図を図12に、調査一覧表を表２に掲げた。調査番号については、京都国立博物館構内での調査は、調査次数と調査区を組み合わせて示し、本文中では「京博」を調査番号の頭部に付した。周辺地域での調査は、１～30までの番号で示した。上記の位置図と調査一覧表の番号が対応する。章末には、これらに対応する文献一覧を掲げた。

弥生時代から古墳時代の遺構は、調査20で大型の土坑状の遺構が検出されている。このほか、弥生時代の遺構は希薄な状況であるが、京都国立博物館構内では、後世の遺構や包含層から中期・後期の土器が少量出土しており、周辺に遺構が存在した可能性を示唆している（文献12）。古墳時代では、調査29において古墳時代前期（庄内式から布留式）の竪穴建物群（10棟）を検出している。奈良時代では、同様に調査29において掘立柱建物５棟が検出されている。平安時代前期では、調査29において、後述する法性寺大路の前身の可能性を有する路面が検出されている。京博３－８では、埋納遺構や土坑が検出されている。

平安時代中期では、調査11で平窯３基が検出されている。平瓦には、「右坊」「右坊城」などの刻印を施すものが多く含まれ、坊城修理に関わる瓦屋に位置付けられる。所在する町名「今熊野池田町」から池田瓦窯と命名された。調査29の北端では、粘土採掘坑の土坑群が検出されており、池田瓦窯との関連が想定されている。

法住寺殿では、街区に関連する成果があげられる。調査10・29では、本町通の東辺に近在して

図10　京都国立博物館構内調査位置図（1：1,500）

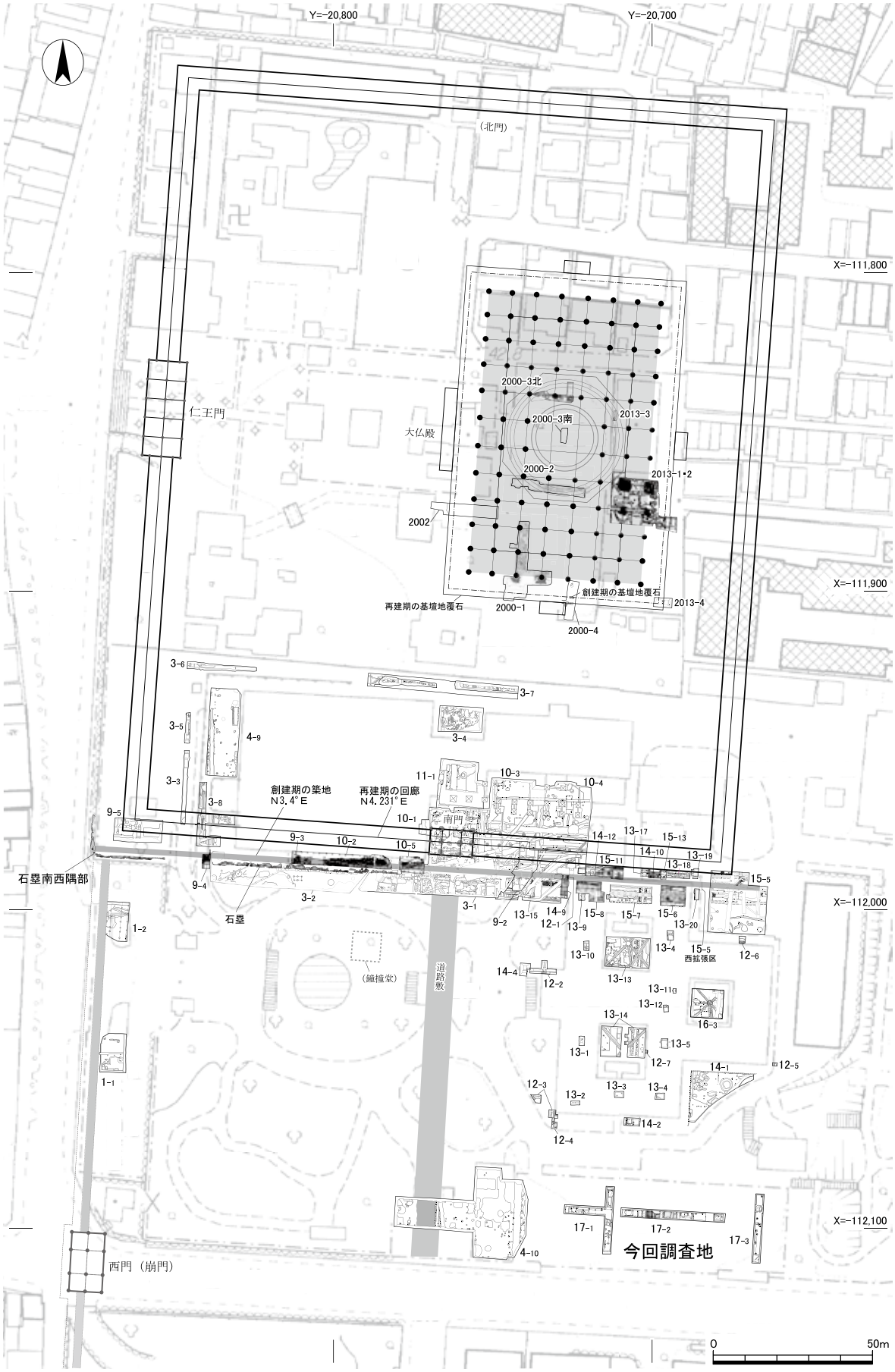
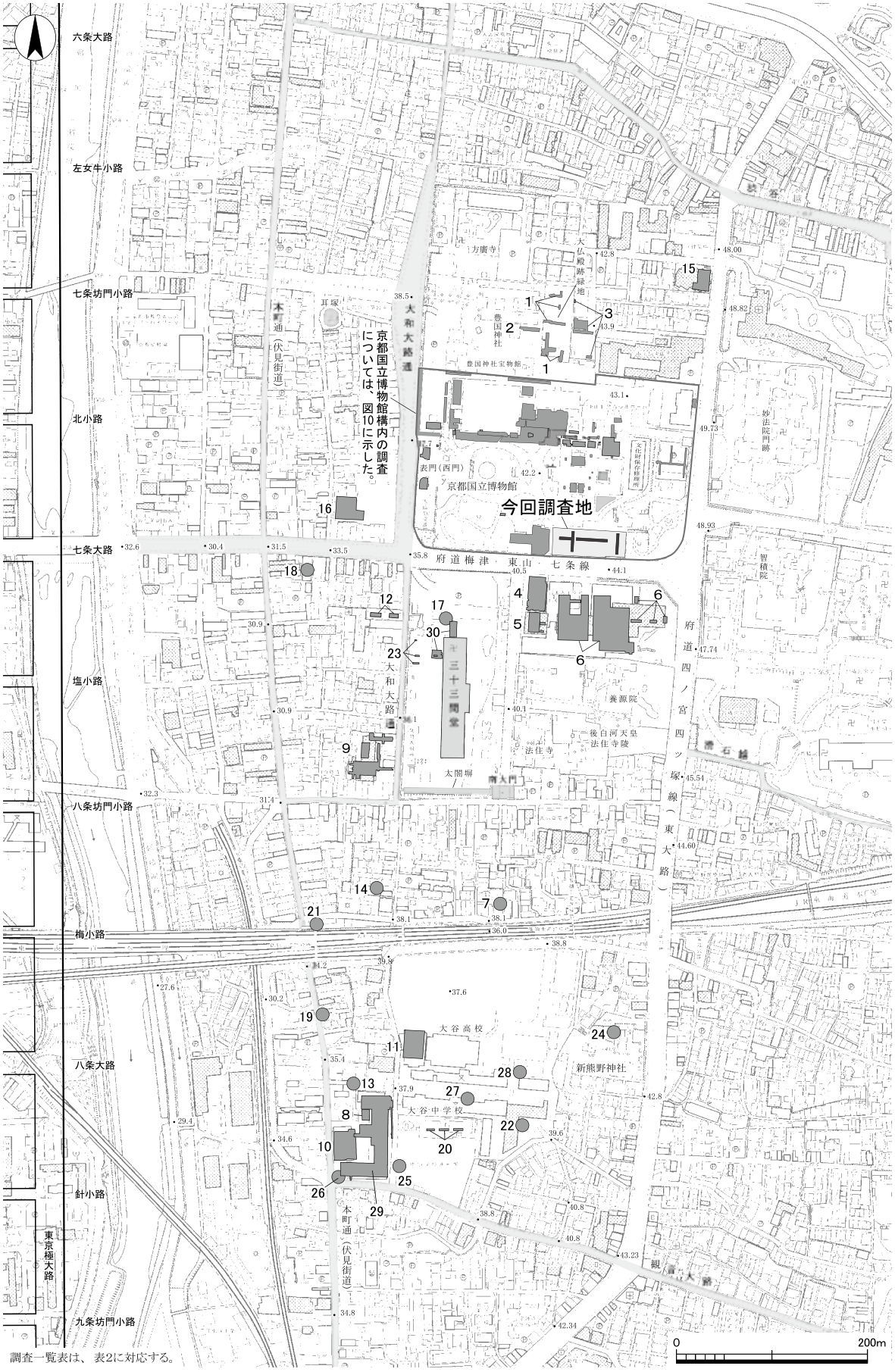


図11　方広寺大仏殿院の復元図と調査位置図（1：1,800）

表１　京都国立博物館構内調査一覧表

調査次数	遺跡名	方法	調査期間	調査機関	検出遺構	出土遺物	文献
(京博1987)	方広寺	発掘	1978.03.22～03.31、1982、1983、1984	京都国立博物館	安土桃山の方広寺大仏殿西面石垣・築地跡。	安土桃山の土器類・石仏など。	1
京博1次	六波羅政庁	発掘	1994.02.24～04.29	京都市埋蔵文化財研究所(鈴木廣司・山本雅和・布川豊治)	平安後期の井戸・柱穴・土坑など、鎌倉～室町の溝・柱穴・土坑、安土桃山～江戸の柵・柱穴・築地・土坑など。	平安後期の土器類・瓦類、鎌倉の土器類。	2・12
京博2次	六波羅政庁	立会	1997.03.24～03.26	京都市埋蔵文化財研究所(小森俊寛)	平安末期～鎌倉のピット・土坑など、中世～近世初頭の遺物包含層、近世～近代初頭の畑の畝。	平安末期～鎌倉の土師器、鎌倉後半期の土師器・瓦器・焼締陶器など、近世初頭の土師器・瓦。	3・12
京博3次	六波羅政庁	発掘	1998.06.01～1999.03.31	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・近藤知子・大立目一)	南側の調査区(2・1区)では、安土桃山の方広寺大仏殿南門(3×2間)とそれに取りつく回廊。門西側で回廊南側で石垣、南西部で梵鐘鋳造遺構。 北側の調査区(4・7区)では、平安後期の南北溝2条、溝間に石敷遺構、両溝間は街路と推定。全域で鎌倉～室町の溝・柱穴・土坑・井戸・石敷遺構など。 西側の調査区(8区)では、平安前期の埋納遺構・土坑、鎌倉～室町の南北道路と側溝・池状遺構など。	4・7区溝などから平安後期の土器類・瓦類。溝・井戸・包含層などから鎌倉～室町の土器類・瓦類。1・2区から安土桃山の土器類・瓦類・鋳造関係遺物。	4・12
京博4次	六波羅政庁	発掘	1999.07.01～2000.03.21	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・近藤知子・大立目一)	南側の調査区(10区)では、平安前期の土坑、後期の東西溝。全域で鎌倉の東西溝・南北溝・井戸・土坑・柱穴など、室町の堀状遺構・溝・土坑・柱穴など。安土桃山～江戸の南北道路と両側側溝を2時期。 北側の調査区(9区)では、鎌倉の南北溝、鎌倉～室町の建物・溝・柱穴・土坑など。	溝・土坑から平安後期の土器類・瓦類が少量、大半は後世遺構に混入。10区井戸・9区溝から鎌倉の土器類。遺構・整地層などから室町～江戸の土器類・瓦類。	5・12
京博5次	六波羅政庁	発掘	2000.09.11～10.13	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子)	全域で平安～鎌倉の柱穴・土坑などを少数、室町の遺物包含層・溝・土坑・柱穴、江戸の井戸・土坑・柱穴など	平安～鎌倉の土器類が少量、鎌倉～江戸の土器類・瓦類が少量。	7・12
00RT-391	方広寺	立会	2001.03.27～11.01	京都市埋蔵文化財研究所(菅田薫・吉本健吾)	江戸末期の南北石垣。		6
京博6次	六波羅政庁	立会	2001.12.17～2002.03.12	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・平方幸雄・上田栄治)	安土桃山～江戸の瓦溜め土坑。	土師器、大型瓦。	8・12
京博7次	六波羅政庁	立会	2003.09.18～09.24	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・西村洋子)	中世の遺物包含層、方広寺の整地層。	平安後期の土師器、鎌倉後期の須恵器、室町後半の焼締陶器、安土桃山の瓦類、明治の白磁・瓦器・ガラス瓶・瓦。	9・12
京博8次	六波羅政庁	立会	2003.11.27～12.15	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・西村洋子・清藤玲子)	京都国立博物館建設に伴う整地層。	中世の土師器、近世の瓦・施釉陶器など。	10・12

調査次数	遺跡名	方法	調査期間	調査機関	検出遺構	出土遺物	文献
07RT-214	方広寺	立会	2007.08.27～08.28	京都市埋蔵文化財研究所（吉本健吾）	江戸末期の南北石垣。	江戸末期の白磁・菊丸瓦・土製品人形。	11
京博9次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2008.02.12～03.25	京都市埋蔵文化財研究所（網伸也）	室町の井戸、安土桃山～江戸初めの方広寺大仏殿南回廊基壇・礎石根固め石跡・南雨落溝・石塁及び裏込地業・東西柱穴列・地業盛土。	室町の土師器・輸入陶器・瓦質土器・焼締陶器・瓦など、安土桃山～江戸初頭の大型巴文軒丸瓦・大仏瓦・桐文軒平瓦・羽口・石仏。	12
京博10次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2008.12.08～2009.03.31	京都市埋蔵文化財研究所（網伸也・加納敬二・辻純一）	室町の井戸・土坑、安土桃山～江戸初めの南門礎石根石群・南門基壇北端地業・南回廊基礎根石群・南石塁裏込地業・水切溝・盛土整地層。	室町の土師器・輸入陶器・瓦質土器・焼締陶器・木製品・砥石・瓦など、安土桃山の土師器・施釉陶器・瓦質土器・瓦・鋳型・炉壁・銅銭など。	13
09RT-89	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	立会	2009.06.08 07.06～	京都市埋蔵文化財研究所（吉本健吾）	平安後期の東西溝・土坑、方広寺所用瓦を多量に含む包含層。	金箔を貼った軒平瓦。	14
京博11次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2009.09.07～11.13	京都市埋蔵文化財研究所（網伸也・加納敬二・田中利律子）	平安後期の門・路面・道路側溝、鎌倉～室町の門・柱列・路面・溝・埋納遺構・土坑・堀、安土桃山の石敷路面・整地層・土坑。	平安の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦など、鎌倉～室町中期の土師器・須恵質土器・輸入陶磁器・瓦質土器・焼締陶器・木製品・砥石・瓦など、室町後期～安土桃山の土師器・輸入陶磁器・瓦質土器・焼締陶器・瓦・鉄製品など、江戸後期～明治の染付・近世陶磁器・瓦など。	13
京博12次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2010.08.16～09.10	京都市埋蔵文化財研究所（高橋潔）	幕末～明治初頭の整地層、近代の本館基礎・整地層。	幕末～明治の初頭の土師器・陶磁器・染付・桟瓦など。	15
京博13次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2015.07.01～2016.03.29	京都市埋蔵文化財研究所（上村和直・辻裕司・山下大輝）	鎌倉～室町の土坑・溝、安土桃山～江戸中期の回廊・溝・土坑・柱穴、江戸後期～明治の溝・築地・柱列。	鎌倉～室町の土器類・瓦類、安土桃山～江戸中期の土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦類・石製品、江戸後期～明治の土師器・陶器・磁器・瓦類・石製品・ガラス製品。	16
京博14次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2018.10.22～2019.03.22	京都市埋蔵文化財研究所	平安の井戸・土坑、安土桃山～江戸中期の溝・布掘り・築地(礎石列・石列)・柱列・石組・土坑、江戸後期の井戸・柱列・柱穴・土坑・溝、明治以降の柱列・土坑・溝・埋設管・集水桝・旧本館建物基礎。	平安の土師器・輸入陶磁器・木製品、室町の土師器、安土桃山～江戸中期の土器類・土製品・瓦類・石製品・金属製品、江戸後期の土器類・土製品・瓦類、明治以降の土器類・瓦類・土製品・煉瓦・石製品・金属製品。	17
京博15次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2020.09.28～2021.05.27	京都市埋蔵文化財研究所			
京博16次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2022.01.14～02.28	京都市埋蔵文化財研究所			
京博17次	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	試掘	2023.06.26～09.29	京都市埋蔵文化財研究所（古閑正浩）	鎌倉の溝・井戸・土坑・整地土、安土桃山～江戸前期の溝・土坑・整地土、江戸後期の池状遺構・土坑・柱穴列・柵・ピット列、江戸末～明治初期の整地土。	平安後期～鎌倉の土師器・輸入陶磁器・木製品・瓦類、安土桃山～江戸前期の土器類、瓦類、土製品、江戸後期の土器類・瓦類、江戸末～明治初期の土器類、瓦類。	本報告



調査一覧表は、表2に対応する。

図12　周辺主要調査地位置図（1：6,000）

表２　周辺調査一覧表

番号	推定地	方法	調査期間	調査機関	所在地	検出遺構	出土遺物	文献
1	大仏殿 （方広寺）	試掘	2000.07.03 ～08.23	京都市埋蔵文化財研究所 （近藤知子・ 田中利津子）	東山区茶屋町地内（大仏殿緑地公園）	全域で桃山時代の方広寺大仏殿基壇を検出。大仏殿は西面南北棟で、中央に8角形須弥壇。	桃山時代の瓦類が全域から少量出土。	18
2	大仏殿 （方広寺）	発掘	2002.07.22 ～08.09	京都市埋蔵文化財研究所 （近藤知子・ 田中利津子）	東山区大和大路通正面茶屋町（豊国神社）	桃山時代の方広寺大仏殿基壇西辺を検出。	桃山時代の瓦類が全域から少量出土。	19
3	大仏殿 （方広寺）	発掘	2013.10.01 ～11.21	京都市埋蔵文化財研究所 （南 孝雄）	東山区茶屋町地内	大仏殿基壇下層で室町時代の土坑などを検出。桃山時代から江戸時代の大仏殿基壇や壷地業・柱穴・礎石抜き取り穴を検出。	室町時代の土師器皿が出土。桃山時代の瓦類が出土。江戸時代後半の土器類が出土。	20
4	法住寺南殿	発掘	1965.11.05 ～12.16	京都府教育委員会 大石良材	東山区三十三間堂廻り644 （赤十字血液センター）	調査区南半部で平安時代後期の遺物包含層を検出し、上面は東側に向かってわずかに高くなる。上層では江戸時代の園池跡・建物跡などを検出。	平安時代後期の瓦類が遺物包含層から出土。	21
5	法住寺南殿	発掘	1976.12.01 ～ 1977.01.31	京都市埋蔵文化財研究所 （吉村正親）	東山区三十三間堂廻り （赤十字血液センター）	平安時代後期の遺構は未検出。全域で室町時代の遺物包含層を検出。上面で室町時代～江戸時代の建物・柵・石敷・土坑・溝などを検出。	平安時代後期の瓦類が遺物包含層などから出土。中世～江戸時代の土師器・陶器なども出土。	22
6	法住寺南殿	発掘	1978.07.20 ～11.20	古代学協会 （片岡肇・ 寺島孝一・ 植山茂ほか）	東山区三十三間堂廻り644-2 （パークホテル）	調査区中央部で平安時代後期の南北溝を検出。中央南端で鎌倉時代の方形溝・甲冑を埋納した方形土坑を検出。方形溝の内側は仏堂、土坑は墓と推定された。調査区北部で中世の井戸7基を検出。	平安時代後期～鎌倉時代の瓦が井戸から大量に出土。中世の土器類が井戸を中心として少量出土。	23
7	法住寺南殿	立会	1980.01.12	京都市埋蔵文化財研究所	東山区上池田町34	地表下1.2m以下は地山。	なし。	24
8	最勝光院	発掘	1982.10.16 ～11.15	京都市埋蔵文化財研究所 （吉川善彦・ 久世康博）	東山区本町十丁目東入下池田町527 （一橋小学校）	全域で平安時代後期の建物基壇を検出、上面に轍跡がある。基壇下層で掘立柱建物を検出。	平安時代後期の土器類が基壇下層の遺物包含層を中心に出土。	25
9	蓮華王院	発掘	1983.04.21 ～06.24	京都市埋蔵文化財研究所 （上村和直）	東山区七軒町575	調査地東端部で平安時代後期の南北街路を検出。同時期の南北棟建物を調査地北部で1棟、中央部で1棟、西端部で1棟検出。いずれも上面が削平されるが、石組み雨落溝が廻る。建物はいずれも焼失する。全域で中世以降の遺構を検出。	平安時代後期の瓦類が側溝・後世遺物包含層から、土器類が建物雨落溝から少量出土。	26
10	最勝光院	発掘	1983.06.01 ～09.03	京都市埋蔵文化財研究所 （平尾政幸・ 梅川光隆・ 辻 純一）	東山区本町十丁目東入下池田町527 （一橋小学校）	調査区西側で平安時代後期の南北溝を検出、溝の西側は路面、東側は一段高まり、南北築地と推定された。築地推定地の下では石積み地業を検出。鎌倉時代の溝・井戸などを調査地北東部で検出。	平安時代後期の瓦類、瓔珞などが井戸から出土。	27
11	最勝光院・ 池田瓦窯	発掘	1983.07.19 ～11.03	法住寺殿跡遺跡調査会 （杉山信三ほか）	東山区今熊野池田町 （大谷中・高等学校）	調査区北側で平安時代後期の園池南側汀線を検出。調査区南部で同時期の東西方向水路を検出。下層で平安時代中期の窯跡を検出。	平安時代後期の瓦類が瓦溜・園池などから大量に出土、水路・園池から土器類が出土。	28

番号	推定地	方法	調査期間	調査機関	所在地	検出遺構	出土遺物	文献
12	蓮華王院	試掘	1987.09.17 ～09.22	京都市埋蔵文化財研究所 (久世康博)	東山区北斗町546-2 (大和病院)	調査地東部で平安時代後期の南北街路(路面・西側溝)を検出。街路は調査7の続きと推定される。	平安時代後期の瓦類・土器類が側溝から少量出土。	29
13	最勝光院	立会	1988.04.04 ～	京都市埋蔵文化財研究所	東山区本町十丁目162	掘削深-0.85m以下不明。	土師器小片。	30
14	法住寺南殿	立会	1988.04.25	京都市埋蔵文化財研究所	東山区上池田町538	地表下1.4mで池状堆積土を検出。	なし。	31
15	北東部	発掘	1990.03.05 ～04.20	京都市埋蔵文化財研究所 (高橋 潔)	東山区馬町通妙法院北門前妙法院前側町424-1	調査区南東部で平安時代後期の井戸1基を検出。室町時代～江戸時代の遺物包含層などを全域で検出。	平安時代後期の瓦類・土器類が井戸から出土。	32
16	法住寺北殿	発掘	1990.06.02 ～08.23	京都市埋蔵文化財研究所 (上村和直)	東山区大和大路正面下る大和大路二丁目543	調査区南東部で平安時代後期の井戸を1基、全域で柱穴・土坑を少数検出したが残存状況は悪い。調査区中央部で鎌倉時代の南北棟西門と南北両側に取り付く塀を検出。これらの西側と東側には同時期の溝がある。全域で中世以降の土坑などを検出。	平安時代後期の瓦類・土器類が井戸から少量出土。鎌倉時代～室町時代の土器が各遺構から大量に出土。	33
17	蓮華王院	試掘	1990.11.28	京都市埋蔵文化財研究所	東山区三十三間堂廻り657、642、654	地表下1.5mで平安時代末期～鎌倉時代の池汀を検出。	平安時代後期～鎌倉時代の土器が出土。	34
18	蓮華王院	立会	1991.04.16 ～04.18	京都市埋蔵文化財研究所	東山区本町六丁目3	平安時代後期の東西溝1条を検出。室町時代の柱穴・東西溝3条を検出。	平安時代後期の土師器・瓦が出土。室町時代の土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦が出土。	35
19	法住寺跡	立会	1992.06.17 ～08.11	京都市埋蔵文化財研究所	東山区本町十一丁目地先	地表下0.18mで路面層を検出。	土師器小片、窯体片が出土。	36
20	法住寺南殿	試掘	1996.11.11 ～11.16	京都市埋蔵文化財研究所	東山区本町十丁目東入下池田町527 (一橋小学校)	調査地東側で弥生時代～古墳時代の大型土坑を検出。西側で平安時代後期～鎌倉時代の掘込地業を検出。西端で鎌倉時代～室町時代の柱穴を検出。	土師器小片が出土。	37
21	法住寺南殿	立会	1996.08.20 ～09.24	京都市埋蔵文化財研究所	東山区JR東海道線北側、本町通～東大路通	地表下0.94mで整地層を検出。	土師器皿が出土。	38
22	法住寺南殿	立会	1996.11.11 ～12.02	京都市埋蔵文化財研究所	東山区今熊野池田町12 (大谷高校)	地表下2.0mまで盛土。	土師器、須恵器が出土。	38
23	蓮華王院	試掘	1997.09.24 ～09.27	京都市埋蔵文化財研究所	東山区三十三間堂廻り657、654、642	三十三間堂西隣で平安時代後期の地業を確認。大和大路沿いの境内西端で南北方向の太閤塀の痕跡を検出。	平安時代の須恵器・瓦が地業内から出土。桃山時代の瓦が多量出土。	39
24	新熊野神社	立会	1999.09.09 ～09.10	京都市埋蔵文化財研究所	東山区今熊野椥ノ森町15-1 ～4、42	時期不明の柱穴・土坑を検出。	土師器小片が出土。	40
25	最勝光院	立会	2000.01.25 ～02.07	京都市埋蔵文化財研究所	東山区本町十丁目東入下池田町527 (一橋小学校)	地表下0.86mで江戸時代の遺物包含層を検出。	江戸時代の土器類・瓦類が出土。	41

番号	推定地	方法	調査期間	調査機関	所在地	検出遺構	出土遺物	文献
26	観音寺大路	立会	2001.04.02 ～04.26	京都市埋蔵文化財研究所	東山区本町十丁目東入下池田町527(一橋小学校)	地表下0.48mで時期不明の柱穴・落ち込みを検出。		42
27	大池	立会	2006.07.07 ～07.11	京都市埋蔵文化財研究所	東山区今熊野池田町12	地表下0.82mで地山を確認。	なし。	43
28	大池	立会	2007.06.20 ～06.25	京都市埋蔵文化財研究所	東山区今熊野池田町12	地表下0.54mで地山を確認。	なし。	44
29	最勝光院	発掘	2012.01.10 ～07.31	京都市埋蔵文化財研究所(小檜山一良・上村和直・津々池惣一)	東山区本町十丁目東入下池田町527(元一橋小学校)	古墳時代前期の竪穴住居・溝・土坑を検出。奈良時代の掘立柱建物を検出。平安時代中期の土取り穴、後期の建物地業・土坑・柱穴・路面・道路側溝・濠を検出。鎌倉時代前期の井戸を検出。室町時代の路面・道路側溝・柱穴・土坑を検出。近世以降の柱列・井戸・土坑・溝などを検出。	弥生時代後期と古墳時代前期の土器類が出土。奈良時代の土器類が出土。平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・輸入磁器・瓦・金属製品・木製品などが出土。鎌倉時代～室町時代の土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・瓦類・金属製品などが出土。近世以降の土師器・陶磁器などが出土。	45
30	蓮華王院	発掘	2016.04.04 ～05.28	京都市埋蔵文化財研究所(中谷正和・松本啓子)	東山区三十三間堂廻り642・647	三十三間堂の創建期の大規模な地業を検出。	縄文・弥生土器。土器類は、平安時代前期・後期、鎌倉時代、江戸時代(17世紀代)がある。平安時代後期の三十三間堂の創建期の瓦類が出土。	46

南北溝や路面を検出している。南北溝は、本町通の方位と平行しており、本町通の前身道路「法性寺大路」の東側溝に比定される。また、調査10では、この溝の東側に高まりが遺存し、築地の存在が想定されている[12)]。調査９・12の東端は、南北溝が検出されている。東面する大和大路通の前身道路の西側溝に比定される。調査９では、路面も一部で確認されている。京博３－４・３－７・11－１では南北方向の東西両側溝や路面が検出されている。道路の規模は、約３ｍ前後である。その南側にあたる京博４－10では、七条大路末の北側溝に想定される東西溝と南北道路の東側溝の交差点が検出されている。この東側溝は、北側の側溝とは整合せず、路面幅が広がっているとみられる。七条大路末については、この地点よりもさらに東へ敷設されているのか、明らかではない。

法住寺殿の範囲では、多くの遺構を検出している。代表的な例としては、調査６がある。法住寺殿を含む前後の時期に比定される土坑からは、５領以上の甲冑、弓矢・馬具などがまとまって出土し、武将の墓とみられている。調査11では、園池の汀に関する遺構を検出している。この園池の痕跡を示す窪地は、明治の仮製図からも読み取れる（図９）。この園池の北岸付近に南殿の主要施設の存在が想定されている。調査30では、創建期の三十三間堂の地業跡を検出している。法住寺殿の時期の遺構は多く検出されているが、寝殿などの主要施設の存在を明確に示す遺構の検出例はまだみられない。

大仏殿については、多くの成果がある。調査１では、大仏殿基壇南辺の地覆石・束石と階段東側の耳石、大仏台座、礎石据え付けの壷地業、基壇上面の花崗岩製の四半敷きを検出した。基壇南辺は慶長期に拡張されていることが判明した。調査２では、基壇西辺で雨落ち溝を検出した。調査３では、基壇東辺、礎石据え付けの壷地業、大仏台座などを検出した。

大仏殿院の土壇は、西面・北面・南面が巨大な石塁で区画されており、西面・北面と南面の一部が露出している。埋没していた南面石塁（京博３－１、３－２、９－４）を検出している。大仏殿院の囲繞施設は、回廊と築地が検出されており、回廊が新しい時期にあたる。先述の史料では、慶長伏見地震で秀吉期の築地が崩れ、秀頼によって回廊が造営されたことを記録する。発掘調査はこの変遷を裏付けた。再建期の回廊とその関連施設としては、南面回廊（京博３－１、９－２、10－１、10－３、13－15）、南面回廊の南雨落ち溝（京博３－１、９－２、12－15、13－15）、南面回廊南柱筋から約7.2ｍ南でこれと平行する東西方向の幹線溝（13－15、15－５～８）、南面回廊に開く南門（京博３－１、10－１）、南門から南へ延びる路面西肩の石垣（京博３－１）が検出されている。創建期では、東面築地（京博15－５）、築地の北雨落ち溝（京博13－15、15－５～８）、築地芯から南側約5.5ｍの位置でこれと平行する東西方向の幹線溝（京博13－15、15－５～８）を検出している。回廊の南雨落ち溝が築地の北雨落ち溝の位置をほぼ踏襲している。検出した築地南辺寄せ柱の礎石のほぞ穴を西へ延長すると、石塁の南西隅角の巨石上面に穿たれたほぞ穴に対応する（文献17－41～44頁）。

大仏殿院の南側では、南門から南へ延びる道路跡（京博４－10）が検出されている。重層する２面の路面を検出しており、創建期と秀頼の再建期に比定される。秀頼期では、当初の路面に約1.5ｍの盛土を施工した上で路面を敷設している。これは、先述の史料からうかがえる秀頼の寺域の拡張

整備に関わるものであろう。建造物では、南大門と西門（崩門）もこの寺域拡張の際に設けられたとみられる。三十三間堂の南東隅に所在する南大門は、大仏殿院南門と南北に結ばれており、京博４－10の道路跡はこの一部が検出されたものである。なお、京博４－10では、平安時代後期の七条大路末北側溝を下層の遺構面で検出している。しかし崩門通の整備は七条大路末を踏襲せず、大仏殿の方位に準じて施工されたとみられる。

恭明宮については、敷地東半部の南北幹線溝（京博10－３、10－４、13－15、４－10)、敷地の東限を画する南北溝（京博13－13、13－14、15－７）が検出されている。恭明宮の施設配置の詳細な図としては「恭明宮造営出来形絵図[13)]」が残されており、これら主要遺構と対応させることによって全体像の位置関係が明らかとなっている（文献16－巻頭図版３)。

註

１） 恭明宮と発掘調査の成果については、以下の文献で簡略にまとめられている。
上村和直「明治時代の恭明宮－京都国立博物館の調査－」『リーフレット京都』№349　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館　2018年

２） 若杉準「帝国博物館の開館」『京都国立博物館百年史』　京都国立博物館　1997年

３） 平安京の外におよぶ条坊延長の道路名は、条坊道路名に「末」を付して表現する。

４） 法住寺殿の史料や空間の構成については、主に以下の文献を参照した。
朧谷 寿「文献学的考察」『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯　財団法人古代学協会　1984年
上村和直「法住寺殿の成立と展開」『研究紀要　第９号』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年
上村和直「法住寺殿の考古学的検討」『院政期の内裏・大内裏と御所』平安京・京都研究叢書１　文理閣　2006年

５） 高橋慎一郎「武家地六波羅の成立」『日本史研究』352　1991年

６） 大仏造営の推移については、以下の文献を参照した。
京都市『京都の歴史』10　年表・事典　学芸書林　1976年
京都市『史料 京都の歴史』10　東山区　平凡社　1987年
河内将芳『秀吉と大仏造立』　法蔵館　2008年
河内将芳『秀吉没後の豊臣と徳川 京都東山大仏の変遷からたどる』　淡交社　2023年

７） 『中御門家文書』（早稲田大学古典籍総合データベース文書12Ｆ0061「恭明宮用地建物絵図」、Ｆ0070「恭明宮関係書籍」早稲田大学図書館蔵）

８） 長宗繁一「大仏殿復元試案－発掘調査成果からのアプローチ－」『日本史研究』698　2020年

９） 永井規男「日厳院の古指図とその客殿遺構」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東)』2513頁　1984年

10） 神谷正弘「明治三十年京都豊国廟再建と巨石運搬について」『考古学論集』第１集　考古学を学ぶ会　1985年

11） 前掲註６）　河内2008　55・56頁

12） 前掲註４）　上村2004

13） 『中御門家文書』（早稲田大学古典籍総合データベース文書12Ｆ0058「恭明宮造営出来形絵図」、Ｆ0058「恭明宮関係書籍」早稲田大学図書館蔵）

【調査関連文献】（表１・２の文献番号に対応する）

1　『史跡方広寺石塁修復工事報告』　京都国立博物館　1987年

2　鈴木廣司・山本雅和「六波羅政庁跡」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

3　小森俊寛「六波羅政庁跡」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998年

4　田中利津子・近藤知子・大立目 一「六波羅政庁跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000年

5　田中利津子・近藤知子・大立目 一「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

6　菅田 薫・吉本健吾「法住寺殿・六波羅政庁跡（00RT391）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』　京都市文化市民局　2002年

7　田中利津子「六波羅政庁跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

8　田中利津子「六波羅政庁跡」『平成13年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

9　田中利津子・西村洋子「六波羅政庁跡１」『平成15年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

10　田中利津子・西村洋子・清藤玲子「六波羅政庁跡２」『平成15年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

11　吉本健吾「法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡（07RT214）」『京都市内遺跡立会調査報告　平成19年度』　京都市文化市民局　2008年

12　山本雅和・網 伸也・田中利津子『京都国立博物館構内発掘調査報告書－法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009年

13　網 伸也・加納敬二・田中利津子ほか『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009－8　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年

14　吉本健吾「法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡（09RT89）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度』　京都市文化市民局　2010年

15　高橋 潔『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010－10　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年

16　上村和直・山下大輝『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015－14　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016年

17　小檜山一良『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021－13　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2022年

18　近藤知子・田中利津子「方広寺大仏殿跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

19　田中利津子「方広寺大仏殿」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成14年度』　京都市文化市民局　2003年

20　南　孝雄「方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度』　京都市文化市民局　2014年

21 『埋蔵文化財発掘調査概報1965－1967』 京都府教育委員会 1967年
22 伊藤 潔「法住寺殿跡」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
23 寺島孝一ほか『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯 古代學協会 1984年
24 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
25 久世康博・吉川義彦「法住寺殿跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
26 久世康博・上村和直「法住寺殿跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
27 平尾政幸・梅川光隆・辻 純一「法住寺跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
28 杉山信三ほか『大谷中・高等学校構内遺跡発掘調査報告書』 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 1984年
29 久世康博「法住寺殿跡（RT26)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』 京都市文化観光局 1988年
30 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』 京都市文化観光局 1989年
31 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
32 高橋 潔「六波羅政庁跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
33 上村和直・西大條 哲「六波羅政庁跡」『平成２年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
34 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成２年度』 京都市文化観光局 1991年
35 小松武彦「法住寺殿跡（91RT６)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成３年度』 京都市文化観光局 1992年
36 『京都市内遺跡立会調査概報 平成４年度』 京都市文化観光局 1993年
37 小森俊寛「法住寺殿跡」『平成８年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
38 『京都市内遺跡立会調査概報 平成８年度』 京都市文化市民局 1997年
39 網 伸也「法住寺殿跡」『平成９年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
40 『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』 京都市文化市民局 2000年
41 『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
42 『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 京都市文化市民局 2002年
43 『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』 京都市文化市民局 2007年
44 『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』 京都市文化市民局 2008年
45 小檜山一良・上村和直・津々池惣一『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012－10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
46 中谷正和・松本啓子『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016－3 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

3．遺　　構

（1）基本層序

基本層序（図版２～６） 基本層序は、１区・２区に関しては共通の番号を付した。大区分として基本層序を把握し、これを構成する小区分の層序をアルファベットで表記した。基本層序の設定に際しては、全体を通覧したうえで、地形的に最も下位にあたる１区西半の南壁断面（図版３）を基準とした。これらは、１～６層に区分される。

１層は、現地表面の表装（アスファルト・コンクリート・グリ石）の直下にあたり、黄褐色・オリーブ色を基調とする粘質土で、煉瓦を少量含む。京都国立博物館の建設に伴う造成土とみられる。

２層は、１層の直下にあたり、盛土造成によって堆積した層である。その分布は、２区の西半から１区全域にかけて、３区全域の二つの範囲に区分される。前者は、基盤層（６層）が西へ傾斜した地形を平坦地化するために施工した盛土（２a～２e層）であり、包含する遺物の下限は、幕末から明治初期にあたる。これは、恭明宮の建設に伴う整地層に比定される。なお、２区においては、上述した２層の東端（Y＝－20,703.6）よりも東側一帯では、切り土によって２～４層が存在せず、基盤層の直上に１層が堆積している。恭明宮もしくは、帝国京都博物館の建設時に削平を受けたことが想定される。

３・４層は、２層と同様の分布範囲を示す。２層と同様な堆積要因が想定される。ただし、分布の東半にせよ、西半にせよ、２層に比して薄い層であり、部分的である。

５層は、２区のほぼ中央部に分布し、６層の微弱なくぼみを整地するための層である。したがって６層と同一の遺構面を形成する層といえる。５a～５cと５d層に区分され、包含する遺物や上面で成立する遺構の時期から、前者は、大仏殿再建期（秀頼期）、後者は14世紀以前に比定される。

６層は、調査地一帯の地形を形成する基盤層にあたる。明黄色を基調とする扇状地性の堆積層である。

３区については、基盤層上の堆積が１区・２区とは異なるため、別番号を付した（図版６）。１層は現代盛土層、２・３層は、南を高くするために施工した盛土層である。当該敷地に南面する七条通は、明治末期から大正初期にかけて施行された京都市の都市基盤整備事業によって拡幅され、京都市電の東山線の敷設〔大正元年（1912）開業〕に伴って東大路通に交叉させたものである。３区の２・３層は、これに際してなされた盛土層に比定される。調査地と七条通の現況地盤の関係は、七条通が高い。これが七条通の盛土によるものか、調査地の切り土によるものか、判然としなかったが、３区に調査区を設定したことによって、前者であることが明らかとなった。４・５層も２・３層と同様に南を高くするための盛土層であるが、３層と４層の間に溝309・溝312が開削されており、２・３層と４・５層の盛土には、明確な時期差を伴っていたことがわかる。４・５層は明治時代中期の七条通敷設に伴う盛土層に比定される。６層は基盤層である。

表３　遺構概要表

時代	調査区	基本層序（遺構成立面）	遺構	方位	概要
平安時代後期～室町時代前期	1区	6層（基盤層）上面	溝111	N1.4°E	南北方向の溝か。平面形態は、南にむけて舳先状に細くなる傾向を示す。
	2区	5d層（整地層）上面	井戸206		素掘りの井戸。平面形は、検出面では円形。
		5d層（整地層）上面	土坑222		井戸206埋没後に掘り込まれた土坑。
	3区	6層（基盤層）上面	井戸302		隅丸方形の素掘りの井戸。埋土の下半では、木製の端材が大量に出土し、これらは籌木の可能性がある。トイレに転用された可能性を有する。
桃山時代～江戸時代前期	2区	6層（基盤層）上面	落ち込み210		基盤層の西側への落ち込み。この上位に整地層5b・5a層が堆積する。
		6層（基盤層）上面	溝215	N2.0°W	基盤層が西側へ落ち込んだ裾部に開削された南北方向の溝。この上位に整地層5b・5a層が堆積する。
江戸時代前期	2区	5c層（整地層）上面	溝214	N0.1°W	南北溝。鞴の羽口・鉄滓が出土。
		5d層（整地層）上面	溝203	N8.4°E	南北溝。底面は、南に向けて深さを増す。
		5d層（整地層）上面	土坑202		隅丸方形状の土坑。金箔が部分的に遺存する道具瓦が出土。
		5d層（整地層）上面	土坑204		隅丸方形状の土坑。
江戸時代後期	1区	6層（基盤層）上面	柱穴列147	N4.6°E	柱穴3基による南北の柱穴列。
		6層（基盤層）上面	柵145	N3.3°E	小規模な柱穴による東西の柵。
		6層（基盤層）上面	柵146	N3.2°E	小規模な柱穴による東西の柵。
		6層（基盤層）上面	池状遺構101	N10.7°E	南肩を検出。底面は二段の落ち込みで、調査区北端では水溜状の方形の落ち込みを確認。
		6層（基盤層）上面	土坑102		溝111の埋土を掘削した土坑。鶴と亀の立体的な文様を施した瓦質土器炉が出土。
		6層（基盤層）上面	土坑137	N16.0°E	方形の土坑。底面の中央には隅丸方形の落ち込みがみられる。
		6層（基盤層）上面	土坑138		土坑137の東辺に接して開削される。埋土の切り合いは、土坑137より後出する。開削時は、併存していた可能性を有する。
	2区	6層（基盤層）上面	溝221	N0.5°W	基盤層が落ち込む裾部に開削された南北溝。
		5a～5c層（整地層）上面	柵229	N12.5°E	柱は、掘立柱建物ではなく、棒杭状とみられる。
		5d層（整地層）上面	土坑201		大規模な土坑。大仏瓦を含む瓦類が多く出土した。
	3区	6層（基盤層）上面	柱穴列322	N3.8°E	柱穴314と321で構成された南北の柱穴列。柱穴314は、柱の掘形と柱痕を明瞭に残す。
		6層（基盤層）上面	ピット列323	N3.8°E	柱穴311と315で構成されるピット列。柱穴列322と同じ方位で配置されているため、単独のピットでない可能性がある。
幕末～明治時代	1区・2区	2a～2e層（整地層）	整地		2区の西半から1区にかけて基盤層の落ち込む範囲に施工した大規模な整地。
	2区	2e層（整地層）上面	土坑220		
	3区	4層上面	溝305	N5.7°E	土管を埋設した溝。
		4層上面	溝309	N1.7°E	東西方向の溝の北肩を検出。
		4層上面	溝312	N46.3°E	溝309の埋没後に開削された溝。方位は斜行する。

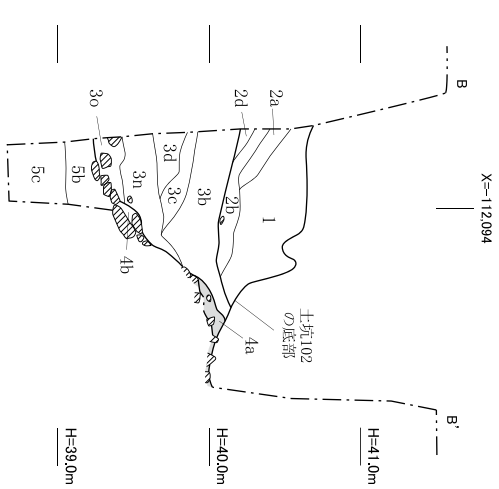
基本層序と検出面との関係　遺構の検出作業は、基盤層である６層上面と、一部は整地層である５層上面で行った。検出した遺構の時期は、平安時代後期から明治時代までの長期におよぶ。平安時代後期から室町時代までの遺構は、大規模な溝や井戸などの深い遺構のみ遺存している状況であり、これらが調査地の広い範囲にわたって分布している状況を考慮すると、本来は、これに伴う他の遺構が存在したことを想定させる。この時期の遺構は、江戸時代後期までの間に広範囲にわたって、削平を受けたことが想定される。

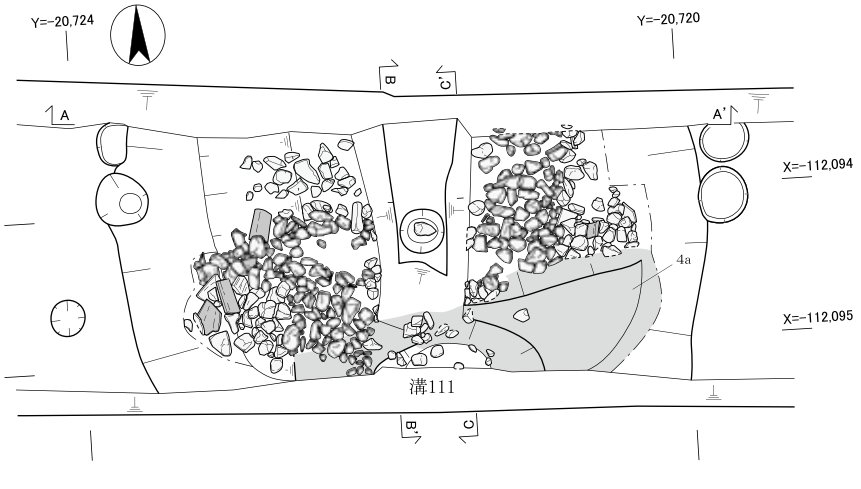
明治時代の遺構は、２区西半・１区の２層上面、３区の４層上面で成立する。ただし、この面では、検出作業は実施していない。これら上位の遺構については、５・６層上面で検出した平面図と２区西半・１区の２層、３区の４層の分布範囲を図示するにとどめた。

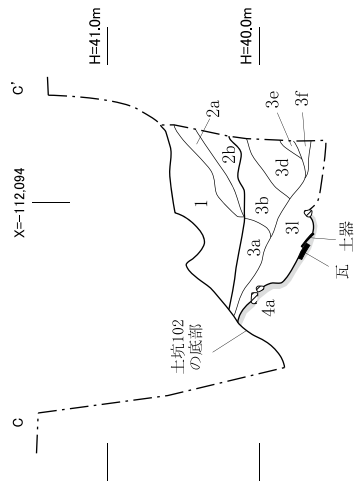
（２）平安時代後期から室町時代初期の遺構

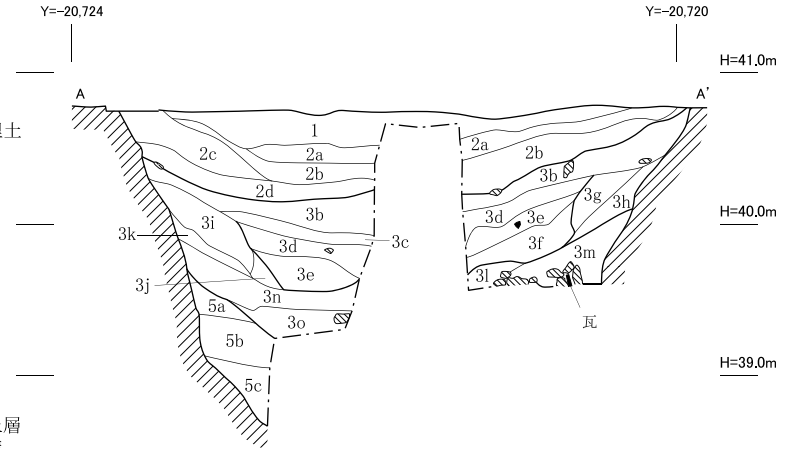
当該期の遺構は、溝111、井戸206、井戸302があげられる。いずれも深い遺構のみが遺存した状況であり、当該期の遺構面は、先述のように、江戸時代後期までの間に削平を受けたことが想定できる。また、調査地が所在する敷地の東隣接地では、高位の扇状地の崖が存在し、３区の遺構面との比高差は約6.2ｍを測る。調査地周辺一帯が東から西にかけて形成された扇状地の緩傾斜面に立地していることを考慮すると、当該期に井戸や溝が分布している状況は、これら遺構の構築の前提として、まず、切り土による平坦地の造成がなされたことを想定させる。溝111の出土遺物には、６Ａ段階（12世紀後半）の土師器の一群が含まれており、これより以前に遺構の上限年代を求めることが可能である。また、３者の遺構からは、平安時代後期の瓦が少なからず出土する状況を考慮すると、当該地における平坦地造成の端緒は、法住寺殿の造営に求められる可能性が高いであろう。また、井戸206の検出面は、基本層序の整地層５ｄ層を基盤としている。これもまた、平坦地造成に伴うの不陸調整の痕跡として位置付けられる。

溝111（図13、図版８・９）　1区西半で検出した南北方向の溝である。最大幅は3.88ｍ、深さ2.08ｍ以上を測る。平面形態は、南にむけて舳先状に細くなる傾向を示しており、遺構の性格が単なる溝であったのか、速断できない。後述するように埋土中に存在する礫群を基本的には保存し、一部を掘削して、最深部にむけて掘削するようつとめたが、底面を確認するには至っていない。埋土は、５層に区分される。人為的な埋め戻しによる層を１・２層、下位の礫群上層に堆積した層を３層、礫群に伴う堆積を４層、礫群以前の堆積を５層とした。１・２層は、ブロックを顕著に含む褐色系の粘質土で、層厚約0.5ｍを測る。人為的に埋め戻された堆積層とみられる。２層の中には、江戸時代後期の瓦類が含まれており、この時期に完全に埋め戻されたことが知られる。３層は褐色系の粘質土で、傾斜して堆積する下位の礫群の頂部を覆うように堆積する。４層は、礫群とこれに伴う堆積層である。礫群は、溝の中心から幅3.0ｍの範囲に分布し、南北方向では、調査区全域にみられる。溝の主軸に直交する北向き斜面を形成する。斜面の勾配は約45° 前後を測る。礫は亜角礫で、拳大もしくは両拳大程度のものが大半を占める。礫は、組み合って堅固に構築された状況はみられず、粘質土層によって形成した斜面の上面に対して不規則に充填した状況を呈する。西半で









1 10YR3/3暗褐色粘質土に2.5Y6/2灰黄色ブロック多く混じる
10YR2/1黒色粘質土が少し混じる
2a 10YR3/3暗褐色粘質土に2.5Y6/2灰黄色ブロック少し混じる
10YR2/2黒褐色粘質土が少し混じる
2b 10YR3/3暗褐色粘質土に2.5Y6/2灰黄色ブロック少し混じる
10YR2/1黒色粘質土ブロック混じる
2c 7.5YR2/3極暗褐色粘質土に2.5Y6/2灰黄色・10YR2/2黒褐色・5YR2/4極暗赤褐色粘質土が混じる
2d 7.5YR2/3極暗褐色粘質土に10YR2/1黒色ブロック混じる

1・2層
近世埋土

3a 7.5YR2/3極暗褐色粘質土に10YR2/1黒色・2.5Y6/2灰黄色ブロック混じる
3b 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
3c 7.5YR4/2灰褐色粘質土
3d 7.5YR3/4暗褐色粘質土
3e 7.5YR3/2黒褐色粘質土
3f 10YR3/3暗褐色粘質土に10YR4/4褐色ブロック少し混じる
3g 7.5YR4/2灰褐色粘質土
3h 7.5YR3/3暗褐色粘質土
3i 7.5YR3/4暗褐色粘質土に10YR4/6褐色ブロック多く混じる
10YR2/2黒褐色ブロック少し混じる
3j 10YR3/4暗褐色粘質土
3k 10YR2/3黒褐色粘質土
3l 10YR3/3暗褐色粘質土
3m 10YR4/2灰褐色粘質土に10YR5/6黄褐色ブロック少し混じる
10YR6/4にぶい黄褐色ブロック混じる
3n 10YR3/1黒褐色粘質土
3o 7.5YR3/1黒褐色粘土

3層
礫群上層
の堆積

4a 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土（礫群の直上を覆う堆積）
4b 10YR3/4暗褐色粘質土

4層
礫群に伴う堆積

5a 10YR4/2灰黄褐色粘土
5b 7.5YR3/1黒褐色粘土に10YR6/6明黄褐色・10GY6/1緑灰色がまだらに混じる
5c 7.5YR3/2黒褐色粘土に10GY6/1緑灰色が線状に混じる

5層
礫群下層の堆積

4a層：（礫群の直上を覆う堆積）

0 2m

図13 溝111実測図（1：50）

は、数点の平瓦が出土している。礫の頂部には、赤褐色系の粘質土が覆うように堆積している（4a層）。一部は、土坑102によって掘り込まれている。礫群の頂部は標高40.16ｍ、溝肩部は標高40.78ｍを測る。５層は、黒褐色系の粘土層で、礫群下層は、滞水していた状況を示している。

礫群は、溝内の人為的な構造物とすれば、土と礫による固定的な井堰の可能性もあるが、そもそも溝であるのか否かも含めて検討が必要である。

井戸206（図14、図版12）　２区で検出した。平面形態は、検出面では円形を呈する。長軸2.0ｍ、深さ1.5ｍ以上の規模を測る。南半部を土坑201に切られる。埋土は、１～６層に区分される。１層は、礫混じりの人為的な埋め土。これ以下で特徴的なのは３層である。黄褐色と黒褐色の互層で、自然のラミナ状の堆積状況を示す。この前後の層は、いずれも黒褐色系の粘質土である。掘削作業では試掘としての性格上、埋土の全掘を避けたが、断面として残した埋土の崩落が激しく、1.5ｍの深さまでで掘削を停止した。井戸の側面からの湧水はみられなかった。

土坑222（図14）　井戸206の埋没後に掘り込まれた土坑である。検出した幅が0.69ｍ、深さ0.72ｍを測る。埋土は単層で、ブロックが少量混じる暗褐色系の粘質土である。

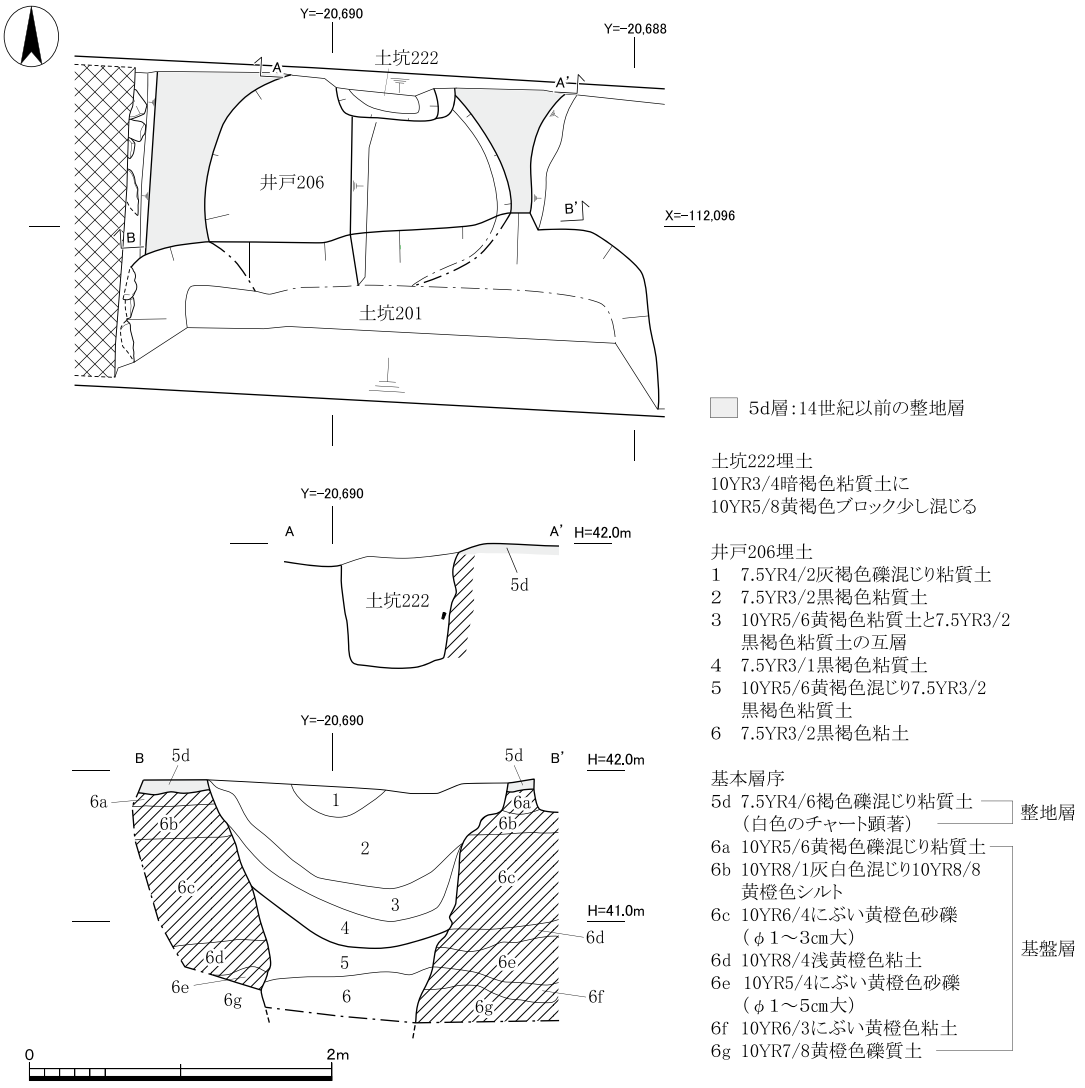


図14　井戸206・土坑222実測図（１：50）

井戸302（図15、図版14）　３区北半で検出した。平面の形態は、正方形に近い隅丸方形を呈するが、南西隅付近がやや不整形である。規模は南北2.08ｍ、東西1.94ｍ、深さ1.95ｍ以上を測る。作業の安全性を考慮して、埋土の途中で掘削を停止した。埋土は、３段階に大別できる。上層の１層は近代の堆積土が混入している。中層は２～５層が相当する。２層、４・５層が壁際に分布し、３層が中央に堆積している。１層を除去した段階で、平面精査を行い、２層と４・５層が掘形埋土であると仮定して、３層の掘削を先行した。６層上面に達したところで、２～５層全体を半截して掘削し、断面観察を行ったところ、２・４・５層は掘形埋土ではないことを確認した。以下、６～10層まで、半截状態で掘削した。６～10層では、木製の端材を多く含み、この共通性から、これをまとめて下層として区分した。ここに含まれる木製の端材は、端辺が約10㎜前後、厚さ0.3㎜前後にまとまり、一部は檜扇や、折敷を二次的に端材として切り出したものも含まれる。水分を多く含む粘土層であるため、木質が遺存しやすい環境ではあるが、それにしても多量であり、木製品の製作過程で生じた端材とみた場合、他の形状の棒材・板材・角材がほとんどみられないことから、これらの端材は、トイレで使用される籌木である可能性もある。

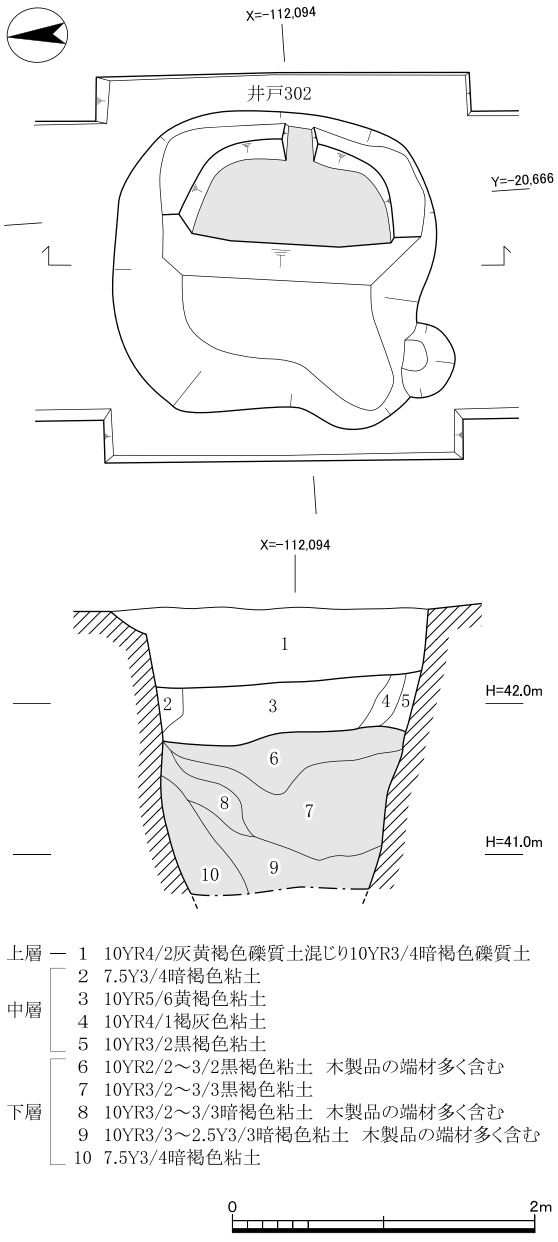


図15　井戸302実測図（１：50）

掘削範囲においては、木製の井戸枠の痕跡が存在しないが、平面や断面形状、規模は井戸状を呈する。開削当初は、井戸として機能していたものが、湧水状況や空間利用の変化などによって、トイレに用途を変更したことも解釈の一案に含めておくべきであろう。

（３）桃山時代から江戸時代前期の遺構

基本層序の整地層５a～５c層を除去して、基盤層上面で検出した落ち込み210、溝215がこの時期に比定される。整地層５a層からは、16世紀後半に位置付けられる天目茶椀などが出土し、整地層５c層上面で検出した溝214からは、鞴の羽口や鉄滓が出土している。後者の出土遺物は、鉄製品の工房が周囲に存在したことを想起させ、大仏殿の創建や再建との関わりが注目される。こうし

た層序と出土遺物の関係を理解するうえで、参考となる調査成果としては、西側隣接地での調査（京博４次調査10区）をあげることができる。ここでは、大仏殿院南門から南へ延びる路面を上下２面で検出している。当初の基盤層直上の路面を秀吉期、整地土によって地盤面を約1.5ｍ上昇させた路面を出土遺物などから秀頼期に比定している。こうした点を考え合わせると、本調査地における整地層および溝214は、秀頼の大仏殿再建期に位置付けられ、整地層の施工以前の遺構を大仏殿造営当初、もしくはそれ以前に比定できる。

落ち込み210　２区西半で検出した。幅0.75～0.88ｍ以上、深さ約0.1ｍを測る。埋土は、整地層５b層である。基盤層の西側へ向けての自然の落ち込みとみられる。

溝215（図版11）　２区西半で検出した。幅0.9ｍ、深さ0.1ｍを測る。方位はＮ2.0° Ｗを測る。基盤層が東から西へ向けて緩やかに傾斜する斜面裾に位置する。埋土は、整地層５a層とほぼ同様の暗褐色系の粘質土であり、整地の施工時に埋没したものとみられる。溝の機能としては、東側から西側へむけて流下する表面排水を受け、南へ排水するためのものとみられる。

（４）江戸時代前期の遺構

基本層序の整地層５d層上面で検出した遺構のうち、溝203・土坑202・土坑204、整地層５c層上面で検出した溝214がこの時期に比定される。

溝203（図16、図版13）　２区中央の整地層５d層上面で検出した。方位はＮ8.4° Ｅである。幅0.54～0.7ｍで南側ではやや幅が広がる。深さは北端と南端では異なり、北端で0.48ｍ、南端で0.79

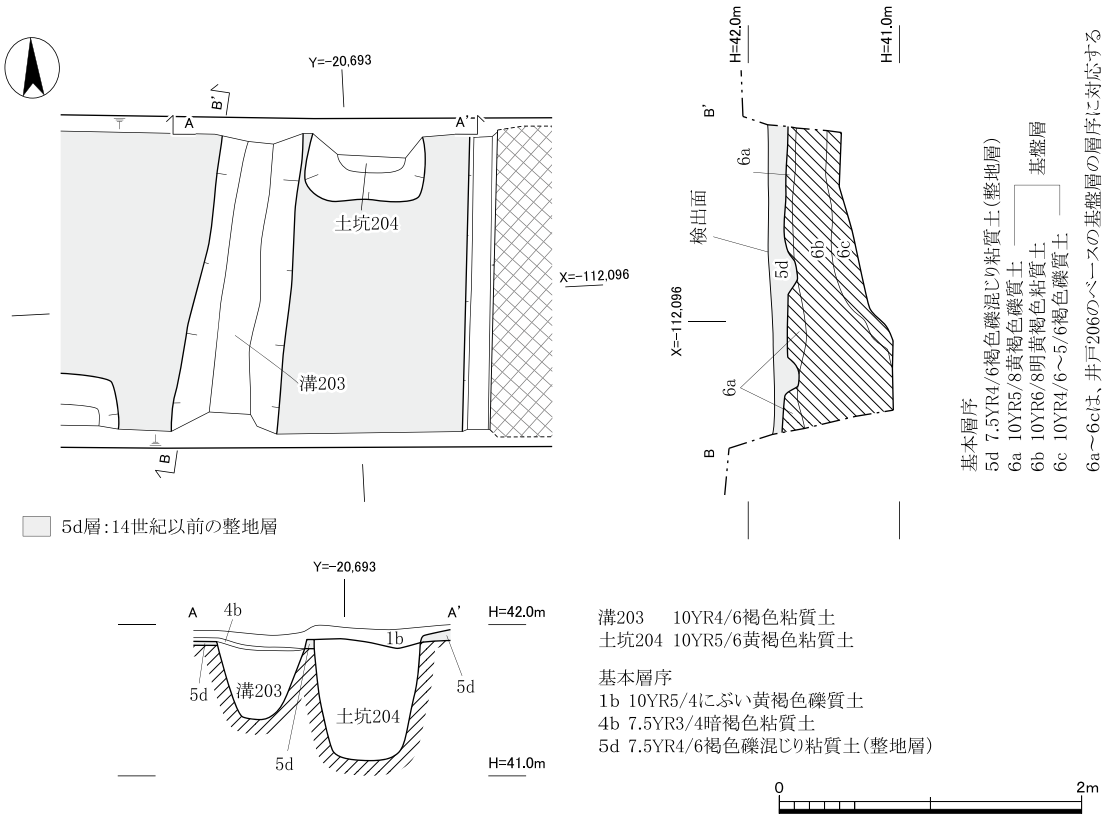


図16　溝203・土坑204実測図（１：50）

mを測る。西側面の基盤層の断面を図16（B－B’断面）に示したが、基盤層は、６b層が軟質で、６c層が固く締まる。溝の底面の縦断面も６b層と相似形を呈しており、基盤層のなかでも固い６c層を少し掘り込んだところで掘削を停止している。埋土は褐色系の粘質土で、ほぼ単層で埋没する。調査区南壁断面では、層厚0.1mの黄褐色系の粘質土が上層に存在する。

溝214（図版11）　２区西半の整地層５c層上面で検出した。土坑220によって北半部分は破壊されている。幅0.28～0.35m、深さ0.05～0.16mを測る。溝の底面は、南へ傾斜する。埋土は、明赤褐色の焼土混じりの粘質土で、炭が混じる。鞴の羽口、鉄滓が出土した。この溝の周囲では、層厚約５～10㎜前後の炭層（図版５－４b層）が整地層上面に分布する。周囲に鉄製品の生産工房が存在したことを示唆している。

土坑202（図版13）　２区中央で検出した。幅0.8m、深さ0.55mを測る。南半は調査区外にあたる。埋土は、３層に区分され、１層は橙色系の粘質土、２層は褐色系の礫混じり粘質土、３層は褐色系の粘質土である。用途不明の道具瓦がまとまって出土し、そのうち２つの破片には、金箔が遺存している。

土坑204（図16）　２区中央で検出した。幅0.79m、深さ0.8mを測る。北半は調査区外にあたる。埋土は黄褐色系の粘質土である。

（５）江戸時代後期の遺構

今回の調査では、この時期の遺構を最も多く広範囲に検出した。遺構面は、極緩やかに傾斜する２段の平坦面が存在し、その境界は、２区の溝221にあたる。溝221は、高さ約0.7mの斜面裾に位置する。これより西側の１区では、池状遺構101や、水溜めの機能が想定できる土坑137などの貯水関係の遺構や、柱穴列147、柵145・146などの遺構が存在する。溝221以東では、土坑201が存在する程度で、空間として利用されたとみられるが、東端では、掘立柱から礎石に変容した柱穴列323がある。ただ、これらすべての遺構が同時に併存したとは断定できない点に留意が必要である。柵145・146については、柱穴の重複関係はみられないが、方位がほぼ共通することや、柱筋の心々距離が0.4mと近接することから、先後関係にあった可能性がある。

柱穴列147（図17）　１区東の南半で南北２間の柱穴列を検出した。方位はＮ4.6° Ｅである。柱掘形の形状は、ほぼ正円を呈し、直径約0.4mを測る。柱間の心々間は1.95m等間である。柱穴130・133では、掘形埋土が確認できる。柱穴の深さは約0.1mである。掘立柱建物を構成する柱穴列の可能性もある。

柵145（図18）　１区中央で東西５間分を検出した。東西ともに調査区外にも存在する可能性がある。方位はＮ3.3° Ｅである。柱間は、柱穴114・119間が0.9m、柱穴119・139間が4.0m、柱穴139・103間が3.9m、柱穴103・144間が1.0m、柱穴144・143間が2.0mである。柱穴は、楕円形を呈し、直径約0.3mである。検出面からの深さは約0.05～0.2mを測る。

柵146（図18）　柵145の南で東西５間分を検出した。方位はＮ3.2° Ｅである。柱間は、柱穴142・120間が1.8m、柱穴120・118間が1.95m、柱穴118・140間が2.0m、柱穴140・107間が1.95m、

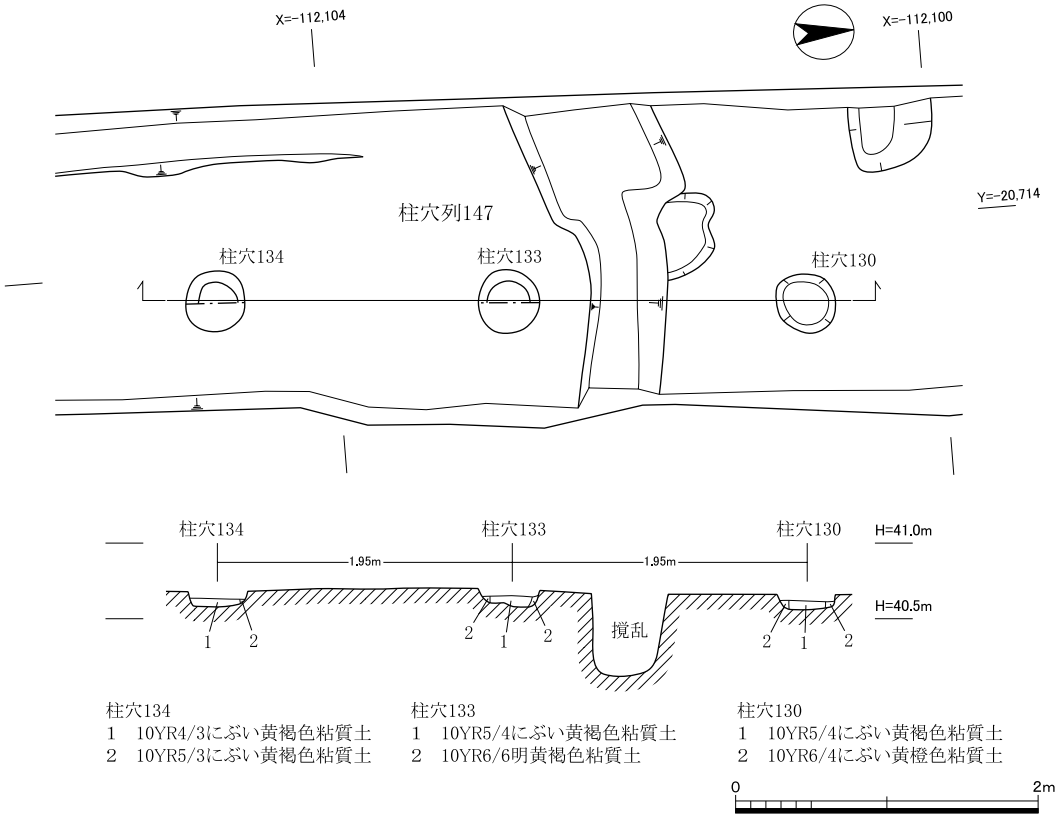


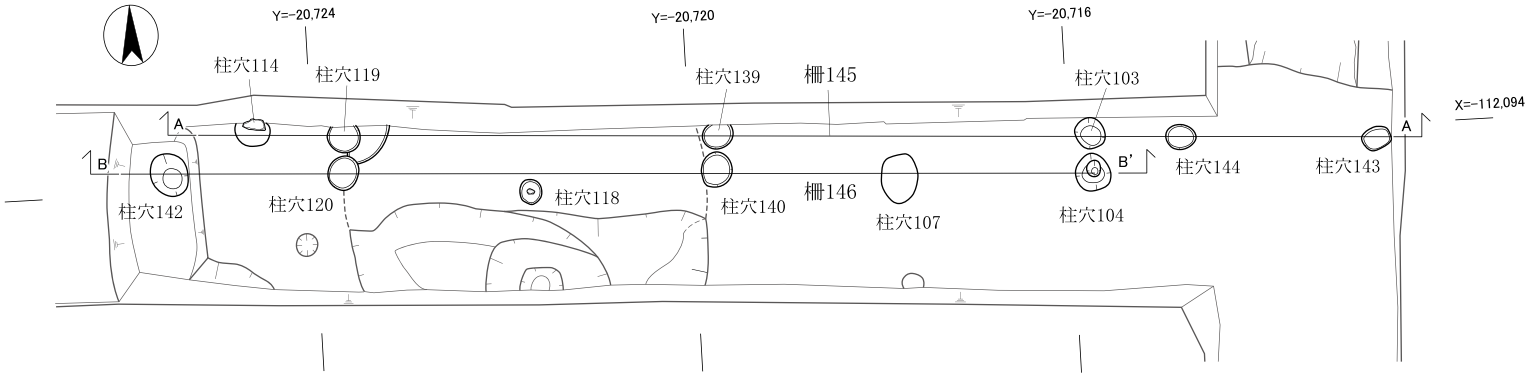
図17　柱穴列147実測図（１：50）

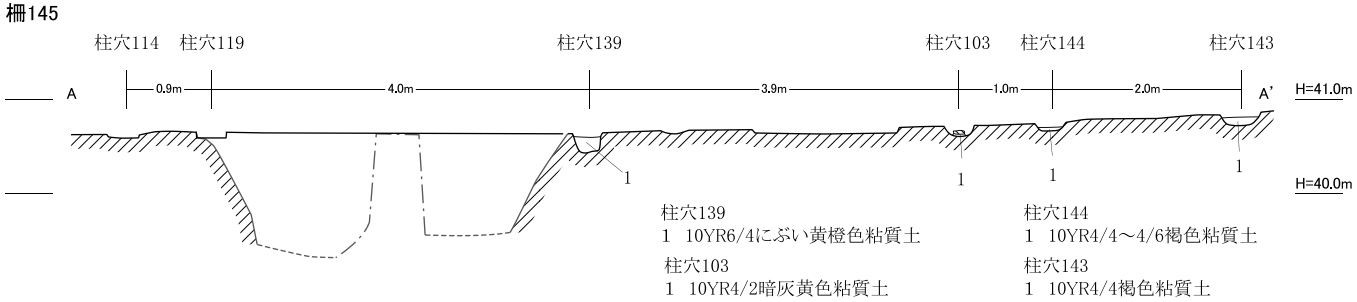
柱穴107・104間が2.0ｍである。ほぼ1.95ｍ前後の等間に近い。柱穴は、楕円形を呈し、直径約0.3ｍを測る。検出面からの深さは0.4～0.6ｍを測る。柱穴118では地下式礎石が用いられている。

池状遺構101（図版10）　１区北端で南辺肩部のみ検出した。肩部の方位は約Ｎ10.7°Ｅである。肩部の斜面は約60°を測る。底部は、２段に成形されている。肩部からの斜面裾は、深さ1.1ｍであり、そこから北側にかけて2.8ｍの長さの平坦面が存在する（第１段平坦面）。この平坦面の北側には、南北2.1ｍ、東西1.5ｍ以上の方形基調に掘り込む土坑が存在する。水溜めの機能が想定される。土坑の西辺・東辺は検出できていない。土坑底面の西辺の深さは、検出面から1.5ｍを測る。東辺はさらに深く落ち込み、底面は確認できていない。湧水が極めて激しい。

土坑102（図19、図版９）　１区西半で溝111と重複関係にあり、土坑102が後出する。方形基調の掘り込みであり、南辺以外を検出した。東西幅は3.76ｍ、深さは0.87ｍを測る。東西幅は、溝111の埋土の範囲に合致しており、溝111の埋没後、部分的に掘りなおして土坑としたものと位置付けられる。断面形は、緩やかで不整形なＵ字状を呈し、中央部は、平面が楕円形状の落ち込みを有する。この楕円形の東西幅は1.3ｍを測る。

土坑137（図20、図版10）　１区中央で検出した。方形基調の土坑である。北辺と南辺を検出した。西辺は調査区外にあたり、東辺の上位は土坑138によって掘り込まれるが、側面は遺存している。北辺・南辺間の距離は1.95ｍを測る。北辺の方位はＮ16.0°Ｅである。北辺の斜面はやや緩やかではあるが、南辺の斜面は、ほぼ90°に近い。断面は、方形基調である。底面は、検出面から深さ1.28ｍで平坦面（第１段底面）を成形し、中央部に隅丸方形状の土坑が存在する。最深部は、検出





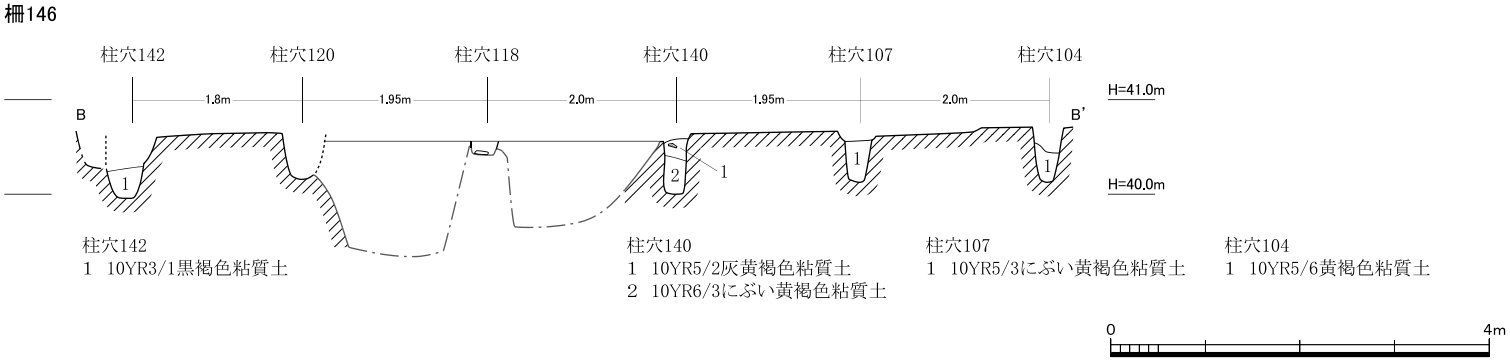


図18 柵145・146実測図（1：80）

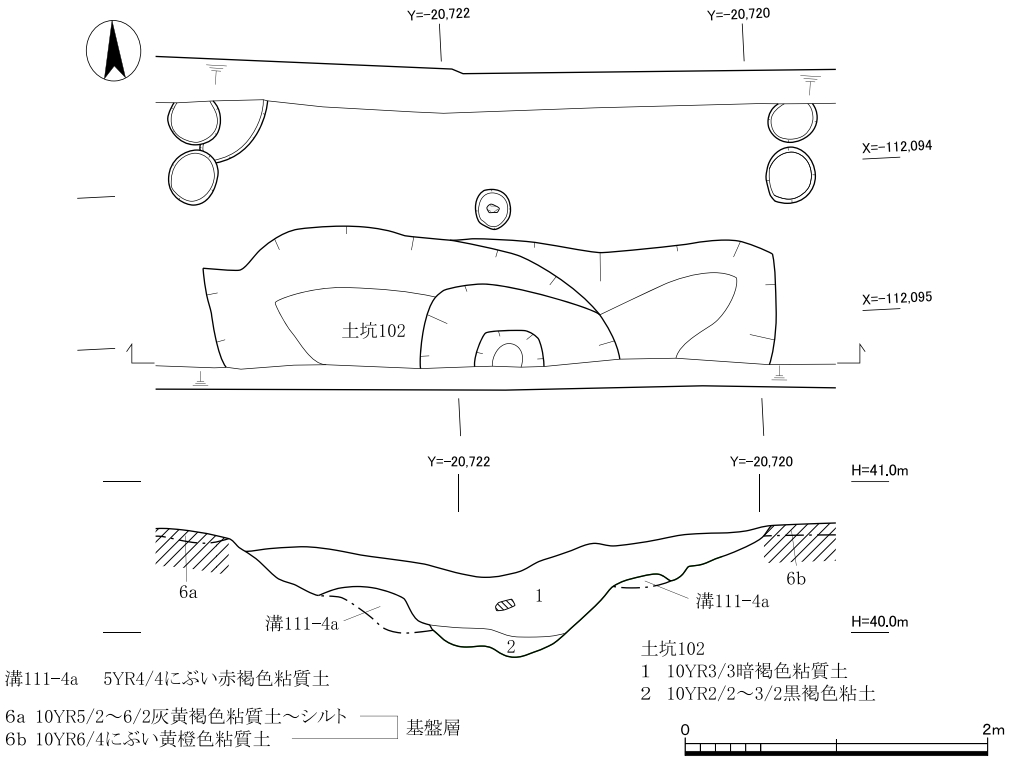


図19　土坑102実測図（１：50）

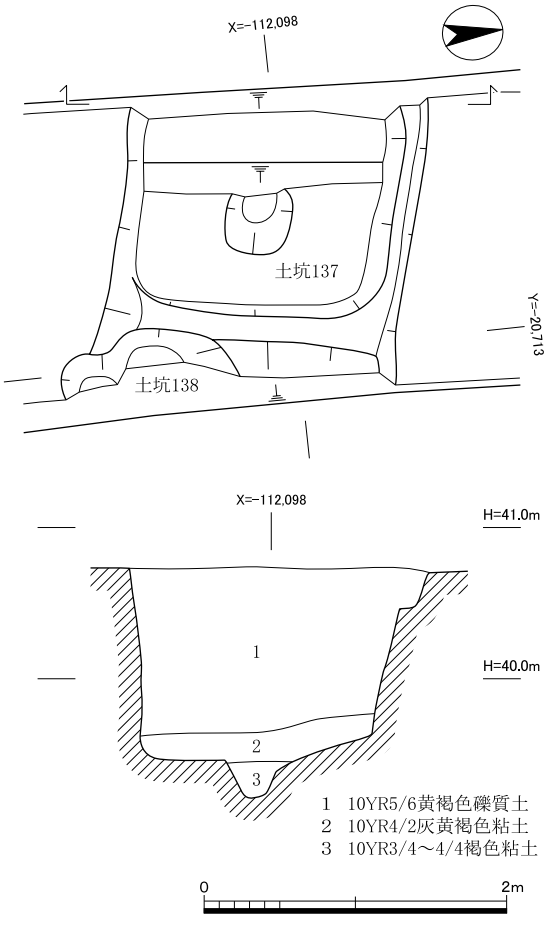


図20　土坑137実測図（１：50）

面から1.5ｍを測る。土坑は、南北幅が0.42ｍで、第一段底面からの深さ0.22ｍを測る。湧水が激しく、水溜め状の機能が想定される。

土坑138（図20、図版10）　１区中央で西辺部分を検出した。土坑137と重複する。最上面の埋没は、土坑138が後出する。土坑138の西辺と土坑137の東辺は近接し、土手状を呈する。この土手状の厚みは0.16ｍであり、その上端は検出面から約0.2ｍ低い位置にあたる。土坑138の南北の規模は2.15ｍで、土坑137とほぼ等しい。断面は方形を呈し、南よりに土坑状の落ち込みが存在する。第一段底面の深さは、検出面から0.45ｍ、土坑状の落ち込みの最深部は、検出面からの深さ0.8ｍを測る。土坑137の埋没後、この東に近接して、これと同様な遺構として土坑138が掘削された可能性もある。あるいは、機能時には土坑137と土坑138の両者が併存した可能性もある。土坑138の平面形が、土坑137と同様であるなら、沈殿槽が連接する水溜め状の遺構である可能性もある。

溝221　２区西半の基盤層が東から西へ傾斜する斜面裾に位置する。方位はＮ0.5° Ｗである。幅0.33～0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。表面排水を斜面裾で受け、南へ排水するための機能が想定される。

柵229（図21）　２区西半の整地層５ａ～５ｃ層上面で成立する柱穴４基３間分を検出した。方位はＮ12.5° Ｅである。柱穴218は、基盤層上面で底部のみ検出した。掘り込みは、５ａ層上面とみられる。柱穴218・228間は1.36ｍ、柱穴228・225間は1.22ｍ、柱穴225・227間は0.6ｍである。柱穴は平面楕円形を呈し、直径0.14～0.2ｍを測る。深さは0.15～0.22ｍである。穴の規模によると、柱材は棒杭状のものに想定される。

土坑201（図版12）　２区東半で検出した。西辺は建物基礎の攪乱で破壊を受け、南半は調査区外にあたる。北辺と東辺・西辺の一部を検出した。方形基調の土坑である。東西3.5ｍ以上、南北1.2ｍ以上の規模を有する。井戸206と重複関係にあり、土坑201が後出する。東辺側面は、ほぼ垂直に掘り込みつつ、底部にかけてやや湾曲する。西辺は２段の底面となり、上段の底面は、踏面0.5ｍ程度の小段状を呈する。検出面からの深さ1.65ｍまで埋土を掘削したが、底面を確認するには至っていない。埋土は、基盤層起源の礫質土で、大仏瓦を含む瓦類が多く投棄されている。

柱穴列322（図22、図版15）　３区南半で南北１間分を検出した。方位はＮ3.8° Ｅである。柱穴は、いずれも東半部分を検出し、西半は調査区外にあたる。柱穴321と314の間は3.9ｍを測る。柱穴の南北径は、柱穴321が0.85ｍ、柱穴314が1.0ｍを測る。柱穴314の断面は、中央に直径0.2ｍの柱痕があり、その周囲には掘形埋土がある。柱痕の底部には、地下式礎石が存在している。検出面から0.2ｍの下位のレベルで、柱痕・掘形の各埋土は削平され、柱痕相当部分には礫が集中する。柱穴321は、柱痕・掘形の明瞭な境界線は断面ではみられなかった。柱穴314と同様のレベルで、礫

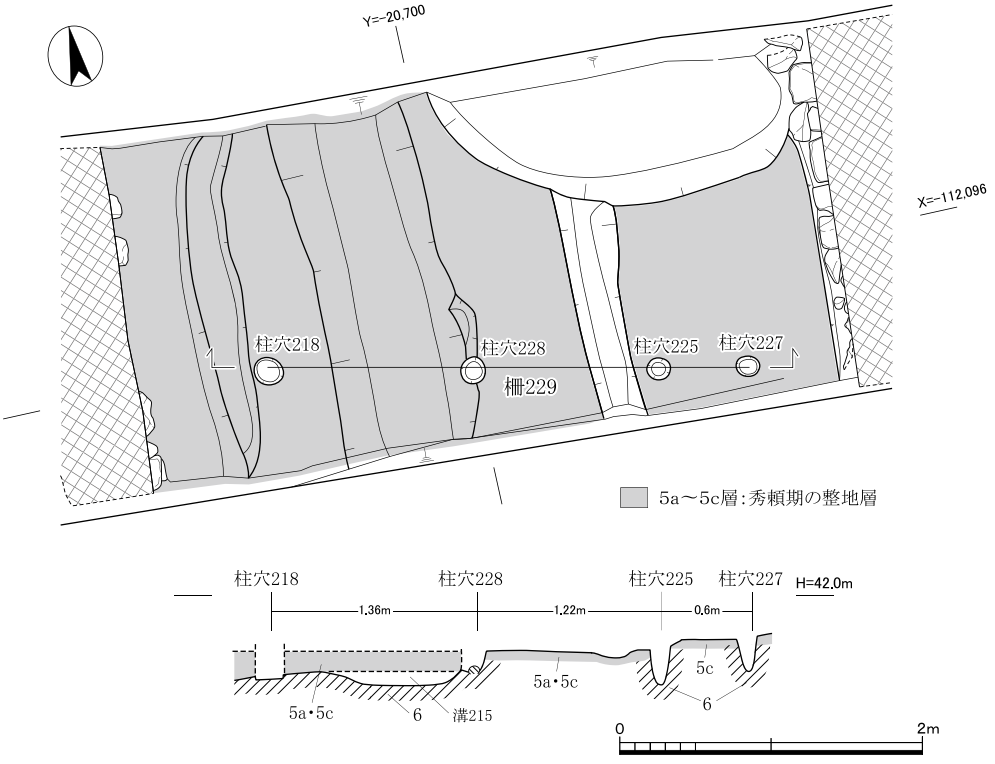


図21　柵229実測図（１：50）

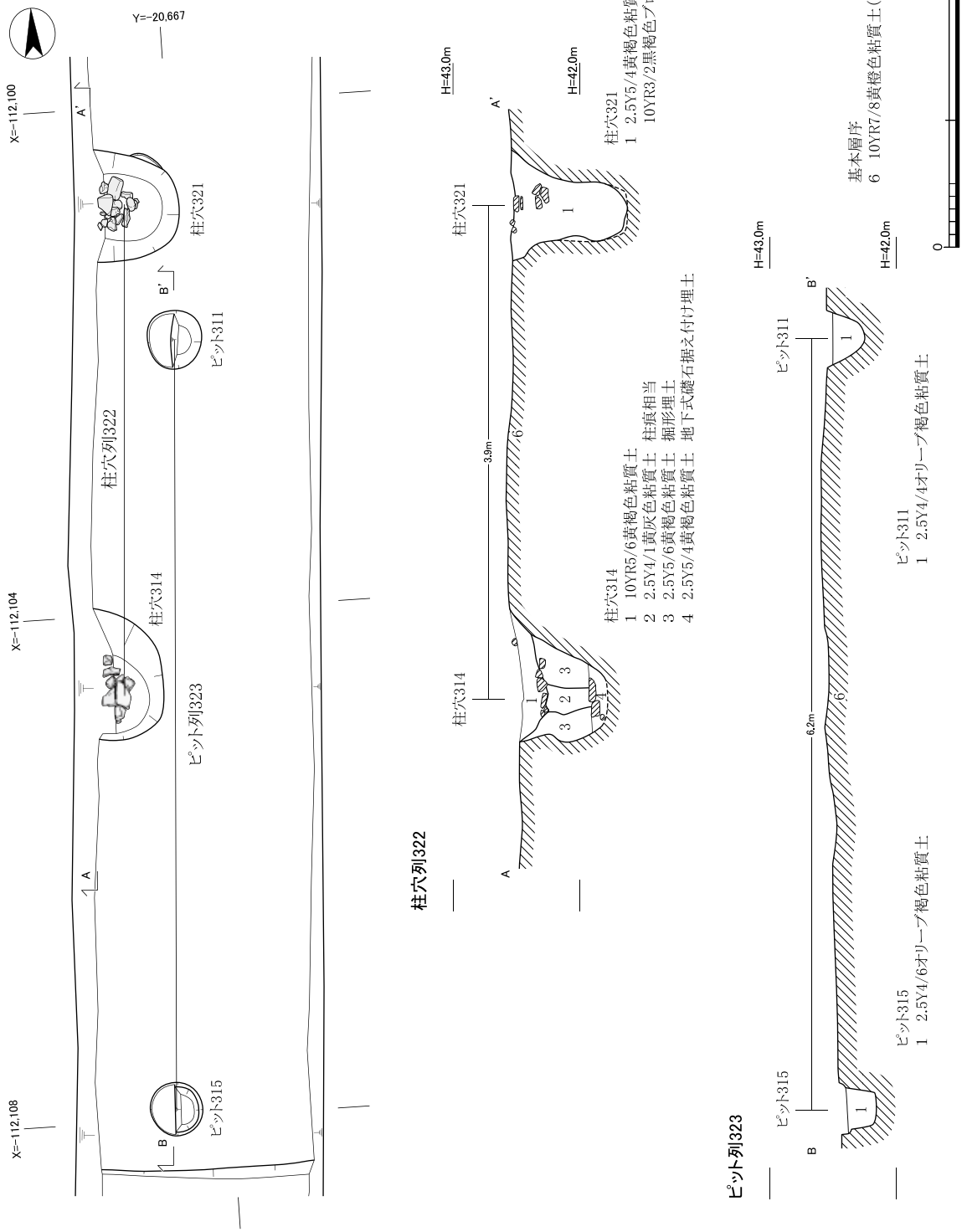


図22　柱穴列322・ピット列323実測図（1：50）

が集中している。両者の共通性から、こうした礫は、礎石の根石に相当する可能性を示している。柱穴314の柱痕の存在を考慮すると、この柱穴列は、掘立柱から礎石へ改変された可能性が推測される。調査区の南北では、これに伴う柱穴がみられず、建物を構成する柱穴列かは不明である。

ピット列323（図22） ３区南半で南北１間分を検出した。方位はＮ3.8° Ｅである。ピットは、直径0.4ｍの円形で、深さ0.3ｍを測る。ピットの配列方位は、柱穴列322と同様である。ただし、ピット間は6.1ｍと長く、ピット断面には明確な柱痕がみられない。周辺での今後の調査の際に注意を即す観点から「ピット列」とした。

この他、３区では、土坑301、ピット306・317がこの時期にあたる。

（６）明治時代の遺構

（１）節で述べたように、明治時代の遺構は、２区西半と１区では、基本層序２層上面、３区では、４層上面を遺構面とする。遺構面形成層である１・２区の２ａ～２ｅ層は恭明宮造営期の整地層、３区４層は、七条通の東側延伸（東大路通に交叉するため）に伴う路面に隣接する敷地の盛土層に比定される。今回の調査では、基本層序の整地層５層と基盤層６層上面で検出作業を行い、上記の明治時代の遺構については、この検出面で遺存するものだけを図化した。

土坑220 ２区整地層２ｅ層上面から掘り込まれる。楕円形の土坑で、長軸2.4ｍ分を検出し、東半は建物基礎により攪乱を受け、北半は調査区外にあたる。深さ0.45ｍを測る。土層断面は、黄橙色粘質土のブロックを多く含む埋土によって人為的に埋没した状況を示す。

溝305（図版15） ３区４層上面より掘り込まれる。東西方向の溝で、土管を埋設した暗渠である。幅0.35ｍ、深さ0.23ｍで、土管の上部を削平によって欠損する。ど

溝309（図版15） ３区４層上面より掘り込まれる。東西方向の溝で、方位はＮ1.7° Ｅである。深さ0.45ｍを測る。北辺と底部を検出した。黄褐色系の粘質土で埋没したのち、斜行する溝312によって掘り込まれる。七条通に平行する排水溝とみられ、４・５層の盛土による地盤上昇によって、排水機能が求められたことが推測される。

溝312（図版15） ３区溝309の埋没後、新たに開削された溝で、方位は斜行し、Ｎ46.3° Ｅである。４層からの深さ0.65ｍを測る。溝309から溝312への変容は、周辺の地形や排水経路などが変化したことを示唆している。

（７）時期不明の遺構

時期が不明な遺構としては、１区では、ピット126・132がある。２区では、溝207、土坑208、ピット209がある。３区では、ピット318がある。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

出土遺物は、整理箱で34箱分が出土した。このうち、土器類・瓦類・土製品・石製品は合わせて31箱、木製品が３箱である。大半は土器類と瓦類で占められる。土製品は窯道具と鞴の羽口、石製品は石鍋がある。木製品は端材である。

平安時代後期から室町時代の遺物では、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、緑釉陶器、施釉陶器、瓦がある。室町時代の土器類に伴って平安時代後期・鎌倉時代の瓦類が共伴する。木製品は端材がある。

桃山時代・江戸時代前期の遺物では、若干量の施釉陶器と鞴の羽口、瓦がある。瓦は、器形が不明な飾り瓦か鬼瓦の把手の断片で、金箔が貼られた断片が３片ある。

江戸時代後期・明治時代の遺物では、大半が瓦で、若干量の磁器がある。丸瓦・平瓦の中には大仏瓦があり、軒平瓦には、大仏殿院回廊の所用瓦と同笵品が含まれている。中井家を棟梁とし、慶長十九年（1614）には完成した大仏殿回廊所用瓦に比定され、寛政十年（1798）の落雷による火災で灰燼に帰した瓦類の一部と思われる。石製品は石鍋がある。

（２）土器類

土器類は、断片が圧倒的に多い。遺構出土の土器類は積極的に図化した。また、１区の遺構面直上に堆積する基本層序４層の出土遺物も図化した。

１）平安時代後期から室町時代

溝111出土土器（図23、図版16　１～７）　土師器・瓦器が出土した。土師器は、口径7.8～9.5㎝の小皿（１～３）と口径13.7㎝の大皿（４）がある。いずれも皿のＮ系列（赤色系）の系譜下に位置付けられる土師器である[1)]。大皿は、底部外面に指オサエの圧痕が所々残り、口縁部の立ち上が

表４　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代後期～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、緑釉陶器、焼締陶器、施釉陶器、瓦、木製品、生物遺存体		土師器26点、須恵器６点、瓦器５点、瓦質土器９点、焼締陶器１点、施釉陶器４点、瓦27点、木製品５点、生物遺存体１点		
桃山時代～江戸時代前期	施釉陶器、瓦、土製品		施釉陶器２点、瓦７点、土製品２点		
江戸時代後期～明治時代	土師器、瓦質土器、磁器、瓦、土製品、石製品		土師器１点、瓦質土器１点、磁器３点、瓦25点、土製品２点、石製品１点		
合　計		43箱	128点（10箱）	２箱	31箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より９箱多くなっている。

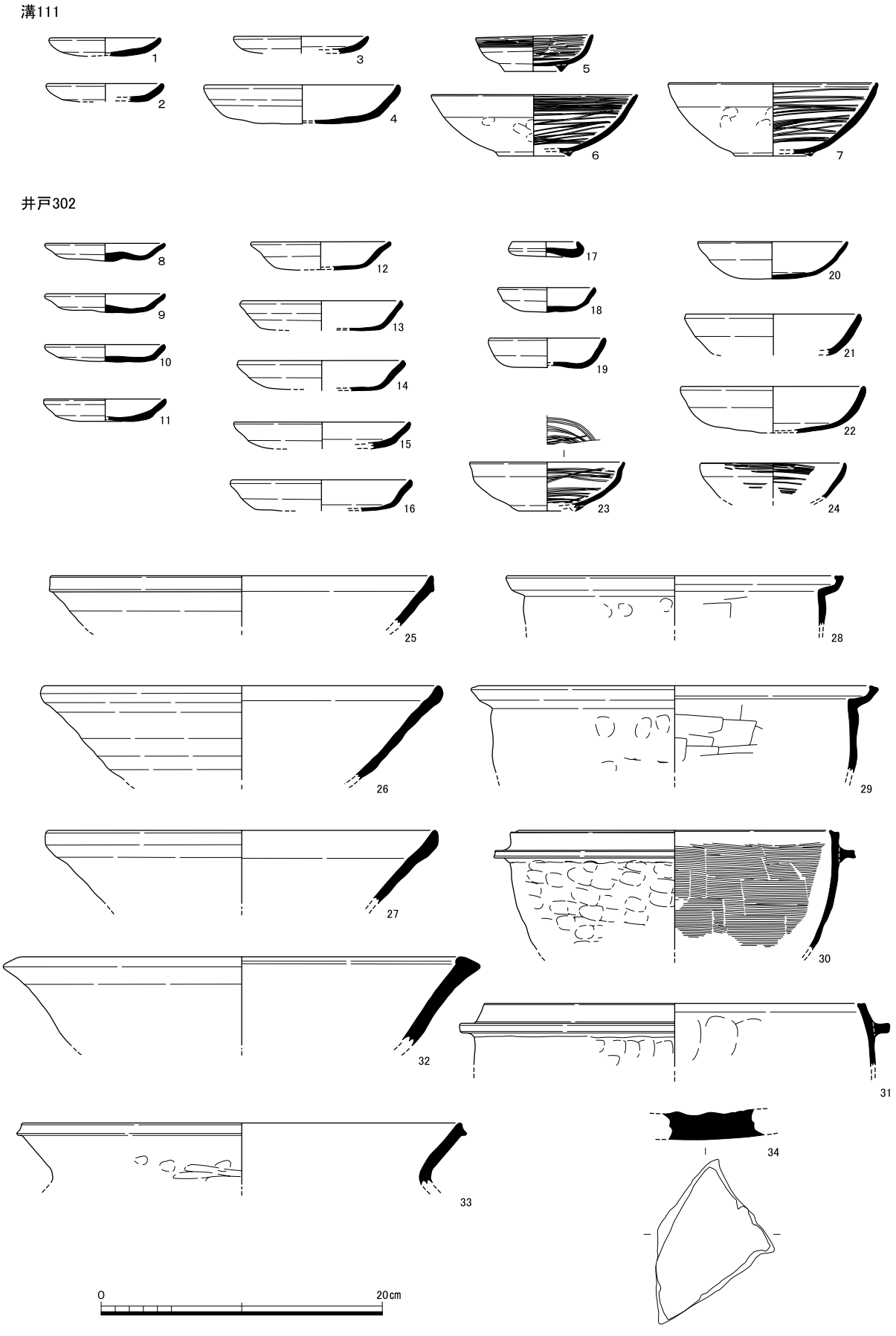


図23　溝111・井戸302出土土器実測図（1 ： 4）

りにかけて、外面にはナデの擦過痕が強く残る。瓦器は、口径8.3㎝の小型（５）と通有の大きさの口径14.5㎝（６）・14.9㎝（７）がある。いずれも内面には暗文がみられる。５は外面の口縁附近に暗文がわずかにみられる。口縁端部は、５がすなおに丸くおさまり、６・７は微弱な沈線がめぐる。高台はいずれも逆三角形状を呈する。土師器は６Ａ段階、瓦器はⅢ－１に相当する[2)]。12世紀後半に比定される。

井戸302出土土器（図23、図版16・17　８～34）　供膳具では土師器・瓦器、貯蔵具・煮炊具では須恵器・瓦質土器がある。器形が不明な土器として緑釉陶器がある。土師器の皿類は、Ｎ系列（赤色系）とＳ系列（白色系）に区分される。Ｎ系列は８～16、Ｓ系列は17～22である。Ｎ系列は、口径8.4～8.6㎝の小皿（８～11）と口径9.6～12.7㎝の大皿（12～16）に区分される。前者は口縁部が外傾して短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。後者は、やや外反気味に立ち上がり、端部は微弱につまみ上げて仕上げる。いずれも底部外面には、指オサエの圧痕が所々に残る。Ｓ系列は、口径4.6㎝のコースター形（17）、6.7～8.2㎝の小皿（18・19）、10.6～13.0㎝の大皿（20～22）がある。Ｓ系列の皿類は、Ｎ系列よりも器高が高い。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は上方にややつまみ上げるか、すなおに丸くおさまる。瓦器椀（23・24）は口径10.1～10.9㎝を測る。いずれも内面に暗文がみられ、24の口縁部付近の外面にも暗文がみられる。口縁部は23がやや外反しながら上方に立ち上がり、24は内湾気味に立ち上がる。端部は、いずれも沈線はみられず、丸くおさまる。25～27は東播系の須恵器鉢である。口縁部外面は、25が直立するのに対して、26・27は肥厚する。28～33は瓦質土器である。28・29は鍋である。口縁部は、受け口状を呈し、ほぼ直角に外反してさらに上方へ屈曲して立ち上がる。30・31は羽釜である。30は鍔から口縁端部にかけて短く立ち上がり、31は内傾して立ち上がる。30の体部は、外面に指頭圧痕が顕著で、内面はヨコハケで調整する。ヨコハケの原体は、凹凸が微差であり、明瞭ではないが、ナデの擦過痕とも異なる。32は盤である。口縁端部は、外傾面を有し、内面を肥厚して仕上げる。33は甕である。須恵器の甕と同様な口縁部の形態をなしている。34は緑釉陶器である。瓦ではなく、器形は不明である。外面に濃緑色の施釉がなされる。内面は回転を利用したヨコナデの擦過痕が顕著に残る。土師器の皿類は、６Ｃ・７Ａ段階に相当し、13世紀前半から後半に比定される。瓦器椀も同様の時期にあたる。東播系の須恵器鉢は、25がやや古相を示すが、13世紀代とみられる。瓦質土器の鍋・羽釜は、13世紀を主体としつつ、14世紀に下る可能性を有する。

井戸206出土土器（図24、図版16・17　35～50）　供膳具は土師器皿のみ、貯蔵・煮炊具は須恵器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器がある。土師器皿は、Ｎ系列（35～38）、Ｓ系列（39～41）がある。Ｎ系列は口径7.7㎝・8.2㎝の小皿（35・36）と11.8㎝前後の大皿（37・38）がある。小皿は、口縁部が短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。大皿は、38がやや屈曲気味に外反する。Ｓ系列はへそ皿（39）と口径11.5㎝・12.9㎝の大皿（40・41）がある。底部から体部の立ち上がりにかけての器厚が薄い。42は東播系の須恵器鉢で、口縁部外面が突出して肥厚する。43は須恵器甕の体部で、格子目叩きで整形する。44・45は瓦質土器の鍋である。口縁部は屈曲して外反し、端部は断面三角形状につまみ上げて低く立ち上がる。46は瓦質土器の浅鉢である。底部と体部の屈曲位置

に高台が付く。47は施釉陶器の古瀬戸で、瓶子の胴部にあたる。流麗な唐草文が施文されている。48・49は施釉陶器の古瀬戸で、折縁深皿である。48が口径22.2㎝、器高7.5㎝、49が口径27.3㎝、器高5.2㎝である。口縁部は、49が大きく外反する。48に対して49が新相を示す。50は備前産の焼締陶器の擂鉢である。内面の櫛描の条線を施す。土師器皿は、７Ｂ～８Ａ段階と幅があり、13世紀末から14世紀後半に比定される。東播系の鉢、瓦質土器の鍋・浅鉢は14世紀代、古瀬戸の折縁深

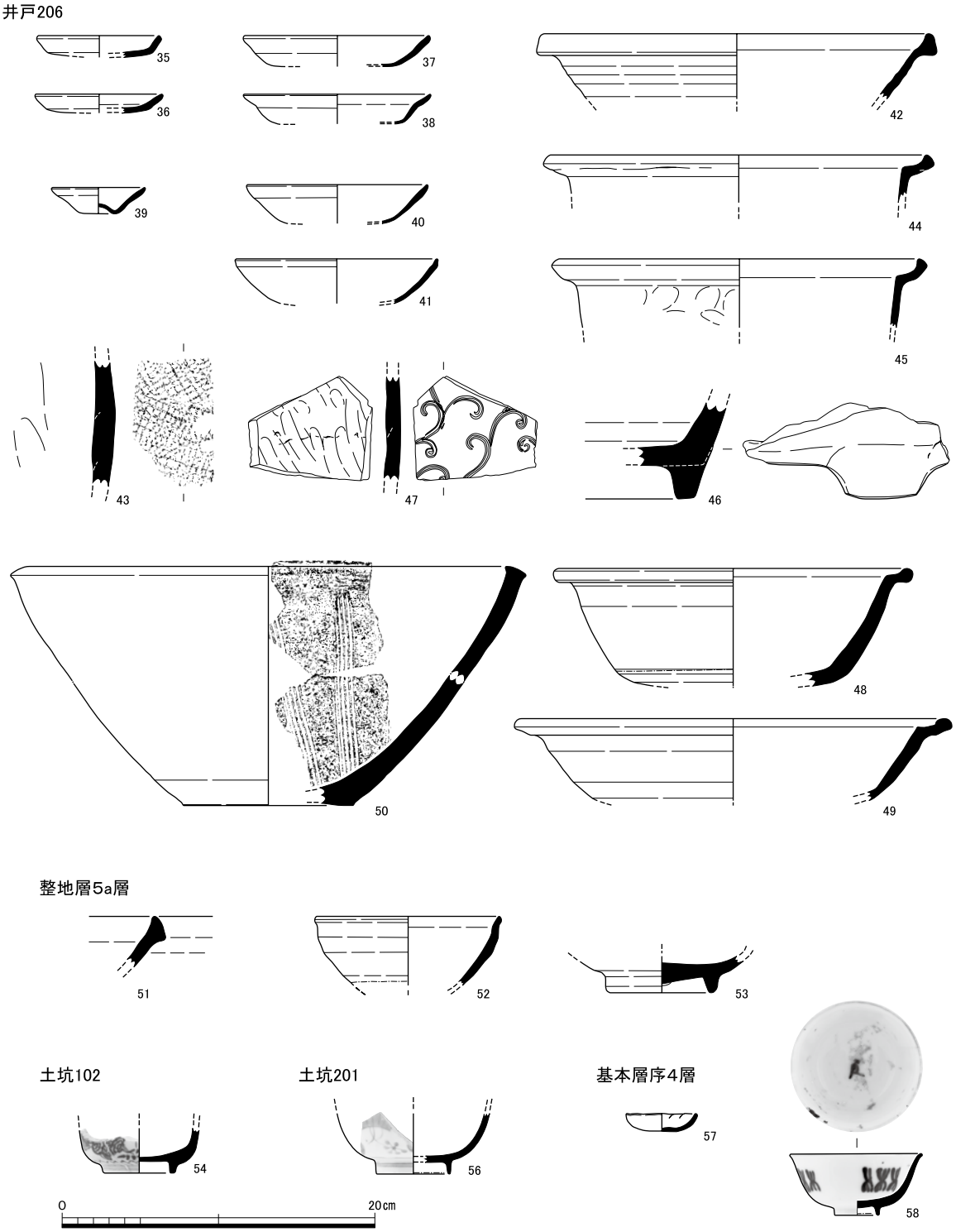


図24　井戸206、整地層5a層、土坑102・201、基本層序４層出土土器実測図（１：４）

皿（48）は14世紀前半、同（49）と焼締陶器擂鉢（50）は14世紀中頃から後半に比定される。

２）桃山時代から江戸時代前期

整地層５a層出土土器（図24、図版17　51～53）　須恵器の東播系の鉢（51）、施釉陶器の天目椀（52）、施釉陶器椀（53）が出土した。51は混入品と思われる。52は赤褐色～黒褐色を呈する。53は黄褐色を呈する。

３）江戸時代後期から明治時代

土坑102出土土器（図24・25、巻頭図版２、図版18　54・55）　染付椀（54）、瓦質土器炉（55）が出土した。54は、鉛ガラス（白玉粉と呼ばれる）による焼継の痕跡がみられる。焼継の上限は、18世紀末頃にあたり、京都で始まったという[3)]。

瓦質土器炉（55）は、基部に亀、胴部の器面には三羽の鶴と桃の透かし孔を造形したものである。亀はほぼ完形、胴部の一部と上部の大半を欠損する。出土した土坑102の範囲は、調査区外の南にも広がっており、同一個体の破片が埋没しているとみられる。

基部の亀は、亀頭－尾を長軸、幅を短軸として、均整のとれた楕円形を呈する。図化の便宜上、底部外面の平面図には、亀頭を起点に時計まわりで90度ごとにＡ～Ｄの位置を示した。ただし、Ｂ－Ｄラインは、Ｂ面の鶴の厚みを断面で表現するため中点を通らない。後述するように亀頭の位置が正面であり、これを中軸線とみなすことができる（Ａ－Ｃライン）。

基部の下位に亀頭・四脚・尾、上位に甲羅を造形する。甲羅の外縁の法量は、長軸23.1㎝、短軸22.3㎝を測る。亀頭は鼻と口を線刻、目を粘土貼り付けによって表現する。甲羅の外縁をねじ曲げるように亀頭が起き、顔の表現とあわせて動的な印象を与えさせている。甲羅は、二重の界線で表現した六角形の亀甲文を規則的に配置させる。各亀甲文の中央に刺突を施すことによって列点状に表現する。四脚のうち前脚の先端は、面取りで爪を表現する。

胴部はやや外反しながら立ち上がり、口縁にかけて内湾する。胴部のＡ面には、下位に桃形の透かし孔がある。亀頭とともに軸線を揃えている。Ｂ・Ｃ・Ｄの各面には鶴が配される。各面の鶴の大きさや体部と脚の造形は、共通している。Ｃ面の鶴は、中軸線（Ａ－Ｃライン）上に配置され、振り向いた様子を画く。Ｂ面の鶴は、Ａ面中軸に対して90度ではなく、およそ70度前後の位置に配されている。つまり、やや中軸寄りに配され、亀頭の方を向いている。Ｄ面の鶴は、脚部と羽根の一部しか遺存しないが、Ｂ面の鶴と同様、亀頭寄りに配されている。Ｄ面の鶴の脚・羽根の向きは、Ｂ面の鶴と同じ方向を指す。顔の向きは、Ｃ面の鶴が振り向くことによって、Ｄ面の鶴と対向する配置となる。

Ａ面・Ｃ面では上端部が遺存している。Ｃ面の上端部に対して、Ａ面の上端部が低く、その差7.2㎝を測る。Ａ面の上端部は、凹形の円弧が三連する形状を呈する。Ｃ面の上端部は凸形の円弧を呈する。大きな円弧に接して小さな二連の円弧がある。Ｃ面と同様に、Ｂ面・Ｄ面の鶴の頭上には、凸形の円弧によって上端部が表現されたとみられる。これと対応して、Ｂ面の鶴とＣ面の鶴との間、Ｄ面の鶴とＣ面の鶴との間にはそれぞれ、Ａ面と同様に凹形の三連円弧によって上端部が表現されたとみられる。

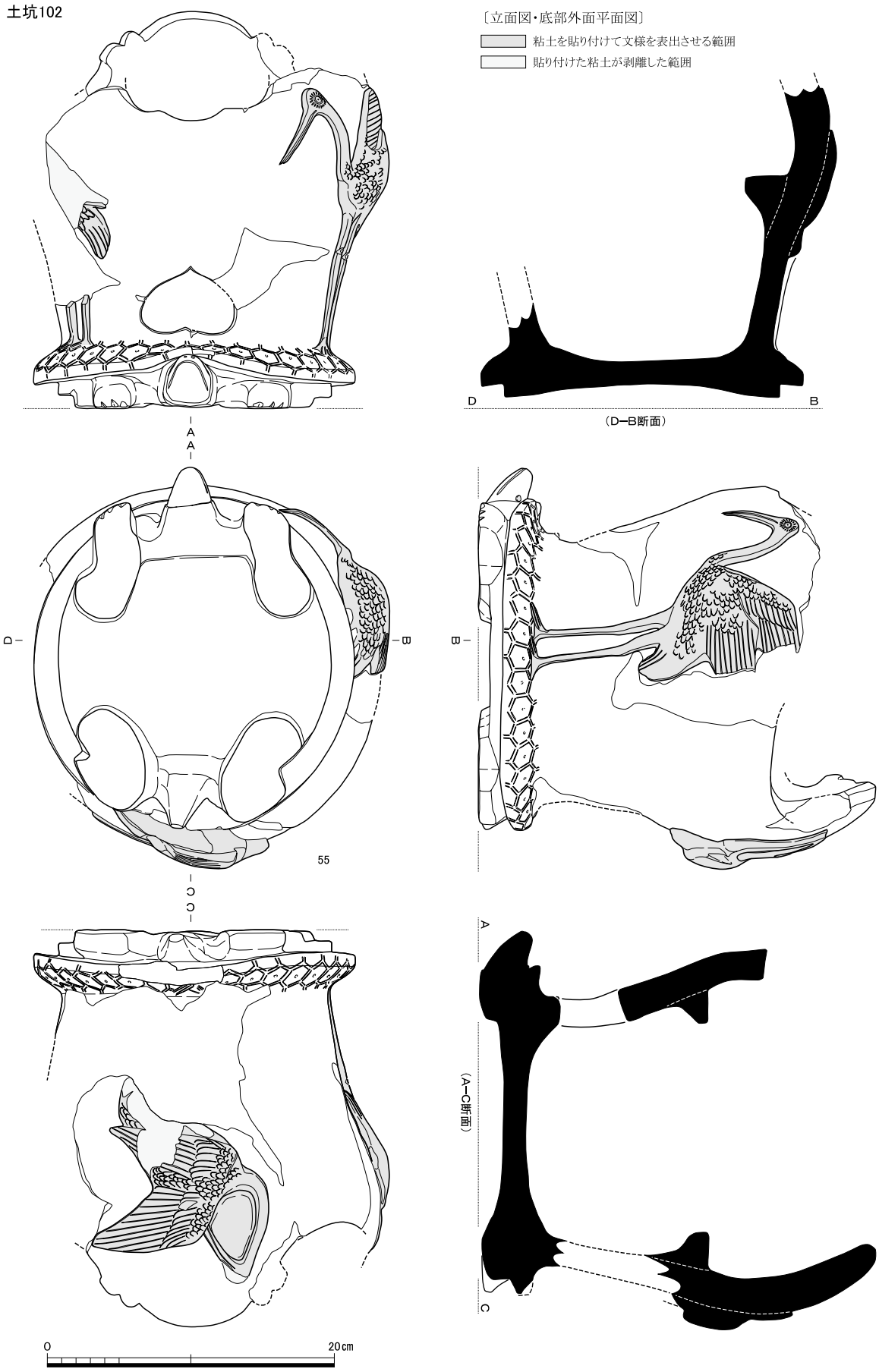


図25　土坑102出土瓦質土器炉実測図（１：４）

これまで述べてきたように、亀頭、桃形透かし孔、胴部の鶴と上端部の形状の位置関係は、相互に関連し合っている。さらに背面（C面）の鶴を振り向かせることによって、全体として正面（A面）観を強く意識させる造形となっている。

胴部の内面には炭を置くサナを乗せるための突起が全面にめぐる。

成形は、厚さ５㎝前後の粘土板から、亀の造形を削り出す。胴部は、受け部より上位は粘土紐巻き上げとみられる。受け部より下位は、粘土紐巻き上げか、粘土板を巻き付けたかいずれかとみられる。外面は、施文以前に全体を丁寧にナデで仕上げる。内面は、胴部の受け部より下位は、横方向の削り、底部を削りで調整する。受け部とその上位は、ヨコナデで調整される。焼成は瓦質で、正面は、燻しがかかる。色調は、外面が淡灰色を基調とし、一部、黒褐色を呈する。内面は、受け部より下位は灰色、受け部より上位は、淡橙褐色を呈する。胎土は、0.5～１㎜大の長石・石英を顕著に含み、瓦の胎土と共通する。

土坑201出土土器（図24　56）　染付椀（56）が出土した。江戸時代後期の所産。

基本層序４層出土土器（図24、図版16　57・58）　土師器皿（57）、染付椀（58）が出土した。幕末から明治時代初期の所産。

（３）瓦類

瓦は、平安時代後期から室町時代の遺構、桃山時代から江戸時代の遺構から出土した。前者は、溝111・井戸302・井戸206があげられる。これらの分布は、調査区全域に広がっており、瓦を使用した施設が広範囲に所在したことを示唆している。後者では、池状遺構101、土坑137、土坑201、土坑202、柱穴130・柱穴140があげられる。これらは、１区と２区の範囲に分布がみられる。また１区の遺構面直上に堆積する基本層序４層からも出土している。

１）平安時代後期から鎌倉時代

溝111出土瓦（図26、図版19・20　59～65）　59は巴文の軒丸瓦で、丸瓦部との関係は接合式である。瓦当裏面下端は、ナデによって端縁をなだらかに仕上げる。60～62は軒平瓦。60は、同文が白川地域の採取品[4)]、法住寺殿[5)]でみられる。顎裏面の下端に布目の圧痕がわずかに残る。中央官衙系の所産。61は折曲技法による。62は包み込み技法で播磨系とみられる。63～65は平瓦。63は凸面をタテ方向のナデで調整する。叩き目は確認できない。凹面は、布目圧痕の後、タテ方向のナデで調整する。幅のほぼ中央で半截され、側面の破面が整っており、熨斗瓦として利用したものとみられる。64の凸面は、斜格子叩き板を用いて整形する。同一原体の箇所が３箇所で確認できる（※を図示した箇所）。タテ方向の原体をヨコに移動しながら３回叩いた（あるいは、押しつけた）痕跡として理解できる。凹面は、糸切り痕、布目圧痕がみられる。広端面から6.5㎝のところには、釘孔が焼成前に穿たれている。この釘孔を境にして半截されており、熨斗瓦として利用されたとみられる。65は、凸面は叩き目がみられず、タテ方向のナデによって調整される。凹面は糸切り痕、布目圧痕がみられる。須恵質の硬質な焼成が特徴的で、凹面には自然釉がみられる。

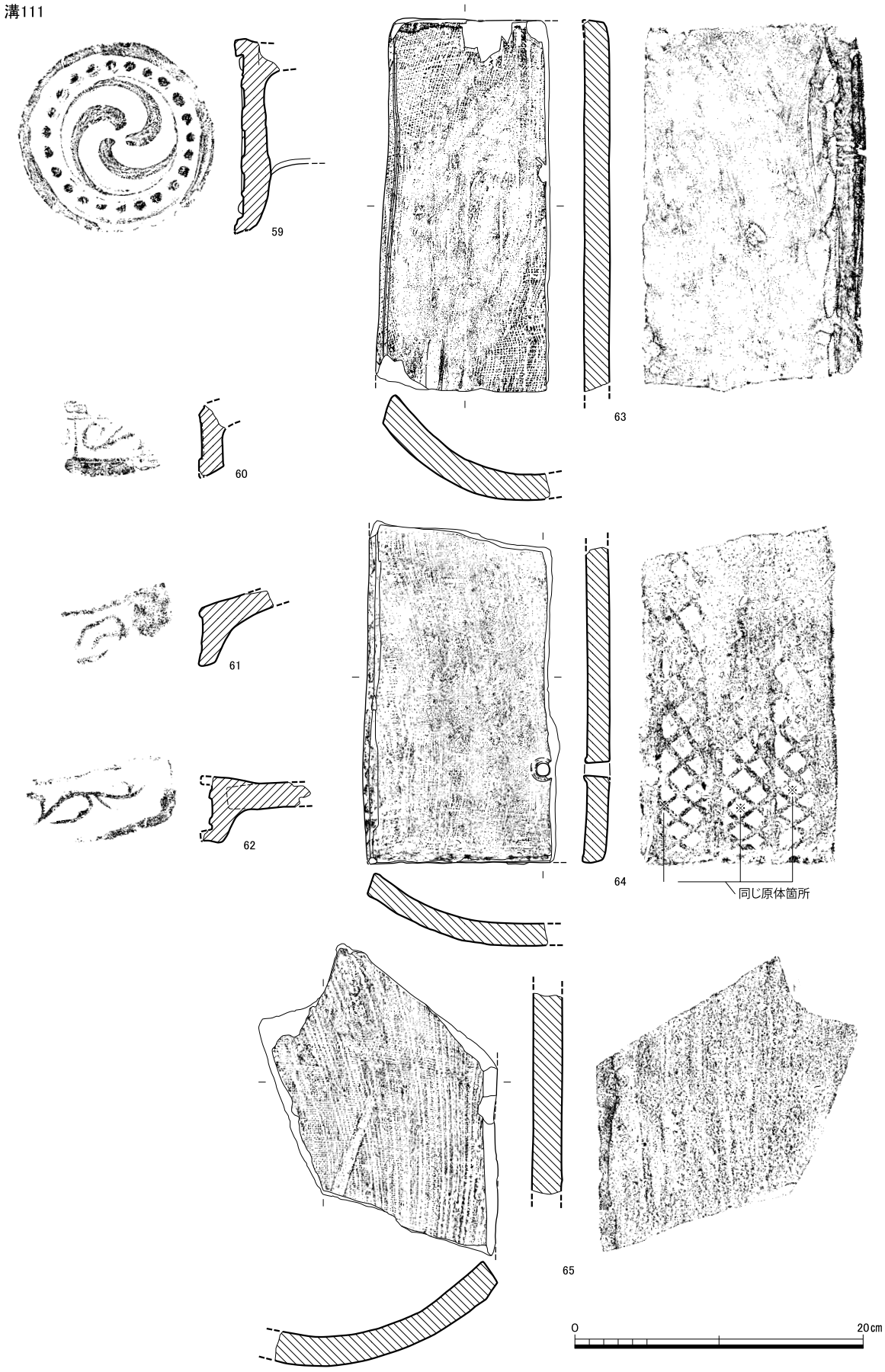


図26　溝111出土瓦拓影及び実測図（１：４）

井戸302

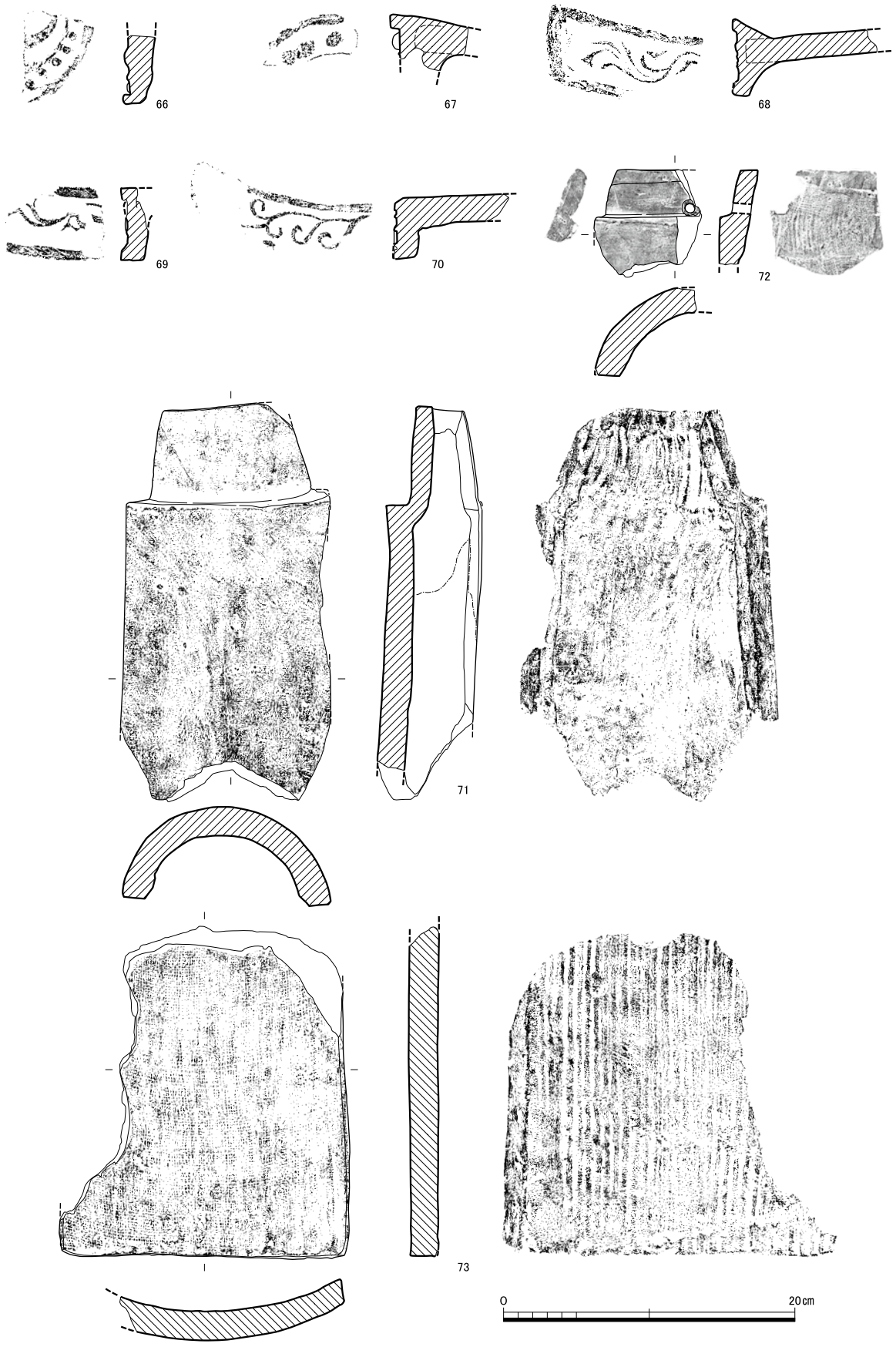


図27　井戸302出土瓦拓影及び実測図１（１：４）

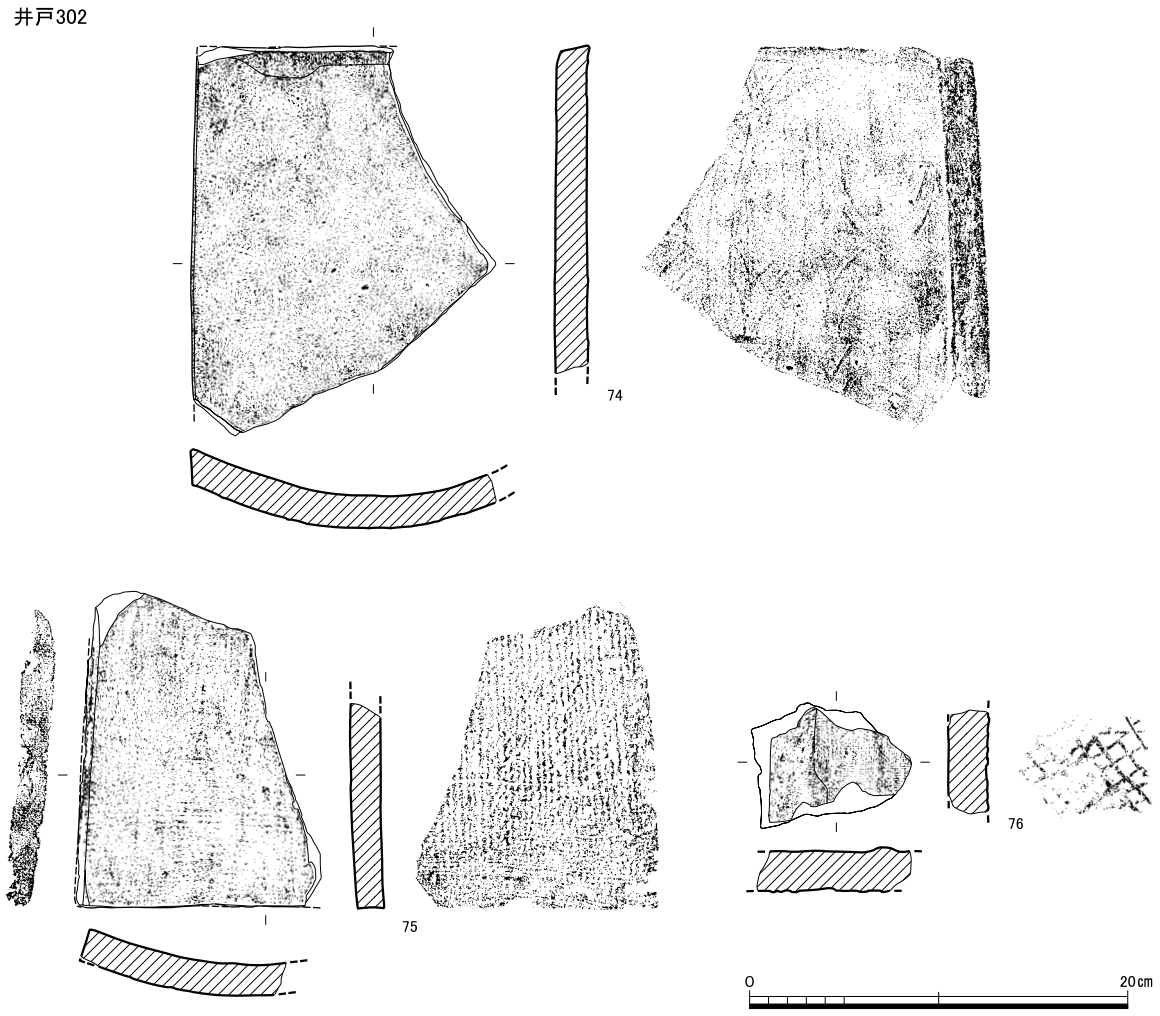


図28　井戸302出土瓦拓影及び実測図２（１：４）

井戸302出土瓦（図27・28、図版19・21　66～75）　66・67は軒丸瓦。66は巴文、外区の珠文の周囲には笵傷が顕著に生じている。瓦当裏面の下端は指オサエの圧痕が顕著である。67は接合式、珠文が大きい。68～69は軒平瓦。68は包み込み技法。69は瓦当厚が1.6㎝で、薄い。70は、同文が尊勝寺出土例にあり、12世紀後半に位置付けられる[6)]。71・72は丸瓦。71は凸面を縦位の縄叩き目で整形した後、丁寧なナデを施す。玉縁部分は、回転ナデで調整している。凹面は布目の圧痕を残す。72は断片である。玉縁部に釘孔が穿たれる。回転ナデで調整される。凹面は、糸切り痕、布目圧痕を残す。自然釉が付着する。73～76は平瓦。73は凸面が離れ砂、縦位の縄叩き目、凹面が布目圧痕を残す。74は円弧状の文様を施した叩き板を用いて凸面を整形する。凹面には布目の圧痕がない。硬質の焼成である。75は凸面を縦位の縄叩き目で整形、凹面は糸切り痕と布目圧痕が残る。76は凸面を斜格子叩き目で整形、凹面は布目圧痕を残し、成形台の凹凸がみられる。

井戸206出土瓦（図29、図版19　77～85）　77は巴文の軒丸瓦。接合式で、瓦当裏面の下端に指オサエの圧痕が顕著に残る。78～80は軒平瓦。78は鋸歯文に珠文を二個ずつ配した文様である。播磨系とみられる。同文は京博11次調査１区包含層で出土している[7)]。79は唐草文。80は同じ唐草の単位を横に連接させる文様構成である。折曲技法による。81・82は丸瓦。玉縁部の断片である。

凸面に縦位の縄叩き目がみられる。82は胴部の断片。縦位の縄叩き目がそのまま顕著に残る。83～85は平瓦。83は凸面に縦位の縄叩き目、凹面に布目圧痕が残る。84は凸面に叩き目がみられない。凹面は、糸切り痕、布目圧痕を残す。85は凸面が斜行する平行叩き目で整形される。凹面は布目圧痕を残す。須恵質で硬質の焼成である。

2）桃山時代から江戸時代前期

土坑202出土瓦（図30、図版23・25　86～93）　丸瓦（86）と道具瓦の断片（87～93）がある。86は、玉縁付近の筒部に釘孔が穿たれる。筒部径16.0㎝を測る。玉縁部の筒部との境は、なだらかにナデ上げて仕上げる。焼成はやや軟質である。87～90は、鬼瓦裏面の補強の突帯の可能性が推定されるが、部位は特定できない。91～93も断片であり、部位が特定できない。金箔が残存してい

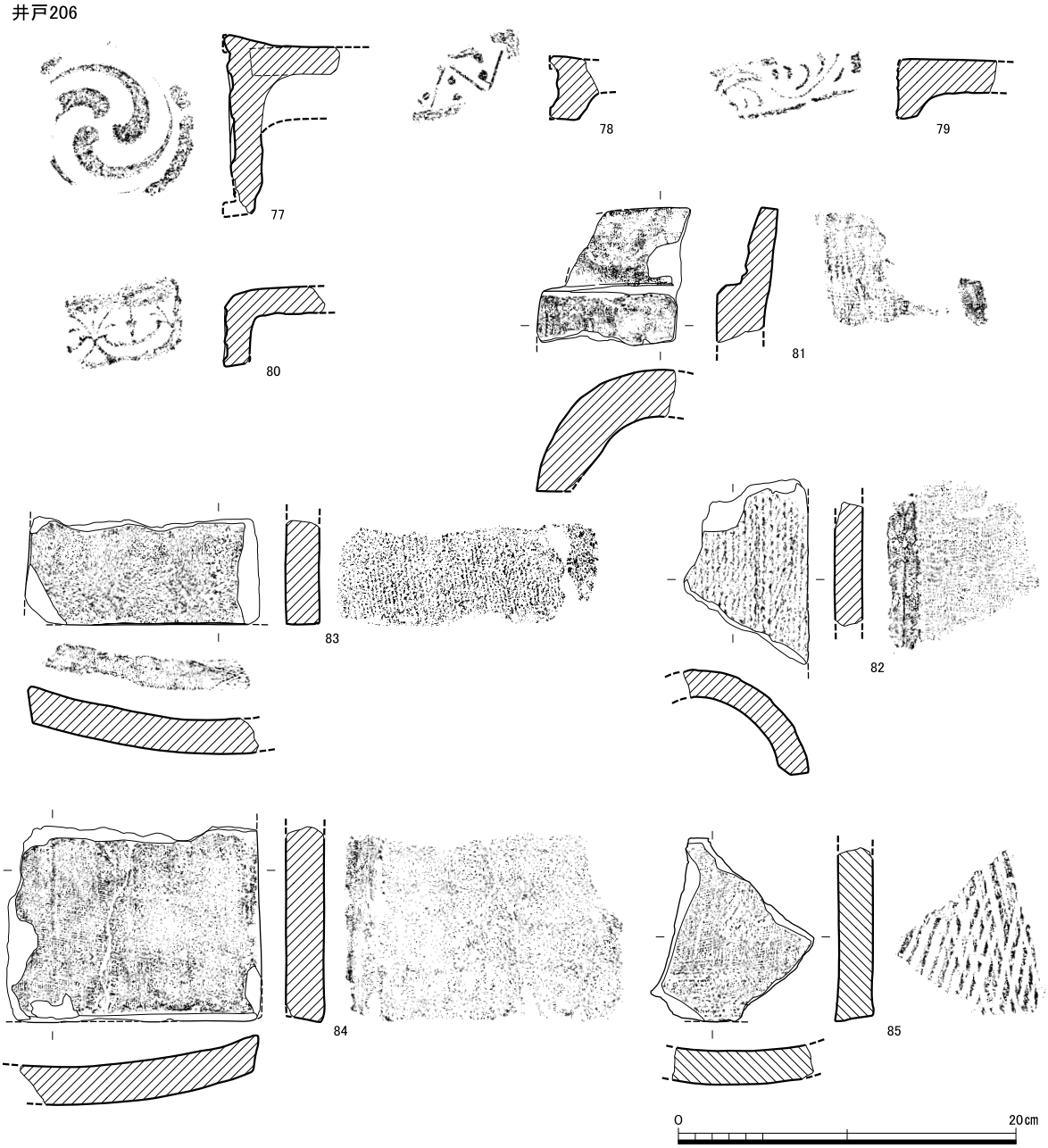


図29　井戸206出土瓦拓影及び実測図（１：４）

土坑202

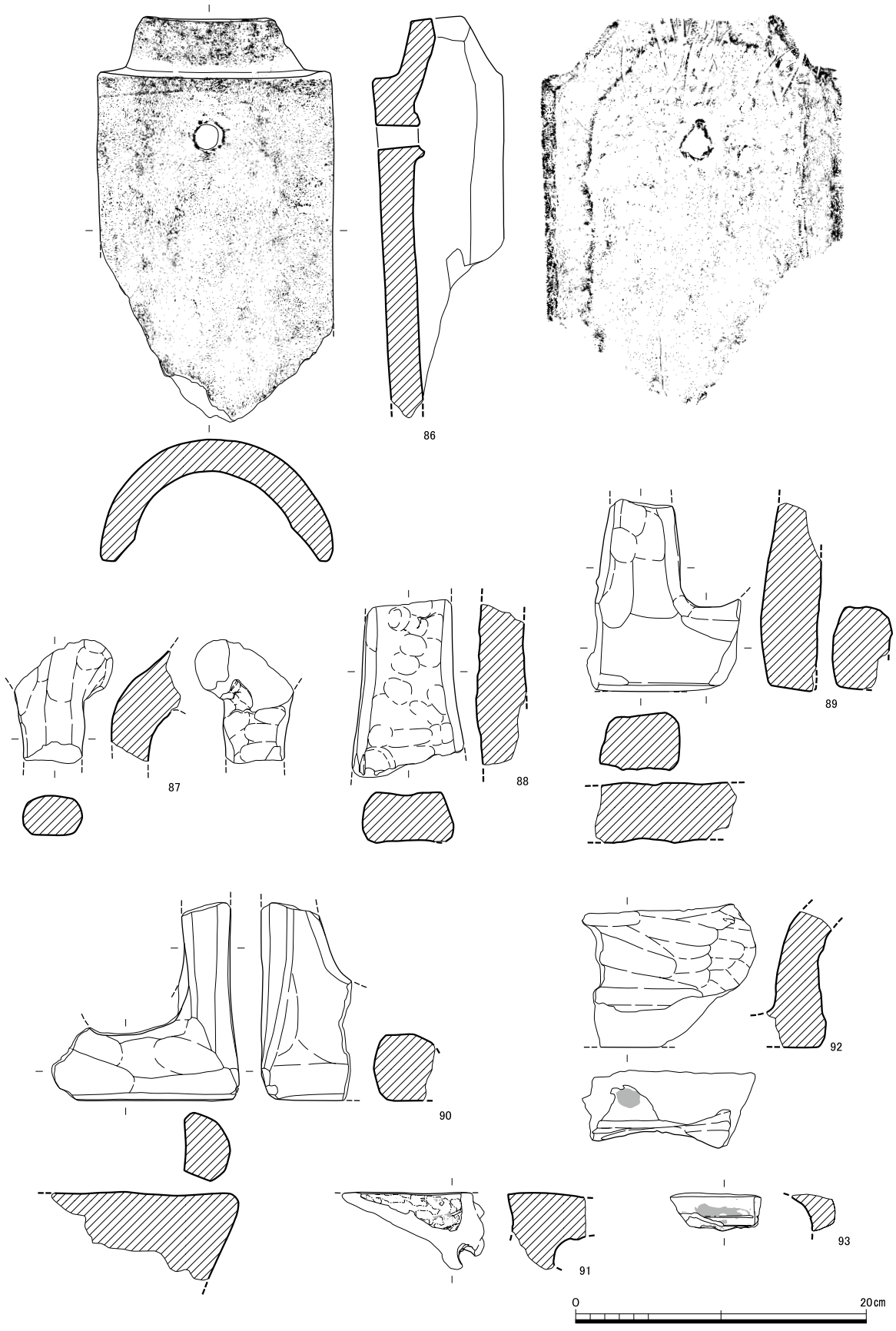


図30　土坑202出土瓦拓影及び実測図（１：４）

る。これまで、方広寺の寺域における金箔瓦の出土例は、京博09RT89立会地点[8]から軒平瓦１点が知られるだけである。

３）江戸時代後期

いずれも江戸時代の遺構から出土したもので、中には大仏殿、回廊所用瓦が含まれている。

池状遺構101出土瓦（図31・32、図版22・24・25　94～103）　94は平安時代前期の軒丸瓦の断片で、廃材として混入したものとみられる。95・96は江戸時代の軒丸瓦。95は砂粒を多く含み、燻しがかかっていない。97は５弁の花文を中心飾りとする。弁端の尖る様子は、桔梗をあらわしたものであろうか。蕨手は外縁を肥厚させ、中を凹ませて表現する。左右各２葉で構成される。外縁上端は丁寧に面取りされる。瓦当貼り付けに伴い、平瓦部にはカキヤブリがなされる。同文は京博３次調査１区の攪乱から出土している[9]。98・99は平瓦。98は平瓦の端面に刻印がみられる。99は端面付近の二箇所に焼成前に穿孔がなされている。100は桟瓦。101は塀の瓦である。102は丸瓦。釘孔が穿たれる。凹面には、鉄線切り痕、布目圧痕の後、棒状の圧痕がつく。103は留蓋瓦とみられる。粘土塊成形の後、くり抜いて中空にしている。

土坑201出土瓦（図32・33、図版22～25　104～113）　104は巴文軒丸瓦。瓦当径16.7㎝を測る。瓦当面は、キラ粉により光沢のある焼成となっている。丸瓦の接合部分にはカキヤブリがなされている。105・106は軒平瓦。105は５弁の花文を中心飾りとし、その両側に対向した文様を配する。106は蕨手の外縁の肥厚が97と酷似し、同笵品とみられる。107は中心飾りに近い蕨手（第１単位）が、外縁を肥厚させる凹型の表現で、外側の蕨手が凸形に表現する。中心飾りの一部が残存する。文様区が明らかな類例としては、京博13次調査15区の溝30出土例があげられ、同笵とみられる[10]。内区外縁、外区外縁ともに面取りする。瓦当裏面の平瓦部の接合位置には、平瓦部凸面にそって強いナデの痕跡がみられる。108・109は同笵品の軒平瓦。三葉が対向する中心飾りに先端が分岐する蕨手を左右均等に配する。器面全体にキラ粉が付着し、光沢のある焼成となっている。110・111は丸瓦。110は凸面に縦方向の磨き状の痕跡がみられる。凹面は鉄線切り痕、布目圧痕の後、棒状の押圧痕がみられる。111は全長35.5㎝、筒部径の推定値が17.8㎝を測る大型の丸瓦で、大仏瓦とみられる。凸面は縦位の縄叩き目の後、縦方向のナデで調整する。凹面は、鉄線切り痕、布目圧痕が残る。布筒の吊り紐痕がみられる。側面・端面を丁寧に面取りする。玉縁部の凸面には、強い回転ナデによる擦過痕が残る。112・113は平瓦。112は端面に刻印がみられる。113は断片であるが、厚みが3.0㎝あり、大仏瓦と判断される。

その他遺構出土軒瓦（図34、図版22　114～116）　土坑137出土軒丸瓦（114）、柱穴列147の柱穴130出土軒平瓦（115）、柵146の柱穴140出土軒平瓦（116）がある。114は瓦当面に離れ砂がみられる。115・116は瓦当面にキラ粉がみられる。これら軒瓦は近世後期の所産である。

基本層序４層出土軒瓦（図34、図版22　117）　瓦当面がほぼ完形の軒丸瓦（117）を図示した。瓦当面には、全面にキラ粉が付着し、燻し銀の焼成である。瓦当面には、幅1.5㎝程度の線状に燻しのかからない範囲があり、焼き台などの痕跡とみられる。

池状遺構101

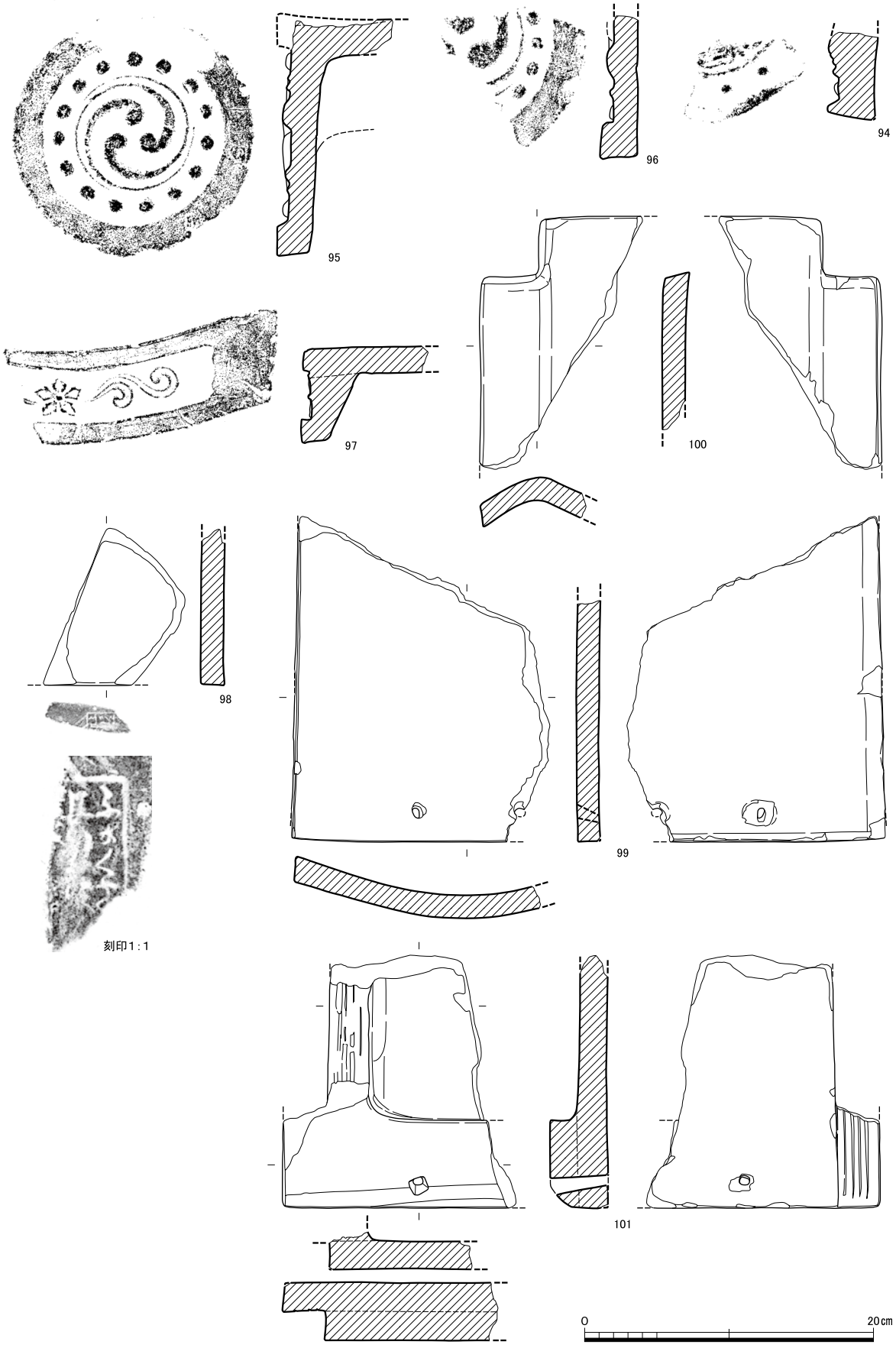


図31　池状遺構101出土瓦拓影及び実測図（１：４）

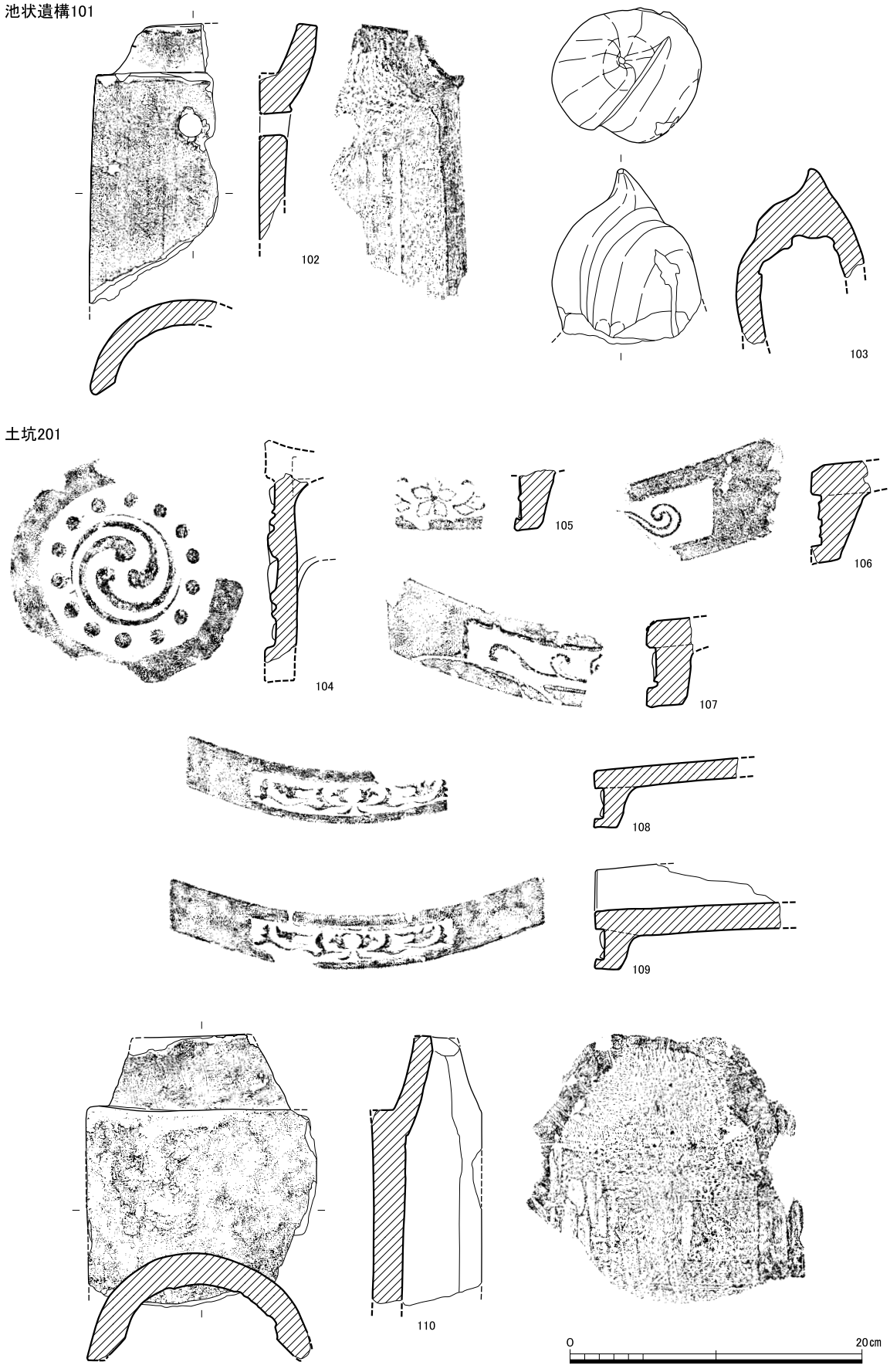


図32　池状遺構101・土坑201出土瓦拓影及び実測図（１：４）

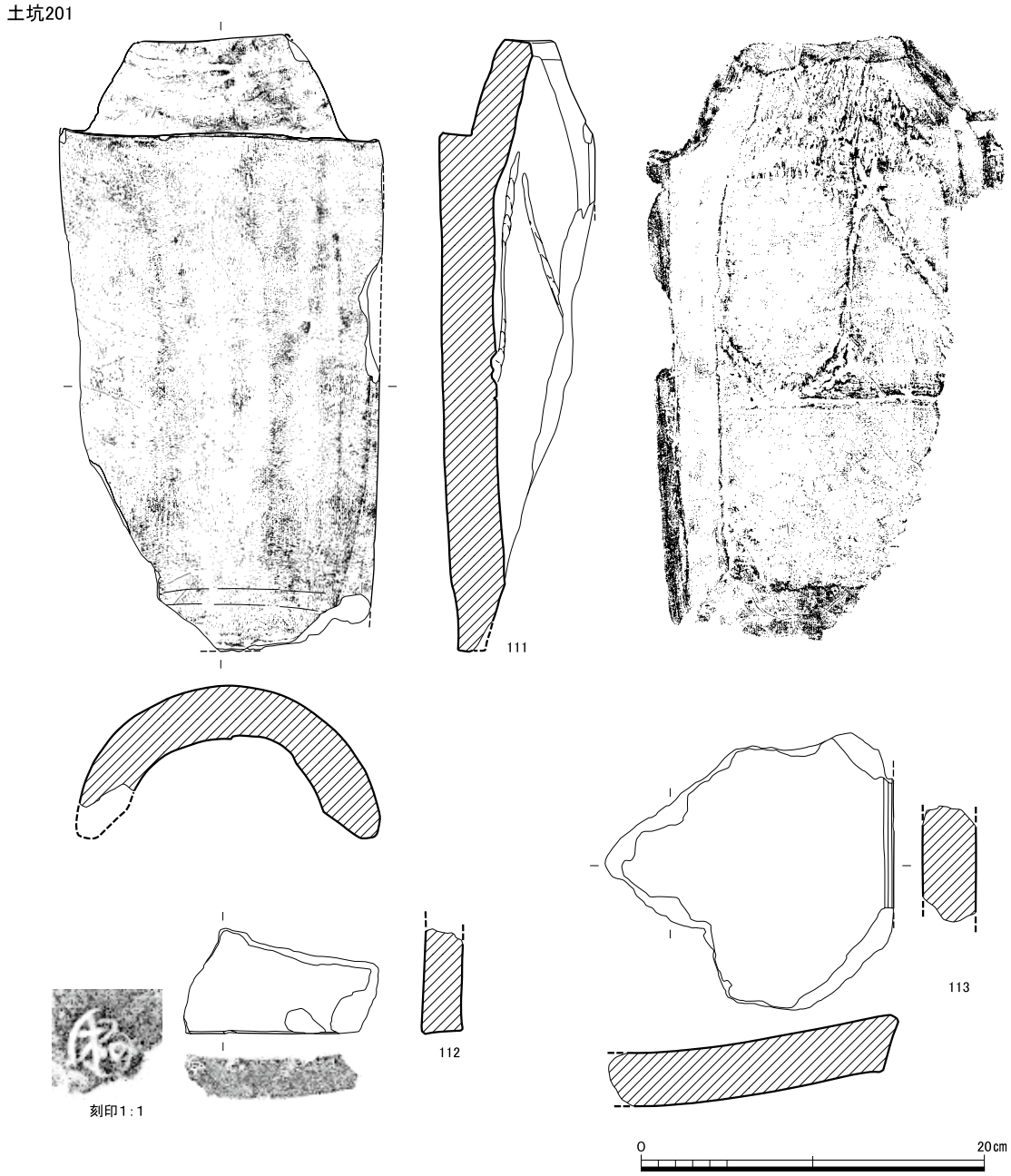


図33　土坑201出土瓦拓影及び実測図（１：４）

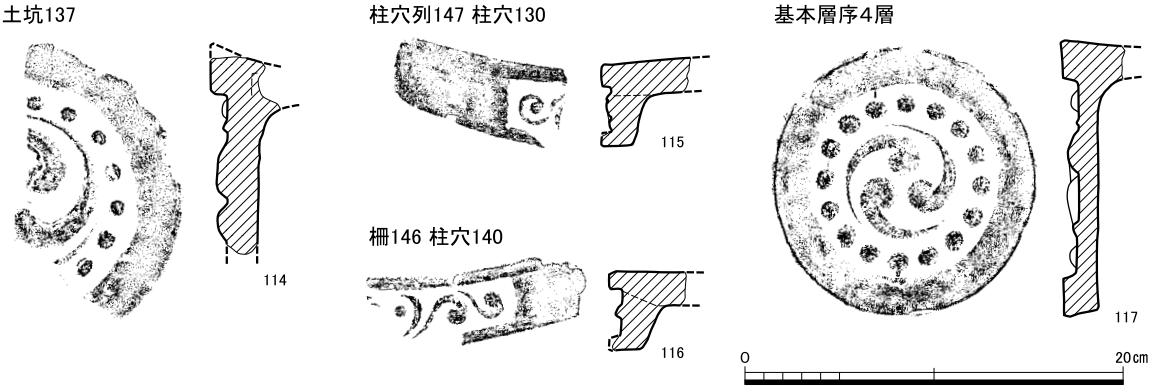


図34　その他遺構、基本層序４層出土瓦拓影及び実測図（１：４）

（４）土製品（図35、図版26）

鞴羽口（118・119） 118は溝214、119は溝215からそれぞれ出土した。118は厚みが2.8㎝、推定内径が４㎝前後を測る大型品である。先端は、溶融した鉄滓が付着する。119は先端付近の断片で、溶融した鉄滓の一部がみられる。

窯道具（120・121） いずれも１区の基本層序２層から出土した。120は円形平底の匣鉢、底部の厚み3.2㎝を測る。121は平底で扁平な輪状で、断面形は凹型を呈する。

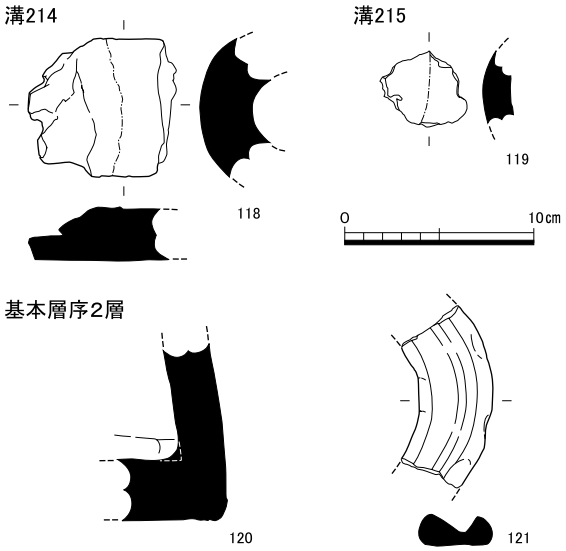


図35　出土土製品実測図（１：４）

（５）石製品（図36、図版26）

石鍋（122） 池状遺構101から出土した。滑石製石鍋の底部である。底部は平底で、外面は全体的にススが付着している。

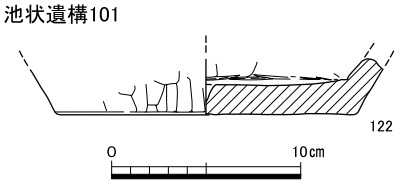


図36　出土石製品実測図（１：４）

（６）木製品（図版26）

井戸302からは、端材が多量に出土した。いずれも幅１～３㎝程度に裂き切られた端材である。なかには檜扇や穿孔のある部材を母材としたものも含まれる。

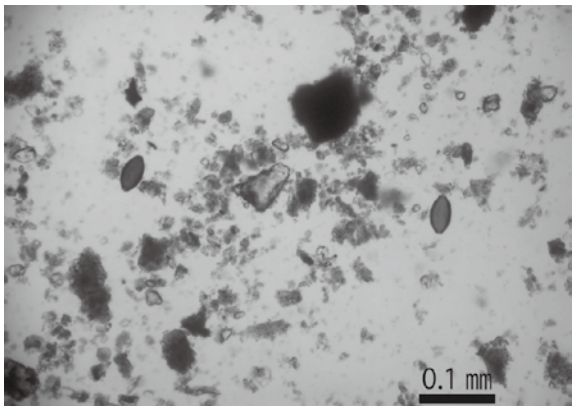
（７）その他遺物

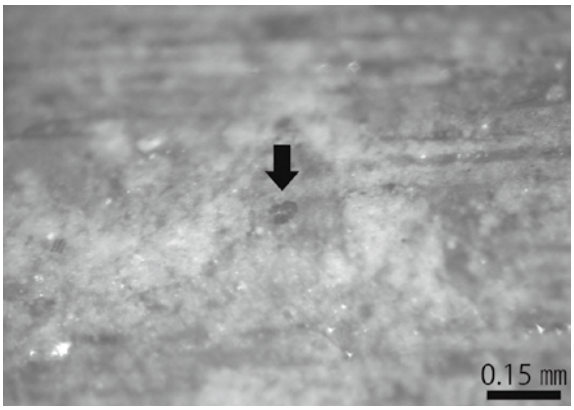
生物遺存体（図版26） 井戸302の埋土からヒトの遺存体が出土した。部位は、脛骨（左）骨幹部である。両端部を欠き、近位側は厚みのあるやや中央部付近で割れている。また、骨には複数の浅い掻き傷のような擦過痕のほか、破面やその付近で不規則な凹凸を呈する箇所がある。これらはイヌなどによって齧られた痕跡と考えられ、遺構に入る段階においては既に両端部を失っていた可能性が高いとみられる[11)]。

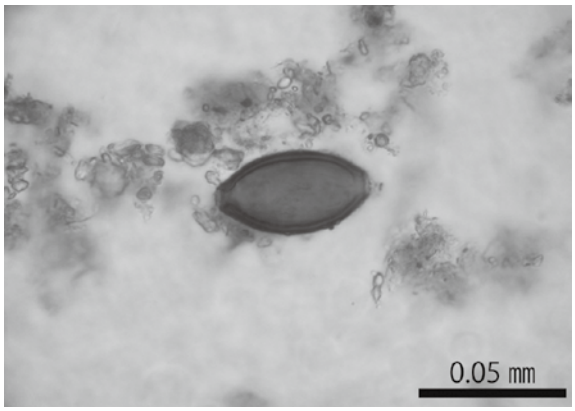
土壌の生物顕微鏡による観察（図37・38） 井戸302出土の木製端材の端面に付着した土壌を生物顕微鏡において観察した。その結果、鞭虫卵を確認した。当該遺構がトイレとして利用されたことを確定するには、土壌体積に占める鞭虫卵の密度を算出するなどの検討を要する。現段階では、トイレとして利用された可能性があることに留意しておきたい。

註

１） 土師器については、以下の論文を参照し、用語も準拠した。型式区分・編年上の年代観については、平尾2019論文に準拠した。







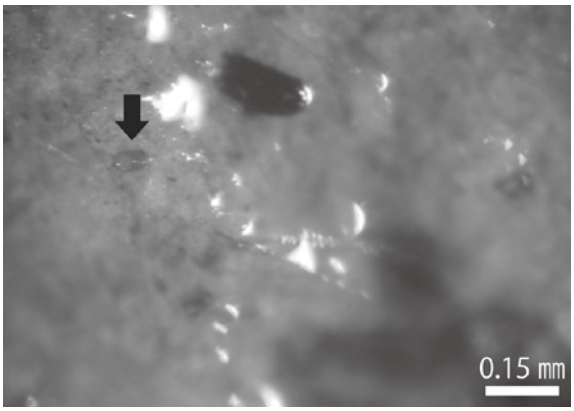


図37　井戸302検出 鞭虫卵の生物顕微鏡写真

図38　井戸302検出 鞭虫卵の実態顕微鏡写真

平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

2） 瓦器の編年と年代観については、以下の論文を参照した。
佐藤亜星「畿内産瓦器椀」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』 日本中世土器研究会　2022年

3） 堀内寛昭「焼継」『リーフレット京都』№128　財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館　1999年

4） 『木村捷三郎収集瓦図録』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年　図版39－591

5） 植山 茂ほか『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告　財団法人古代学協会　1984年　第62図－1

6） 上村和直「後期の瓦」『平安京提要』 角川書店　1994年　662頁　図４－４

7） 網 伸也・加納敬二・田中利津子ほか『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009－８　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年　図36－瓦10

8） 吉本健吾「法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡（09RT89）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度』 京都市文化市民局　2010年　図66－51

9） 山本雅和・網 伸也・田中利津子『京都国立博物館構内発掘調査報告書－法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009年　図43－瓦98

10） 上村和直・山下大輝『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015－14　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016年　図24－39

11） 丸山真史氏（東海大学人文学部人文学科）のご教示を受けた。

5．ま と め

（1）遺構の変遷

今回の調査では、平安時代後期から明治時代にかけての遺構を検出した。検出した遺構面は、基本的には基盤層である６層上面である。ただし、時期によって部分的な整地がなされている。

これら遺構の変遷は４つの時期に区分され、このうち桃山時代から江戸時代前期は、部分的な整地層の上下で検出されている（図39～43）。図44には、時期不明遺構を示した。また、周辺遺構を含めた遺構の変遷を既往の調査成果に沿って４つの時期区分で示した[1)]（図45～48）。

１）平安時代後期から室町時代（図39）

溝111、井戸206、井戸302がある。溝111が12世紀後半、井戸302が13世紀前半から後半、井戸206が13世紀末から14世紀後半である。法住寺殿の時期から土地利用が継続していたことを示す。井戸206の成立以前には、部分的な整地土の可能性のある堆積（５d層）も確認された。

これらの遺構は、いずれも深い遺構のみが検出されている。いずれも平安時代後期の瓦を含み、日常雑器類の土器などの遺物も一定量出土していることから、居住などの施設が周囲に所在したとみられる。調査地は、段丘崖が東に隣接する地点にあたり、西へ向けて傾斜する地形である。検出した遺構の傾向や遺物の出土状況、立地する地形条件を考え合わせると、当該期の遺構の大半は、後世に削平を受けたことが推測される。西隣接地（京博４次調査10区）では、秀頼期の大仏造営に際して、約1.5ｍの盛土がなされているので、この時期が削平の契機のひとつに推定される。

２）桃山時代から江戸時代前期（図40・41）

２区の整地層５a～５c層の上下で遺構が検出されている。整地層５a層からは天目椀（52）などが出土している。整地層５a～５c層の下位で検出された遺構は、落ち込み210、溝215である。整地層５a～５c層上面で検出された遺構は、溝214である。東側で検出された土坑202、溝203、土坑204も出土遺物や埋土の類似性からこれと同時期とみられる。特筆すべきは、溝214・溝215から鞴の羽口が出土している点である。溝214の埋土には炭が多く含まれ、整地層５a～５c層の上面にも炭が分布している。鞴の羽口の端部には、溶融した鉄滓が付着している。こうした状況から、整地層５a～５c層の施工の前後で、鉄製品の生産工房が付近に存在したことを想定させる。西隣接地（京博４次調査10区）では、先述の秀頼期の盛土から鞴の羽口が多量に出土している。南側の調査地６（図12）では、炉跡が検出されている。これらの状況を考え合わせると、秀頼期の大仏造営に伴う金属製品の生産工房の空間は、調査地６を主体とし、本調査地にかけて広がっていたとみられる[2)]（図49）。

この時期で、注目すべき遺物としては、土坑202から出土した金箔瓦があげられる。棟端などに用いられる飾り瓦か鬼瓦の一部と思われる３つの断片に金箔が残存している。所属時期は断定できないが、焼成がやや軟質であり、二次焼成は受けていない。古相（秀吉期）に当たる可能性を有する。金箔瓦は、これまで、京博構内の立会調査で軒平瓦が１点だけ出土している。今後、大仏

殿・築地・回廊の所用瓦を検討する上で、重要な成果といえる。

3）江戸時代後期（図42）

調査地全域において、多くの遺構を検出した。土坑201出土瓦の中には、大仏瓦の丸瓦（111）、平瓦（113）も含まれている。土坑201・池状遺構101の出土瓦の中には、大仏殿東側、大仏殿院南面回廊南側の出土瓦と同笵関係にある軒平瓦がある（97・107）。同笵関係は表５にまとめた。こうした出土傾向から、これら軒瓦は回廊の所用瓦の一部とみられる。同笵関係にある出土例のうち、性格が明確な遺構として、京博13次15区の溝30と京博15次６～８区の溝７がある。これらは同一遺構で、南面回廊の南側の東西幹線排水路として機能したものである。二次焼成を強く受けた瓦が大量に廃棄されて埋没している。これは寛政十年（1798）、落雷によって炎上した大仏殿とその周辺の所用瓦に比定されている[3)]。この大仏殿は、中井家を棟梁として慶長十九年（1614）に完成したものであった。土坑201は大規模であり、この遺構も、灰燼に帰した大仏殿の後処理に関わる遺構の可能性がある。こうした遺構や瓦が出土したことは、調査地が、大仏殿と関わる空間であったことを示している。

江戸時代後期の建築・構造物の遺構としては、柱穴列147、柱穴列322、柵145、柵146、柵229がある。柵145・柵146は、同じ方位でほぼ接して存在する。いずれも柱間が規則的で、一本柱の塀とみられる。先後関係は不明ながら、これらは同じ性格の塀の建て替えを示すとみられる。柵146の柱穴140と柱穴列147の柱穴130からは同文の軒平瓦が出土しており、ほぼ同時に存在した可能性が高い。方位も近似し、いずれも北で東に３～４度振れる。この方位は、大仏殿の方位と共通する[4)]。池状遺構101は、柵145・146に近接しており、塀によって閉塞される北側の空間を構成する遺構とみられる。この南に位置する土坑137は箱状に掘られた遺構で、これも水溜めの機能が想定される。第２章（２）で述べたように、当該地は、妙法院の院家である日厳院とその寺中の宝生院の範囲にあたっている。今回検出した遺構群は、これらに伴うものとして位置付けられる。なお、かつてここに存在した方丈の建物は、現在、方広寺に移築されている[5)]。土坑102から出土した鶴亀桃をあしらった炉は、方丈で使用されたものであろうか。

4）明治時代（図43）

２区西半から１区全域にかけて0.6～0.9ｍの盛土がなされる（基本層序２ａ～２ｅ層）。これは、恭明宮の整地層に比定される。これらの層には、多くの瓦片が含まれており、日厳院・宝生院の建物解体に伴う廃材が混入したものとみられる。恭明宮の竣工は明治４年（1871）である。

３区では南にかけて盛土がみられる（図版６の３区４・５層）。これは、崩門通が七条通として敷設された際の盛土に比定される。調査地の東に隣接して段丘崖があり、ここを切り崩し、調査地側を盛土することによって七条通が敷設されたことを示す。調査当初は、現在の七条通の地盤が旧地形を反映し、調査区は削り込まれている印象を抱いたが、調査所見は、その逆であった。崩門の解体移築工事は明治28年（1895）、京都市電の東山線・七条線が大正元年（1912）開業である。

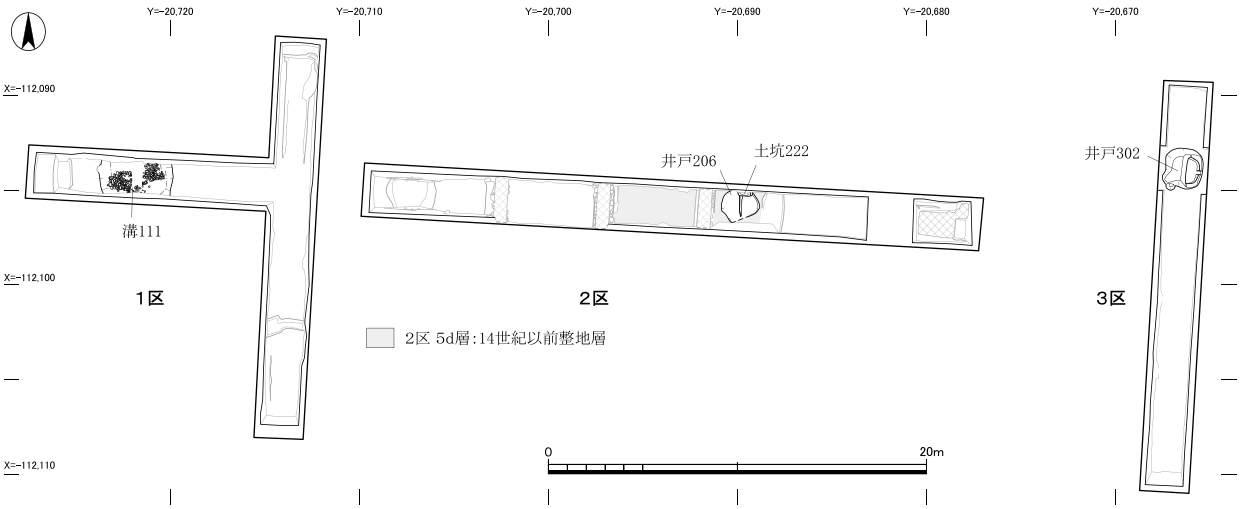


図39　遺構変遷図１　平安時代後期から室町時代（１：400）

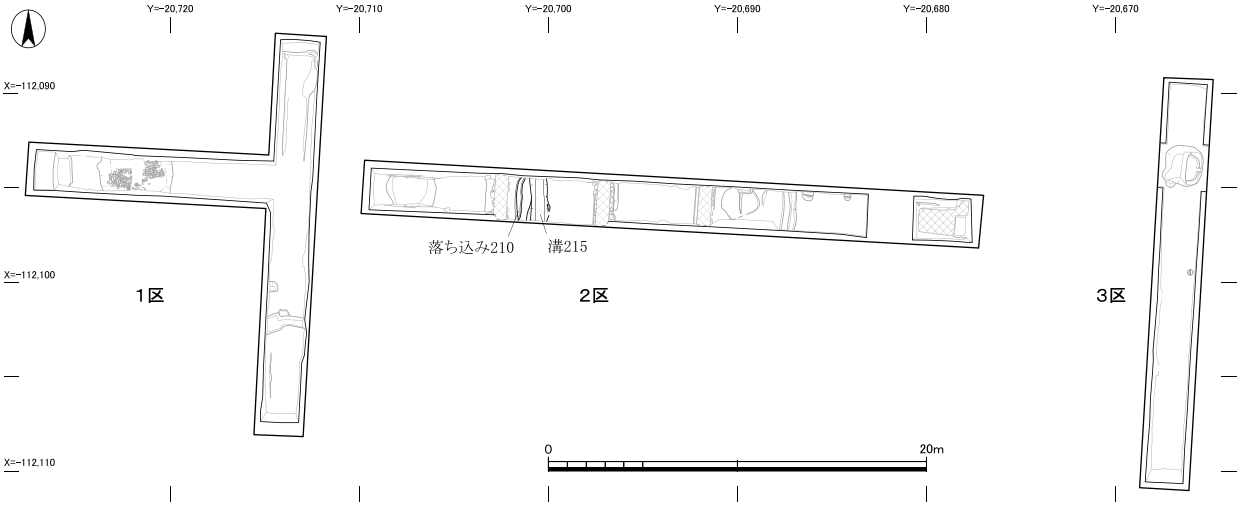


図40　遺構変遷図２　桃山時代から江戸時代前期（１：400）

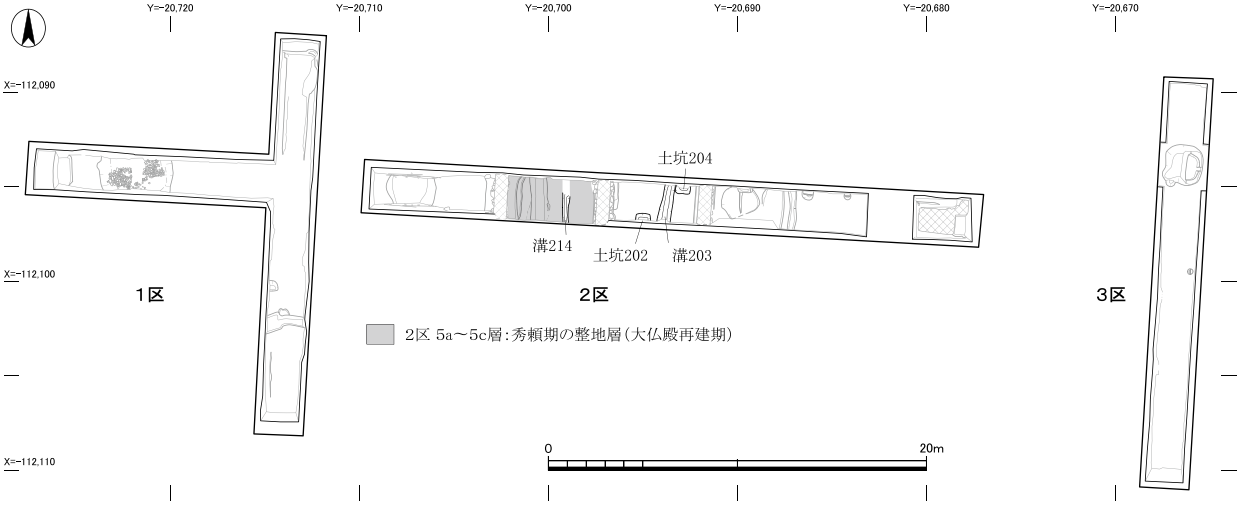


図41　遺構変遷図３　江戸時代前期（１：400）

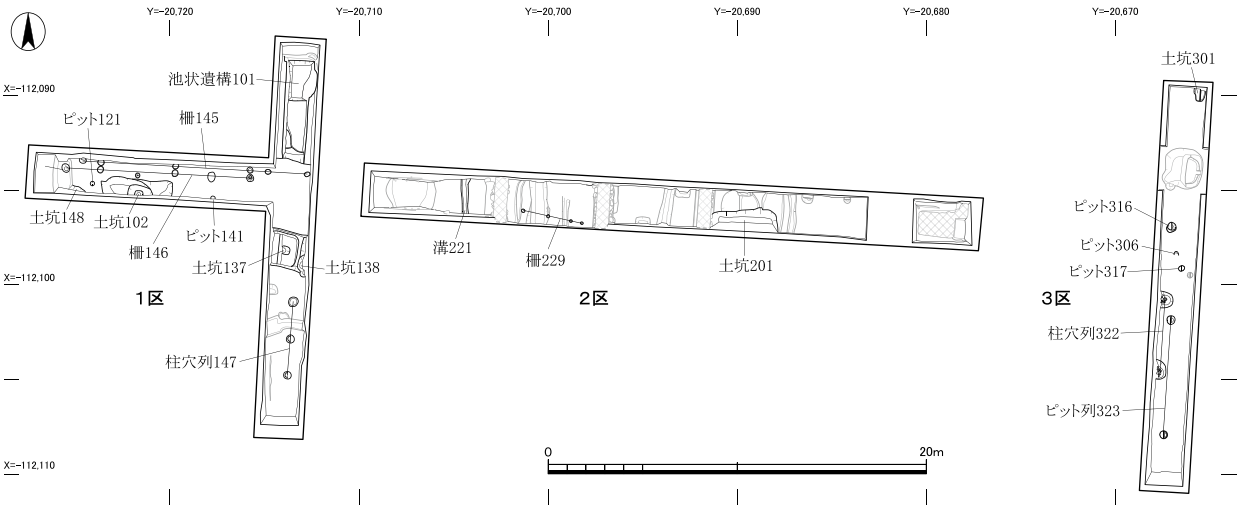


図42　遺構変遷図４　江戸時代後期（１：400）

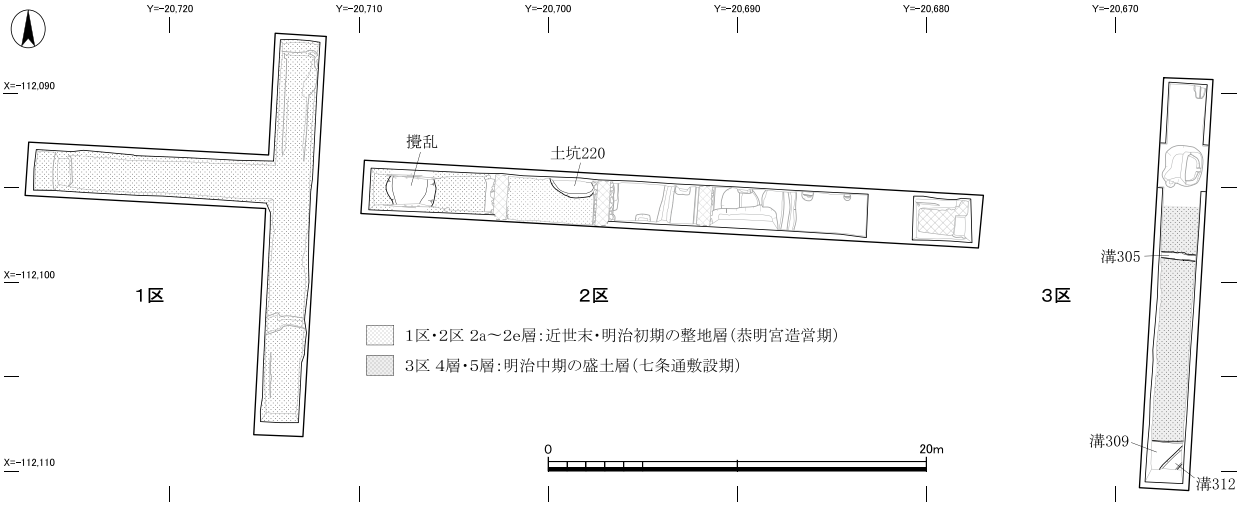


図43　遺構変遷図５　明治時代（１：400）

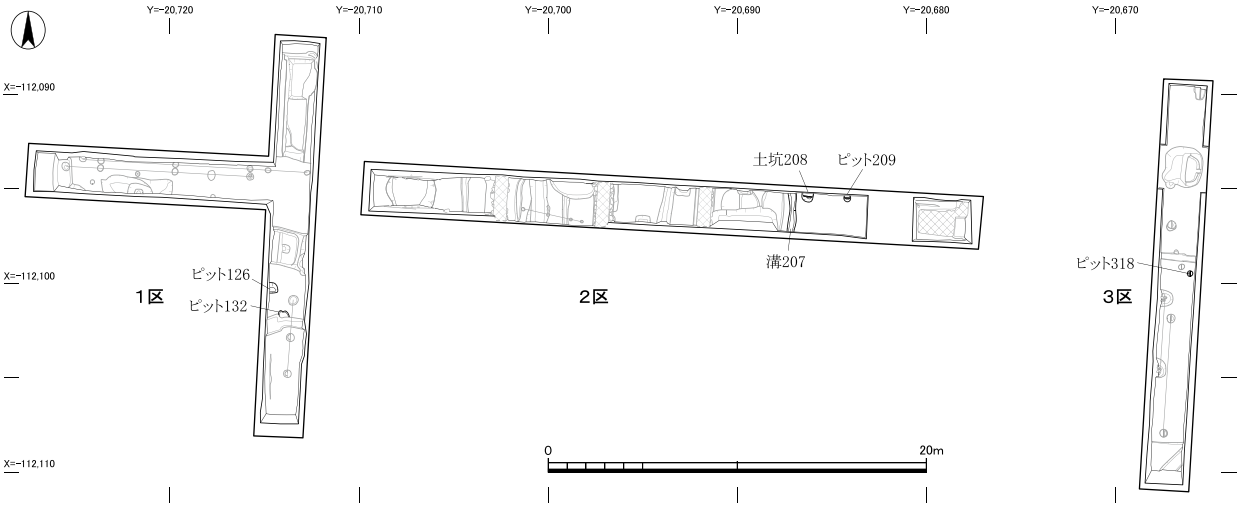


図44　遺構変遷図６　時期不明（１：400）

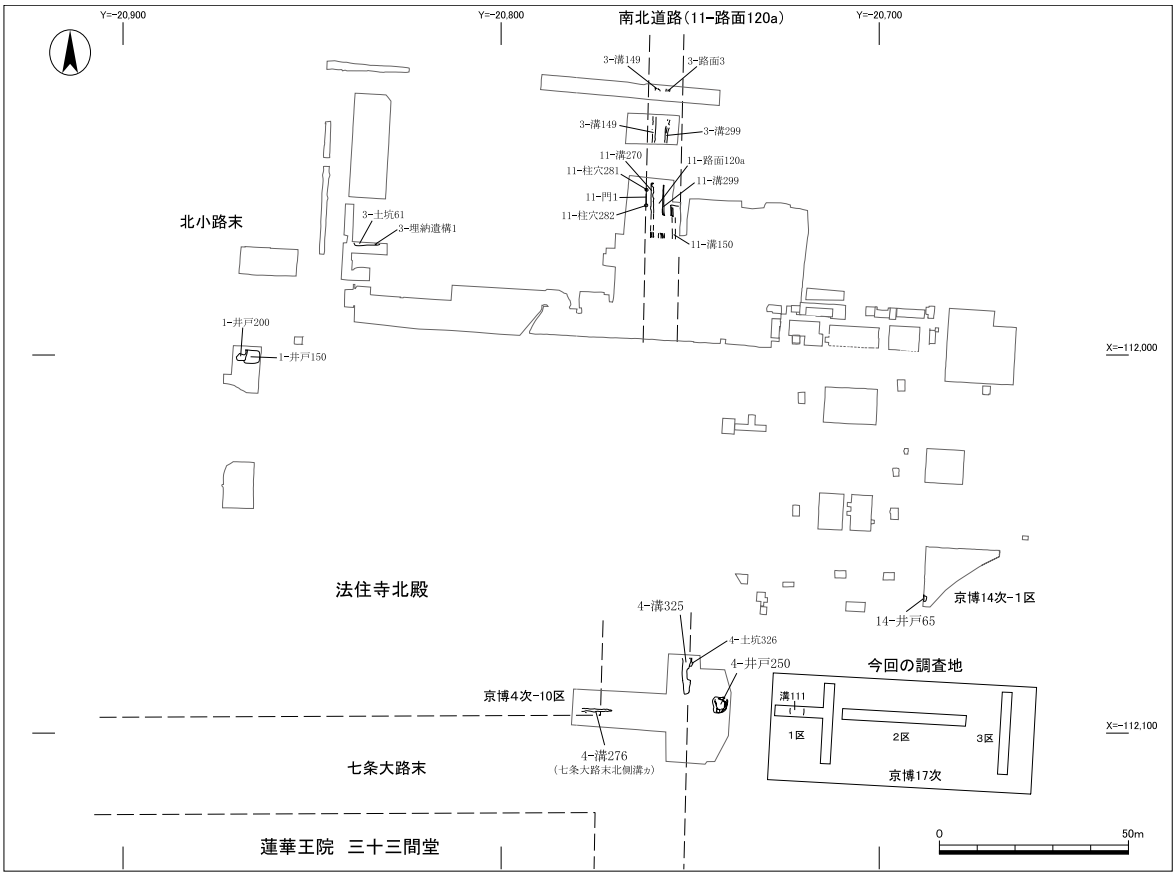


図45　周辺遺構変遷図１　平安時代（１：2,000）

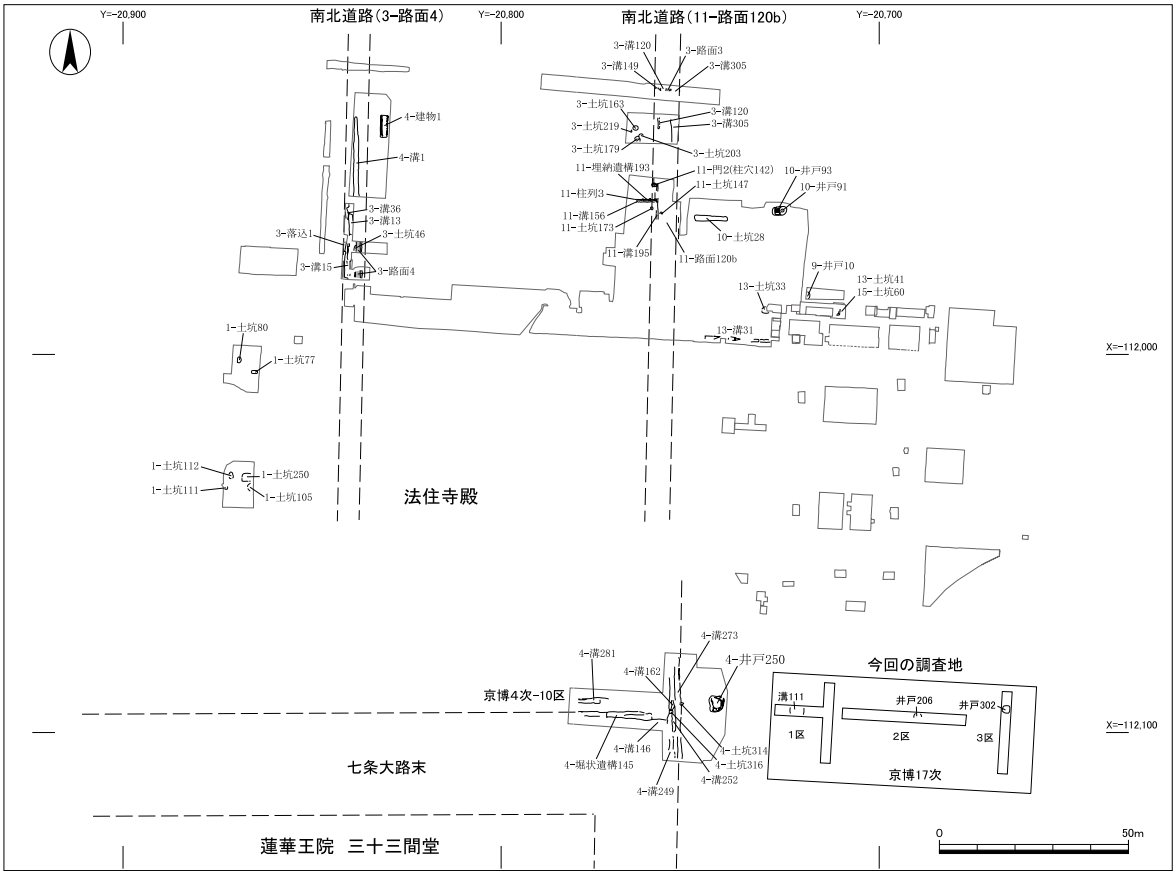


図46　周辺遺構変遷図２　鎌倉時代・室町時代（１：2,000）

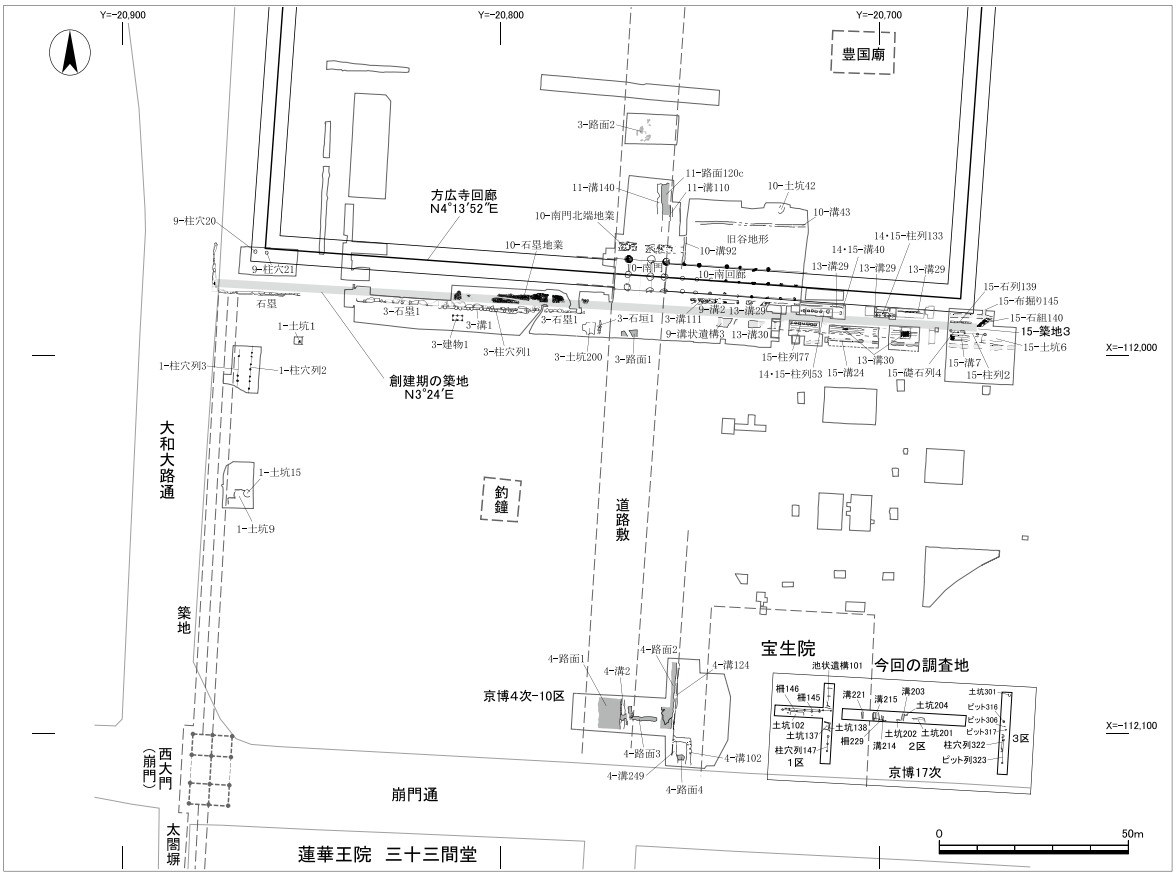


図47　周辺遺構変遷図３　桃山時代・江戸時代（１：2,000）

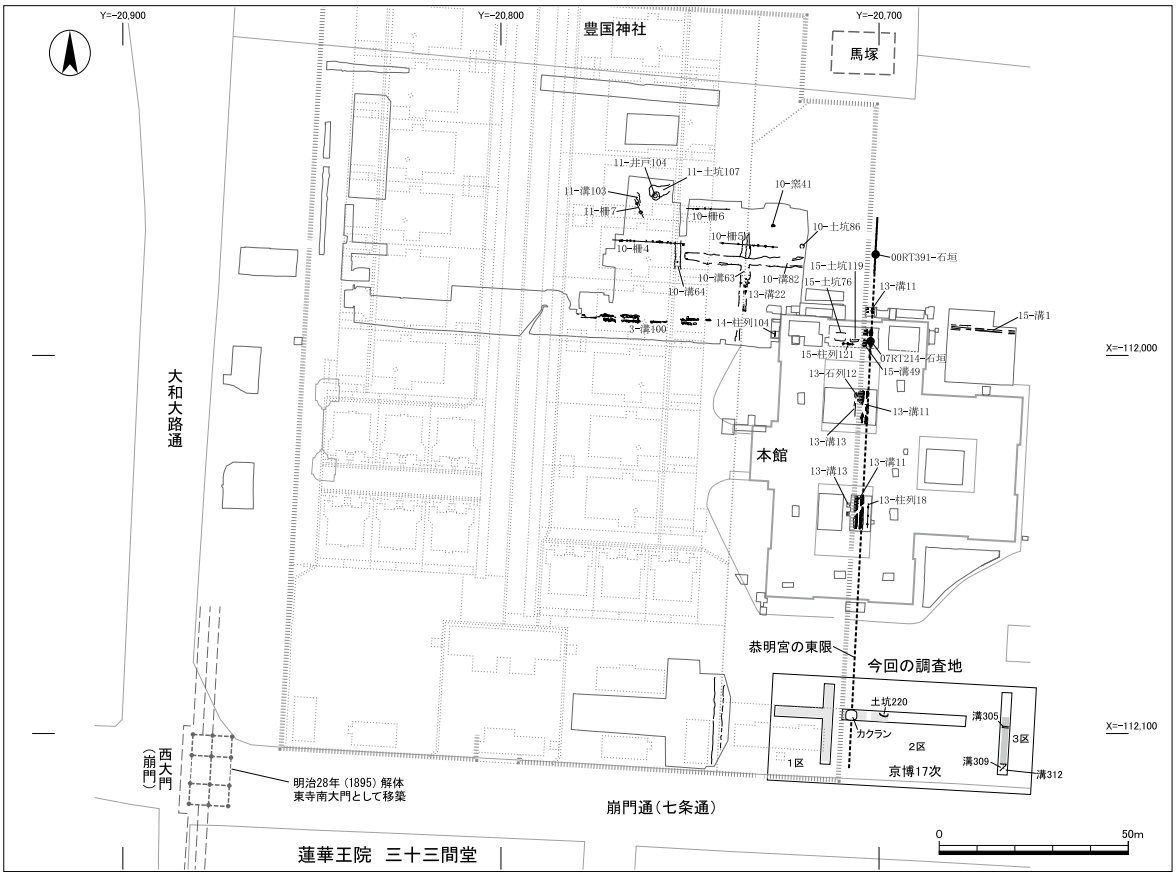


図48　周辺遺構変遷図４　江戸時代後半・明治時代初頭（１：2,000）

表５　大仏殿・方広寺所用瓦の同笵関係

遺物番号	No.	調査(次数・番号)	地区	位置	出土遺構	遺物番号(挿図・図版)	備考	文献
軒平瓦(97)	1	京博3次	1区	大仏殿院南門南側	攪乱	瓦98(図版43)		4・12
軒平瓦(107)	1	京博3次	1区	大仏殿院南門南側	盛土	瓦96(図版43)		4・12
	2	京博13次	15区	大仏殿院南門南東側	溝30(京博15次溝7と一連の遺構)	39(図24)	再建の南面回廊の南に位置する東西幹線排水路。火災による被熱した瓦や壁土、炭化材が上層から出土。寛政10年(1798)の火災により埋没したと推定される。	16
	3	京博15次	6～8区	大仏殿院南面回廊東半の南側	溝7(京博13次溝30と一連の遺構)	瓦22(図版25)		17
	4	調査3	1・2区	大仏殿東面基壇東側	溝65(調査区東端)	51(図22)		20
	5	調査6	不明	崩門通(現 七条通)南側		14(第88図)		23

調査(次数・番号)、文献の番号は、表1・2に対応する。

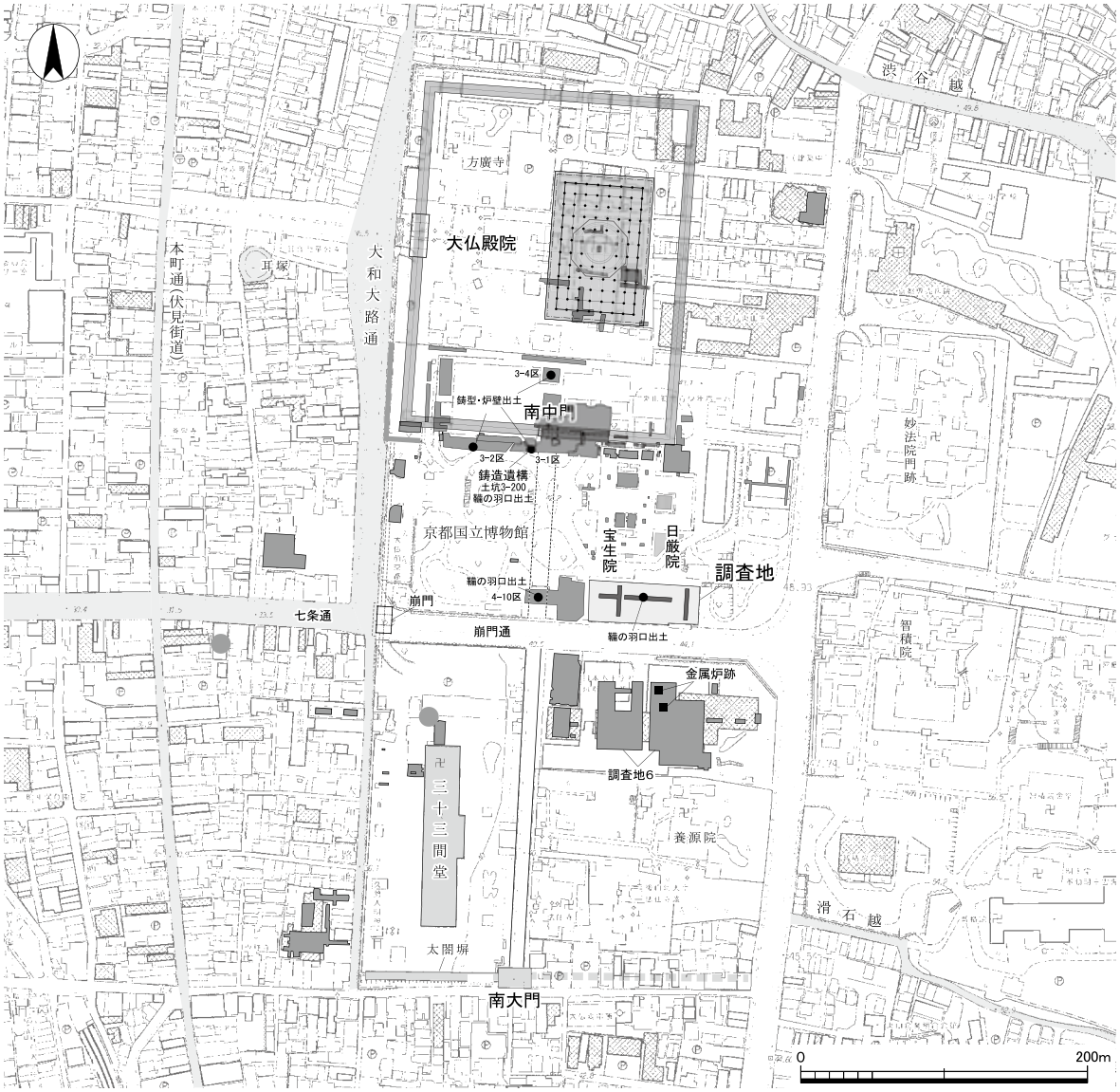


図49　大仏殿・方広寺の復元と調査地、金属製品生産関係遺構（１：5,000）

（2）法住寺殿とその後の土地利用

1）七条大路末関連の遺構と調査地（図45）

平安京の復元データは、町単位で把握されている。町の周囲については、築地心の座標値が割り出されている。左京七条大路・東京極大路の交差点北西隅角は、七条四坊十三町の南東隅角にあたる。その築地心の東西座標は、X=－112,094.65（Y=－21,278.85地点）である。これを平安京の振れ角Ｎ０°14′23″Ｗに基づいて、東へ延長させ、京博４次調査10区・溝276（溝４－276）の検出地点Y=－20,775の地点で求めると、X=－112,092.54となる（七条大路北面の築地心の復元値）。大路の築地とそれに面する大路側溝心までの距離は、『延喜式』左京職京程条によれば八丈二尺とあるので、平安京の造営尺（１尺：0.298ｍ）によると2.44ｍとなる。したがって、七条大路末北側溝心の推定値の座標はX=－112,094.98となる。溝４－276の心の座標は、X=－112,093.77であるので、推定値よりも北1.21ｍの位置にあたる。現状では、溝４－276が推定地の近似値にあたるとみてよく、従前より評価されているように、これを推定七条大路末北側溝として捉えておきたい。

このようにみたとき、今回の調査では、１区、２区西半、３区で七条大路末北側溝および路面の一部が調査対象となっているが、側溝や路面らしい明確な遺構を検出していない。また３区では、井戸302を検出している。こうした状況から、今回の調査区においては、七条大路末の敷設の対象地ではなかった公算が大きい。そうみてよければ七条大路末は、京博４次調査10区で検出されている南北溝４－溝325とＴ字状に交差し、調査地の西で止まる形態であったことが想定できる。

2）12世紀後半から14世紀の井戸の分布（図50）

図50には、これまでの法住寺殿の地割・街区形成の成果[6)]に学びながら、上記の七条大路末の調査所見を反映した。また、この範囲において、12世紀後半から14世紀代の井戸の検出例を集成し、その地点を図示した。これによると、広範囲に井戸が分布している様子が理解できる。また、法住寺殿の廃絶後も広範囲に土地利用が継続している様子もみてとれる。調査地点に偏りはあるが、本調査地の南北で特に井戸が集中する傾向を示している。今回の調査区は、幅２ｍと狭いにも関わらず、２基の井戸を検出した。近接する西側の京博４次調査10区や北側の京博14次調査１区でも13世紀後半、12世紀後半の井戸を検出している。こうした状況を考え合わせると、法住寺殿とその後において、調査地周辺は、居住などの施設が所在する中心的な空間のひとつとして位置付けられる。調査地は、養和元年（1181）に造営された法住寺殿新御所[7)]の推定地のひとつでもあり、法住寺殿の街区形成やその内部の土地利用を探る上で、重要地点といえる。

表６　調査地周辺における平安時代後期から中世前期の井戸の検出例

調査（次数・地区・番号）	時期	遺構	井戸枠構造・規模		遺物	文献番号
京博4次10区	13世紀後半	井戸4-250	方形縦板組	井戸枠一辺約0.9m、深さ3.5m以上。縦板は幅0.2～0.25m、遺存長約1.8m。横桟4段が遺存。	土師器皿（Ⅶ期古段階）、須恵器、瓦器、灰釉系陶器、施釉陶器、焼締陶器、白磁、中国製青磁。	5・12
京博9次1区	13世紀後半～15世紀前半	井戸9-10	（方形縦板組）	平面では一部を検出。断面で井戸が新旧2時期あることを確認。断面観察により、新相が方形縦板組であったと推定。	土師器（Ⅶ～Ⅷ期）。	12
京博10次3区	14世紀末～15世紀前半	井戸10-91	素掘り	井戸93と重複し、これより新しい。直径約2.2m、深さ約2.5m。	鳥類に推定される骨片、ヒユ属の種実。土師器皿、美濃産系山茶椀。	13
		井戸10-93	方形縦板組	井戸枠一辺0.9m、横桟は最下段のみ遺存。深さ約3.4m。底部には高さ約0.45mの曲物を据える。	土師器皿（Ⅷ期中～新段階）、瀬戸産深皿、常滑産甕、備前産甕。	
京博14次1区	12世紀後半	井戸14-65	方形縦板組	井戸枠一辺約1.0m、横桟1段が遺存。深さ2.1m以上。	土師器皿（6A段階）、輸入白磁。	17
京博17次2区	13世紀末～14世紀後半	井戸206	素掘り	長軸2.0m、深さ1.5m以上。	土師器皿（7B～8A段階）、瓦質土器、東播系須恵器鉢、古瀬戸折縁深皿、備前産擂鉢。	本報告
京博17次3区	13世紀前半～後半	井戸302	素掘り	南北2.08m、東西1.94m、深さ1.95m以上。	土師器皿（6C～7A段階）、瓦器椀、瓦質土器、東播系須恵器鉢。	本報告
調査6	13世紀中頃	C18井戸	方形縦板組	井戸枠一辺約1m、深さ約4.5m、縦板は幅35cm、検出長約2.5m。横桟は3段分が遺存している。底部は2段構成で、深さ約3.3mで井戸枠底部が位置し、そこから径約0.5mの円形の素掘りとなる。	瓦器椀、火鉢。	23
	13世紀中頃	G2井戸	方形縦板組	井戸枠一辺は約1.1m。縦板の検出長は1.5m。横桟は3段分が遺存する。縦板の底面は深さ3.7mに位置する。四隅に支柱を有する。深さは約5m。	土師器皿、瓦器、羽釜。	
	14世紀代に埋没	G3井戸	楕円形の素掘り	径2.8～3mの楕円形の素掘り。深さ7m以上。検出面から深さ約1mの地点に横穴を有する。	土師器皿、瓦器、瓦質土器、磁器、火鉢、石鍋、塼仏。	
	14世紀代	G25井戸	隅丸長方形の素掘り	一辺1.3～1.6m。深さ4.5m。	土師器皿、須恵器、瓦質土器（羽釜）、木製品（曲物等）。	
	14世紀代	I 13井戸	楕円形の素掘り	径2.1～2.3m、底部径は1.1m。深さ4.4m。	土師器皿、須恵器（擂鉢）、火鉢、常滑産甕、石鍋。	
	13世紀中頃	N22井戸	円形の素掘り	径約1m、深さ2.3m。	土師器皿、須恵器。	
	14世紀代か	W8井戸	円形の素掘り	径約1.4m、深さ4.5m。	土師器皿、須恵器、（擂鉢）、塩壷、火鉢、輸入磁器、凝灰岩の地覆石。	
調査10	平安時代から鎌倉時代（最勝光院の時期）	SE01	方形縦板組	井戸枠一辺1.4m。縦板は幅35㎝、厚さ7㎝、残存長約2m。各辺それぞれ縦板4枚で構成。	土師器、瓦器、瓦類、金属製品の瓔珞（ようらく）。	27
調査15	平安時代末。鎌倉時代前期には埋没。	SE5	方形縦板組	井戸枠一辺約1m。縦板は幅33㎝、厚さ4㎝、各辺それぞれ縦板3枚で構成。縦板は上下2段で構成。検出面から深さ約4.2mまでの断面を図化。重機でその後、掘り進めて深さ6mまで確認したが、底部には到達せず。	土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、木製品。	32
調査16	12世紀後半	SE211	方形縦板組	井戸枠一辺約0.9m、最下部で横桟1段を確認。	土師器・須恵器・緑釉陶器、種（モモ）。	33
調査29	12世紀後半	井戸767	方形縦板組	井戸枠一辺約0.8m。縦板は検出長2.03m。横桟は2段分が遺存。底部中央には、径0.4m、深さ0.2mの曲物を据える。	土師器皿（Ⅵ期古段階）、瓦器椀、白磁壷。	45

調査（次数・番号）、文献番号は、表1・2に対応する。

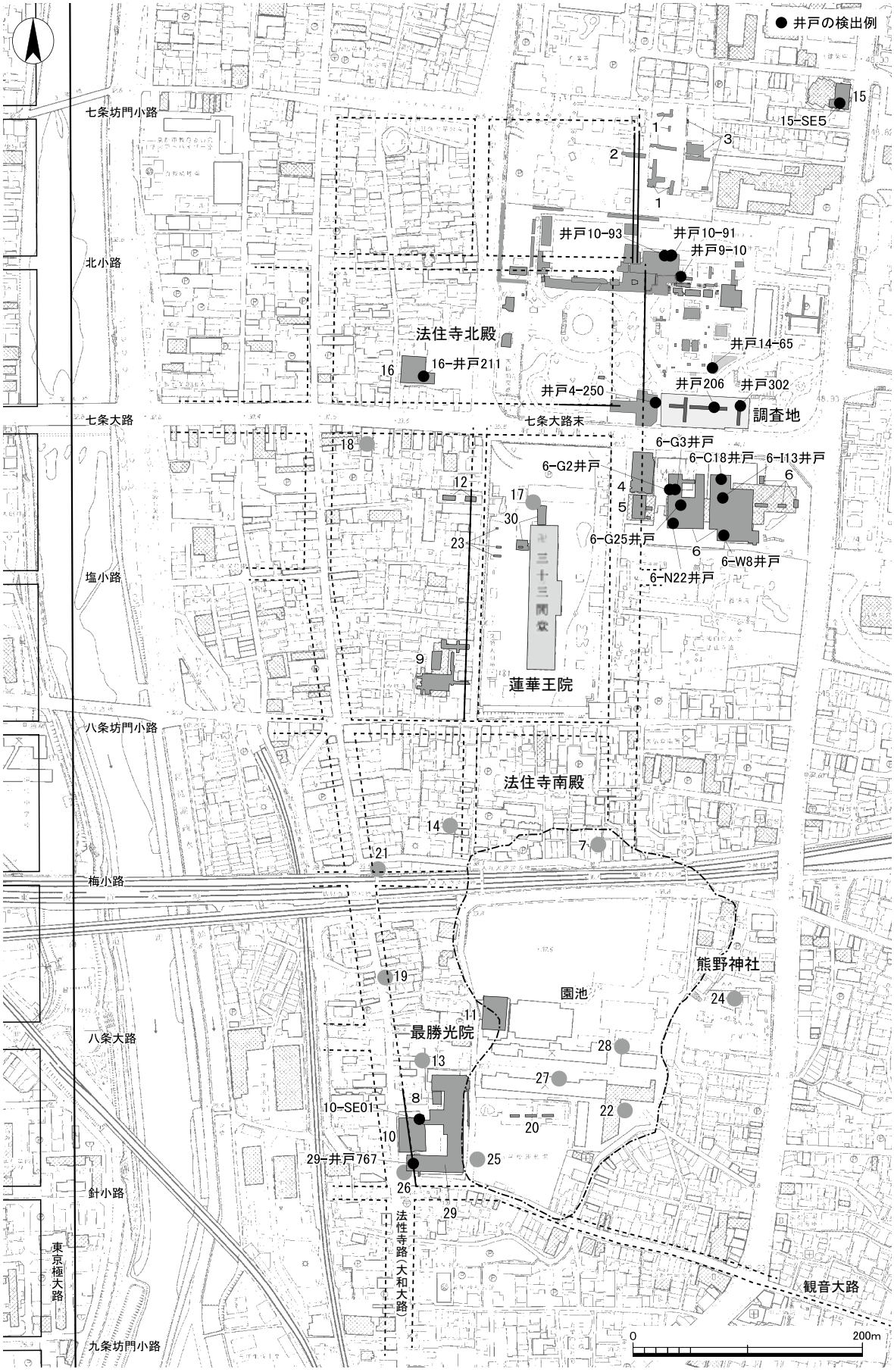


図50　法住寺殿の地割りと井戸の検出例（１：5,000）

註

1） 上村和直・山下大輝『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－14　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016年　図26～29に加筆した。

2） 『当代記』慶長十六年（1611）十一月条には、大仏殿は「みなハギ柱なり」とある。現在、方広寺の鐘楼や、京都国立博物館の庭に展示してある鉄輪は、このハギ柱に使用したものとみられる。この分だけでも相当量の鉄製品が必要だったことがわかる。なお、このハギ柱の史料については、河内将芳『秀吉没後の豊臣と徳川 京都東山大仏の変遷からたどる』 淡交社　2023年　146頁参照。

3） 小檜山一良『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021－13　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2022年　40頁

4） 中井家を棟梁として慶長十九年（1614）に完成した大仏殿および回廊の方位は、北で４度13分52秒東へ振る。長宗繁一「方広寺大仏殿の復元試案」『法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009－8　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年　55～74頁参照。

5） 永井規男「日厳院の古指図とその客殿遺構」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東)』2513頁　1984年

長宗繁一「大仏殿復元試案－発掘調査成果からのアプローチ－」『日本史研究』698　2020年

6） 上村和直「法住寺殿の成立と展開」『研究紀要　第９号』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

7） 『明月記』養和元年十二月十三日条

付表１　土器類観察表

番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
				口径	底径	器高					
1	土師器	皿	溝111 第3層 畔の東側	7.8	—	1.3	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	1/4	
2	土師器	皿	溝111 第3層 畔の西側	8.1	—	1.3	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	1/4	
3	土師器	皿	溝111 第3層 畔の西側	9.5	—	1.3	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	2/5	
4	土師器	皿	溝111 第3層 畔の西側	13.7	—	2.8	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良	1/3	
5	瓦器	皿	溝111 第2層 畔の西側	8.3	4.0	—	N5/0 灰	密	良	4/5	
6	瓦器	椀	溝111 第2層 畔の北側	14.5	5.0	4.4	N4/0 灰	密	良	3/5	
7	瓦器	椀	溝111 第3層 畔の西側	14.9	5.6	5.2	N5/0 灰	密	良	2/5	
8	土師器	皿	井戸302 下層	8.5	—	1.3	10YR8/1 灰白	密	良	2/5	
9	土師器	皿	井戸302 下層	8.4	—	1.4	10YR8/1 灰白	密	良	4/5	
10	土師器	皿	井戸302 中層	8.4	—	1.2	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	2/5	
11	土師器	皿	井戸302 下層	8.6	—	1.6	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	2/5	
12	土師器	皿	井戸302 中層	9.8	—	2.0	7.5YR7/3 にぶい橙	密	良	1/6	
13	土師器	皿	井戸302 下層	11.3	—	(2.1)	10YR8/3 浅黄橙	密	良	1/5	
14	土師器	皿	井戸302 中層	11.7	—	(2.1)	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	1/5	
15	土師器	皿	井戸302 中層	12.5	—	(1.9)	2.5Y7/2 灰黄	密	良	口縁部 2/5	
16	土師器	皿	井戸302 下層	12.7	—	(2.2)	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	1/6	
17	土師器	皿	井戸302 中層	4.6	—	1.1	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	1/3	
18	土師器	皿	井戸302 下層	6.7	—	1.8	10YR8/2 灰白	密	良	1/1	
19	土師器	皿	井戸302 中層	8.2	—	2.1	10YR8/2 灰白	密	良	1/4	
20	土師器	皿	井戸302 中層	10.6	—	2.7	2.5Y7/1 灰白	密	良	3/5	
21	土師器	皿	井戸302 中層	12.3	—	(2.9)	10YR8/2 灰白	密	良	1/4	
22	土師器	皿	井戸302 中層	13.0	—	(3.3)	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	4/5	
23	瓦器	椀	井戸302 中層	10.9	—	3.5	内外:N4/0 灰 断:N8/0 灰白	密	良	1/8	
24	瓦器	椀	井戸302 東半	10.1	—	(2.5)	N7/0 灰白　N3/0暗灰	密	良	1/10	
25	須恵器	鉢	井戸302 中層	27.0	—	(3.6)	N6/0灰	密	良	1/20	
26	須恵器	鉢	井戸302 中層	28.0	—	(6.7)	10YR7/1 灰白	密	良	1/5	
27	須恵器	鉢	井戸302 中層	27.4	—	(5.2)	N6/0 灰	密	良	口縁部 1/7	
28	瓦質土器	鍋	井戸302 中層	23.8	—	(3.6)	内:3/0 暗灰　外・断: 10YR7/2にぶい黄橙	密	良	1/12	
29	瓦質土器	鍋	井戸302 中層	28.0	—	(6.1)	内外:N3/0 暗灰 断:10YR8/1 灰白	密	良	1/12	
30	瓦質土器	羽釜	井戸302 下層	22.2	—	(8.5)	10YR7/2 にぶい黄橙 N6/0灰	密	良	1/4	
31	瓦質土器	羽釜	井戸302 中層	27.0	—	(4.5)	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	1/12	
32	瓦質土器	鉢	井戸302 中層	31.1	—	(6.3)	N3/0 暗灰	密	良	口縁部 1/8	
33	瓦質土器	甕	井戸302 東半	31.0	—	(4.4)	N4/0 灰	密	良	1/12	
34	緑釉陶器	不明	井戸302 中層	—	—	(2.2)	胎:7.5YR8/2 灰白 釉:緑色	密	良	破片 1/8	
35	土師器	皿	井戸206 埋土崩落	7.7	—	(1.4)	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良	1/5	

器高の( )は残存値

番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
				口径	底径	器高					
36	土師器	皿	井戸206 埋土崩落	8.2	—	(1.2)	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	1/4	
37	土師器	皿	井戸206 埋土崩落	11.8	—	2.0	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良	1/8	
38	土師器	皿	井戸206 埋土崩落	11.9	—	(1.9)	10YR8/3 浅黄橙	密	良	1/6	
39	土師器	皿	井戸206 埋土崩落	5.9	—	1.7	7.5YR8/3 浅黄橙	密	良	7/8	
40	土師器	皿	井戸206 埋土崩落	11.5	—	(2.5)	10YR8/3 浅黄橙	密	良	1/8	
41	土師器	皿	井戸206 埋土崩落	12.9	—	(2.9)	10YR8/2 灰白	密	良	1/6	
42	須恵器	鉢	井戸206 埋土崩落	24.6	—	(4.1)	N7/0 灰白	密	良	1/8	
43	須恵器	甕	井戸206 第1層	—	—	(8.0)	N7/0 灰白	密	良	体部破片	
44	瓦質土器	鍋	井戸206 埋土崩落	24.0	—	(3.0)	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	1/8	
45	瓦質土器	鍋	井戸206 埋土崩落	23.0	—	(4.4)	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	1/6	
46	瓦質土器	浅鉢	井戸206 埋土崩落	—	—	(6.2)	N4/0 灰	密	良	脚部のみ	
47	施釉陶器 古瀬戸	瓶子	井戸206 第1層	—	—	(6.6)	胎:10YR8/3 浅黄橙 釉:5Y5/3 灰オリーブ	密	良	体部破片	
48	施釉陶器 古瀬戸	折縁深皿	井戸206 埋土崩落	22.2	—	(7.5)	胎:2.5Y7/1 灰白 釉:2.5Y7/2 灰黄	密	良	1/12	
49	施釉陶器 古瀬戸	折縁深皿	井戸206 第2層	27.3	—	(5.2)	胎:10YR8/3 浅黄橙 釉:5Y7/2 灰白	密	良	1/8	
50	焼締陶器	擂鉢	井戸206 埋土崩落	30.4	10.8	(7.3) +(8.3)	10YR7/1 灰白	密	良	1/16	
51	須恵器	鉢	整地層5a層	—	—	(3.2)	N6/0 灰	密	良	破片	
52	施釉陶器	天目椀	整地層5a層	11.7	—	(4.4)	胎:10YR8/2 灰白 釉:5YR4/4 にぶい赤褐 ～N2/0 黒	—	—	1/10	
53	施釉陶器	椀か	整地層5a層	—	6.5	(2.3)	胎:10YR8/3 浅黄橙 釉:2.5YR6/4 にぶい黄	密	良	底部3/4	
54	磁器	椀	土坑102	—	4.4	(2.9)	胎:N8/0 灰白 釉:呉須、透明	密	良	1/3	白玉粉による焼き継ぎあり
55	瓦質土器	風炉	土坑102	長さ28.0	幅(24.8)	(27.7)	N3/0 暗灰(受け部より上の内面 10YR7/2にぶい黄橙)	密	良	5/7	鶴亀桃の造形
56	磁器	椀	土坑201	—	4.6	(3.9)	胎:N8/0灰白 釉:透明、呉須	密	良	1/4	
57	土師器	皿	1区東壁 基本層序4層	4.4	—	1.2	5YR7/4 にぶい橙	密	良	1/1	
58	磁器	椀	1区東壁 基本層序4層	8.4	2.7	4.9	胎:N8/0 灰白 釉:呉須、透明	密	良	1/1	

器高の( )は残存値

付表２　瓦類観察表

掲載番号	器形	遺構・層名	色調	胎土	焼成	備考
59	軒丸瓦	溝111 第3層 畔の東側	N6/0 灰	密	良	
60	軒平瓦	溝111 第3層 畔の東側	10YR8/2 灰白～2.5Y7/1 灰白	密	良	
61	軒平瓦	溝111 第2層 畔の東側	2.5Y8/1 灰白	密	良	
62	軒平瓦	溝111 第3層下位 礫群直上	N5/0 灰	密	良	
63	平瓦	溝111	N7/0 灰白～N5/0 灰	密	良	
64	平瓦	溝111	5Y7/1 灰白	密	良	
65	平瓦	溝111	N5/0 灰	密	良	(須恵質)
66	軒丸瓦	井戸302 中層	N4/0 灰	密	良	
67	軒丸瓦	井戸302 上層	N7/0 灰白	密	良	
68	軒平瓦	井戸302 中層	N4/0 灰	密	良	
69	軒平瓦	井戸302 中層	N5/0 灰	密	良	
70	軒平瓦	井戸302 中層	N3/0 暗灰	密	良	
71	丸瓦	井戸302 下層	N4/0 灰～10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	
72	丸瓦	井戸302 中層	N6/0 灰	密	良	
73	平瓦	井戸302 中層	N3/0 暗灰	密	良	
74	平瓦	井戸302 中層	N3/0 暗灰	密	良	
75	平瓦	井戸302 東半	N3/0 暗灰～N7/0 灰白	密	良	
76	平瓦	井戸302 中層	5YR6/4 にぶい橙	密	良	
77	軒丸瓦	井戸206 第4層	7.5Y6/1 灰	密	良	
78	軒平瓦	井戸206 埋土崩落	N5/0 灰	密	良	
79	軒平瓦	井戸206 第1層	—	密	—	
80	軒平瓦	井戸206 埋土崩落	N3/0 暗灰	密	良	
81	丸瓦	井戸206 埋土崩落	N3/0 暗灰	密	良	
82	丸瓦	井戸206 埋土崩落	N5/0 灰	密	良	
83	平瓦	井戸206 埋土崩落	2.5Y7/1 灰白	密	良	
84	平瓦	井戸206 埋土崩落	N4/0 灰～N7/0 灰白	密	良	
85	平瓦	井戸206 埋土崩落	N4/0 灰～N7/0 灰白	密	良	
86	丸瓦	土坑202	N6/0 灰	密	良	
87	道具瓦	土坑202	N3/0 暗灰	密	良	鬼瓦把手か
88	道具瓦	土坑202	N3/0 暗灰	密	良	
89	道具瓦	土坑202	N4/0 灰	密	良	
90	道具瓦	土坑202	N3/0 暗灰	密	良	
91	金箔瓦	土坑202	N3/0 暗灰	密	良	
92	金箔瓦	土坑202	N3/0 暗灰	密	良	
93	金箔瓦	土坑202	N3/0 暗灰	密	良	
94	軒丸瓦	池状遺構101 第1層	N8/0 灰白～10YR8/2 灰白	密	良	
95	軒丸瓦	池状遺構101 第1層	N7/0 灰白	密	良	
96	軒丸瓦	池状遺構101 第2層	N3/0 暗灰	密	良	

掲載番号	器形	遺構・層名	色調	胎土	焼成	備考
97	軒平瓦	池状遺構101 第1層	N3/0 暗灰	密	良	
98	平瓦	池状遺構101 第2層	N3/0 暗灰	密	良	刻印あり
99	平瓦	池状遺構101 第3層 下位	N3/0 暗灰	密	良	
100	桟瓦	池状遺構101 第3層 下位	N3/0 暗灰	密	良	
101	道具瓦	池状遺構101 第3層 最下層	N3/0 暗灰	密	良	塀の大仏瓦
102	丸瓦	池状遺構101 第3層 下位	N3/0 暗灰	密	良	
103	留蓋(桃)	池状遺構101 第1層	N3/0 暗灰	密	良	
104	軒丸瓦	土坑201	N3/0 暗灰	密	良	
105	軒平瓦	土坑201	N3/0 暗灰～N7/0 灰白	密	良	
106	軒平瓦	土坑201	N3/0 暗灰	密	良	
107	軒平瓦	土坑201	N3/0 暗灰	密	良	
108	軒平瓦	土坑201	N3/0 暗灰	密	良	
109	軒平瓦	土坑201	N3/0 暗灰	密	良	
110	丸瓦	土坑201	N4/0 灰	密	良	
111	丸瓦	土坑201	N3/0 暗灰	密	良	
112	平瓦・刻印瓦	土坑201	10YR8/2 灰白	密	良	刻印あり
113	平瓦	土坑201	N3/0 暗灰	密	良	
114	軒丸瓦	土坑137 第2層	N3/0 暗灰	密	良	
115	軒平瓦	柱穴列147 柱穴130	N3/0 暗灰	密	良	
116	軒平瓦	柵146 柱穴140	N3/0 暗灰	密	良	
117	軒丸瓦	1区東壁 基本層序4層	N3/0 暗灰	密	良	

付表３　土製品観察表

掲載番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
				口径	底径	器高					
118	土製品	鞴の羽口	溝214	タテ (7.3)	厚 (3.7)	ヨコ (7.9)	7.5YR8/3 浅黄橙 付着物:10YR2/1 黒	密	良		
119	土製品	鞴の羽口片	溝215	タテ (4.0)	厚 (1.6)	ヨコ (4.6)	10YR7/4 にぶい黄橙 付着物:7.5YR2/1 黒	密	良		
120	土製品	窯道具・匣鉢	1区 基本層序2層 下位	—	—	(9.4)	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良	破片 (底部)	匣か
121	土製品	窯道具	1区 基本層序2層 下位	長 (9.6)	厚 1.7	幅 (4.8)	10YR7/4 にぶい黄橙	密	良		

法量の( )は残存値

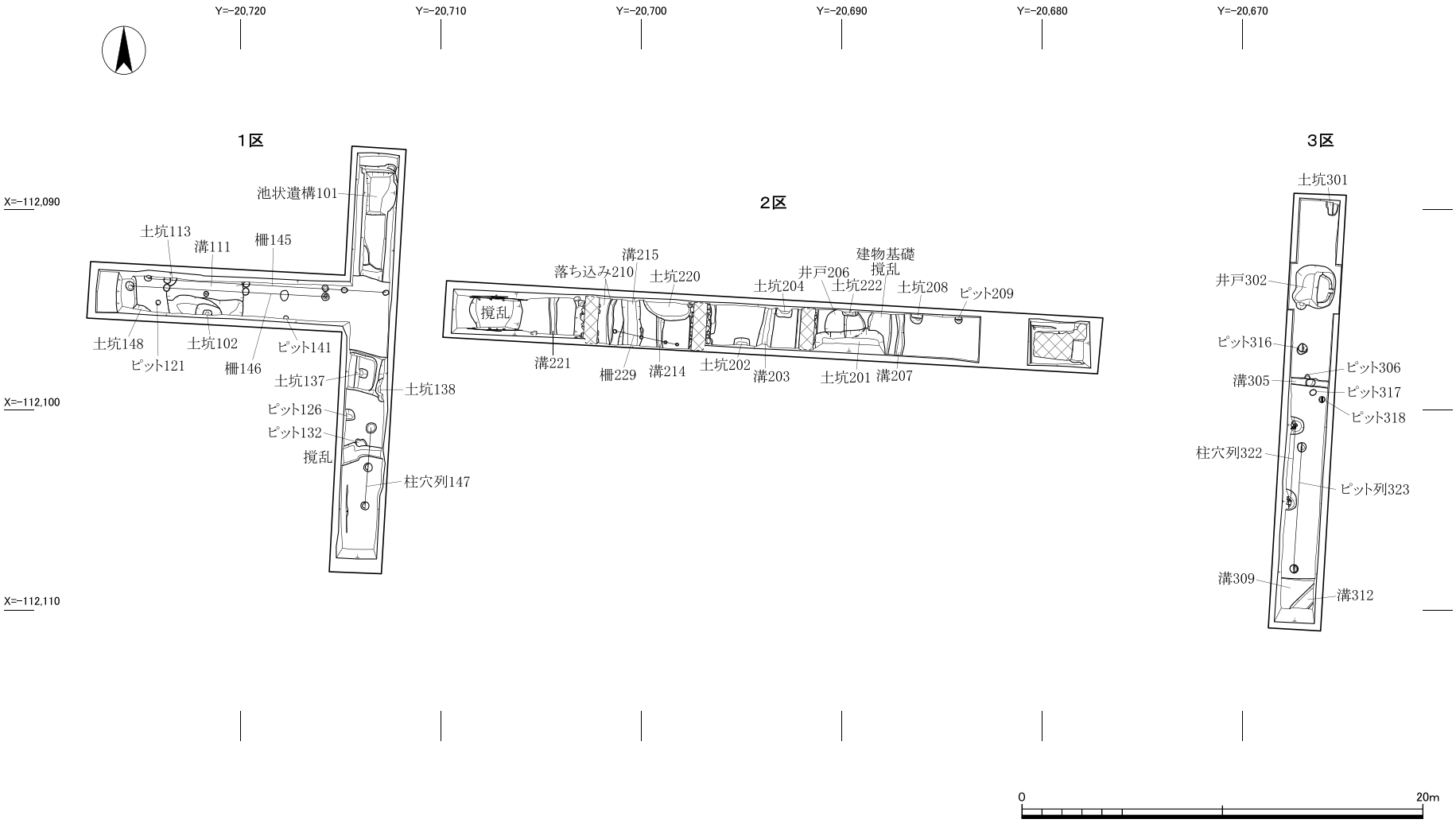
付表４　石製品観察表

掲載番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			重量	色調	残存率(%)	備考
				口径	底径	器高				
122	石製品	鍋	池状遺構101 第3層 下位	—	15.8	(3.0)	269.8g	—	底部 1/5	

法量の( )は残存値

図　　版

1区～3区平面図（1：300）



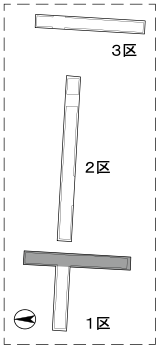
図版2　遺構

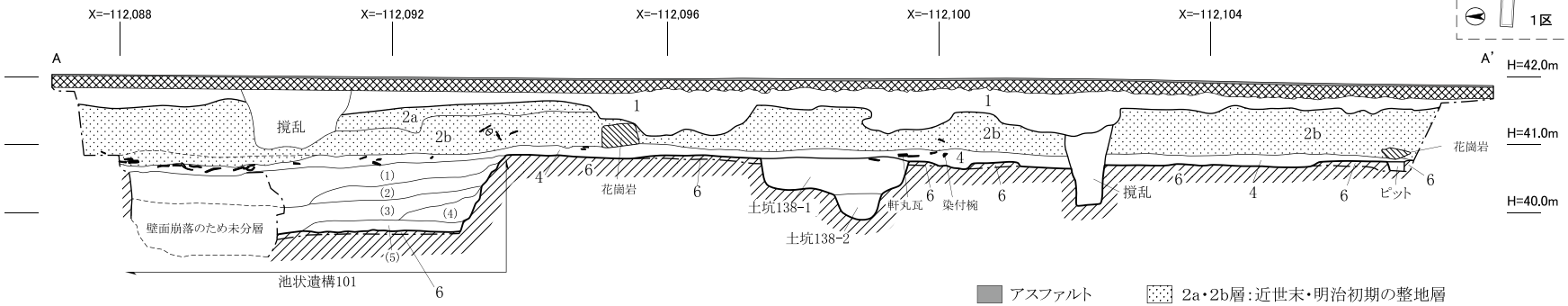
1区実測図1（1：100）

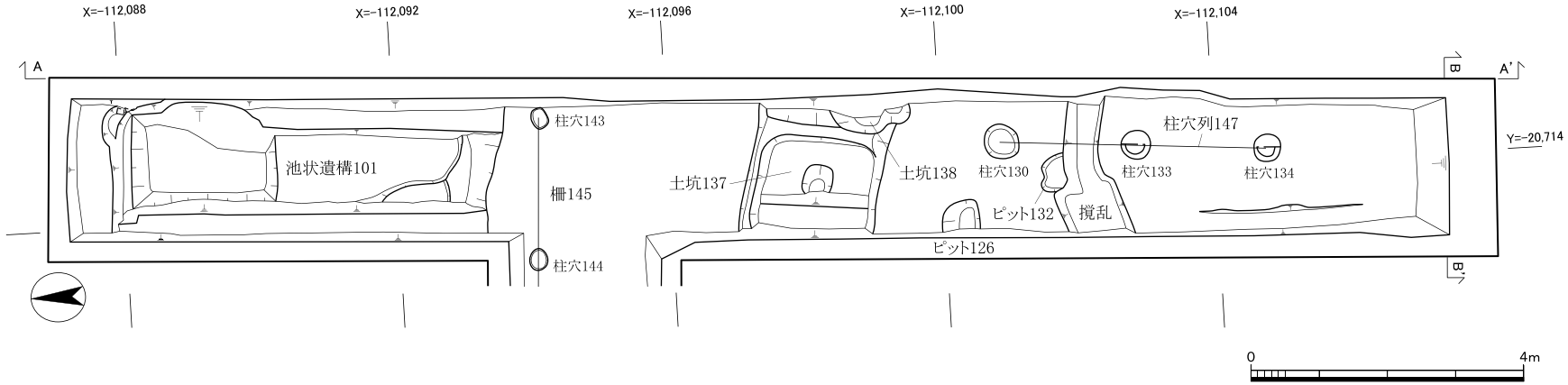
1　7.5YR5/3暗オリーブ色粘質土、7.5YR3/3暗褐色粘質土ブロック少量混じる
2a　7.5YR5/3暗オリーブ色粘質土ブロック混じり、10YR5/6黄褐色粘質土
2b　10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック・炭化物混じり、10YR5/6黄褐色粘質土　近世末・明治初期の整地層
4　10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック混じり、7.5YR6/1褐灰色粘質土～粘土
6　7.5Y6/3オリーブ黄色礫質土［基盤層］

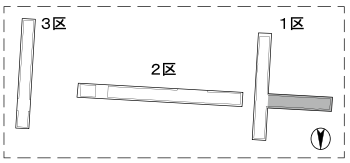
ピット　10YR4/3～4/4褐色粘質土
土坑138-1　2.5Y4/4オリーブ褐色礫質土
土坑138-2　10YR3/2黒褐色粘土

池状遺構101埋土
(1)　10YR5/8黄褐色粘質土ブロック混じり、10YR5/2灰黄褐色粘質土（人為的な埋め土）
(2)　7.5YR3/3暗褐色粘質土、10YR5/8黄褐色粘質土ブロック少量混じる
(3)　10YR5/1灰褐色粘土
(4)　10YR5/6黄褐色砂質土
(5)　10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック混じり、10YR5/3にぶい黄褐色粘質土（人為的な埋め土）





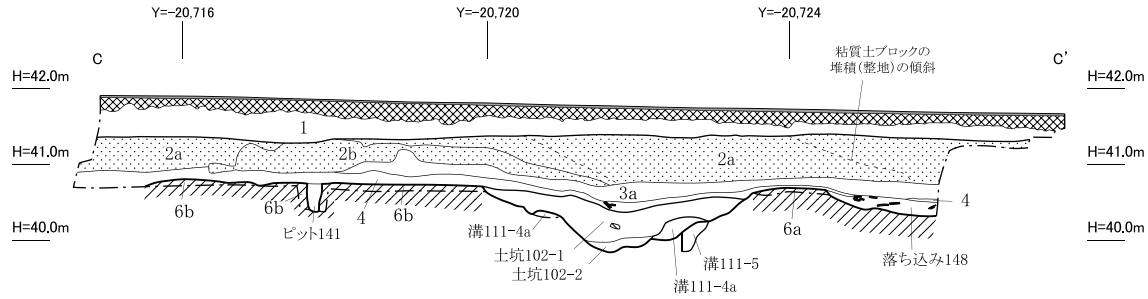


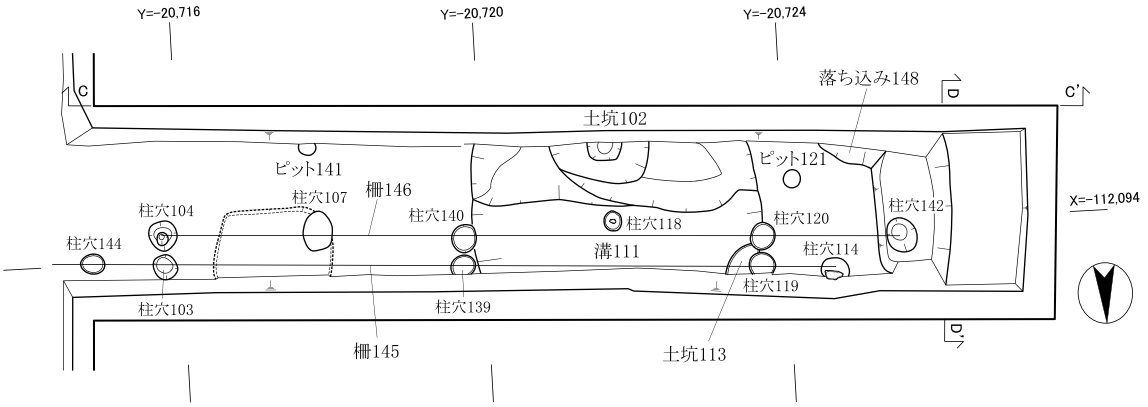


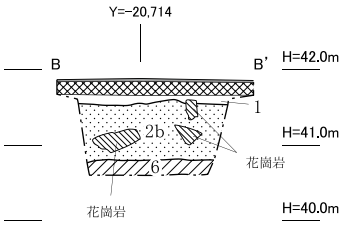
アスファルト　　2a・2b層：近世末・明治初期の整地層
コンクリート

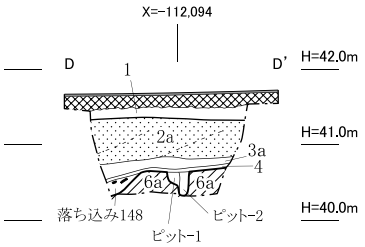
1　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
2a　10YR5/6黄褐色粘質土10YR3/3暗褐色粘質土(混在)
2b　10YR4/4褐色粘質土　　近世末・明治初期の整地層
3a　10YR4/6褐色粘質土2.5Y5/3黄褐色粗砂一部含む
4　10YR3/2～4/2黒褐色粘土
6a　10YR5/2～6/2灰黄褐色粘質土～シルト
6b　10YR6/4にぶい黄橙色粘質土　　基盤層

土坑102-1　10YR3/3暗褐色粘質土
土坑102-2　10YR2/2～3/2黒褐色粘土
溝111-4a　5YR4/4にぶい赤褐色粘質土
溝111-5　10YR3/2黒褐色粘質土
ピット141　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
落ち込み148　2.5Y4/2暗灰黄色粘土









1　7.5YR5/3暗オリーブ色粘質土
　7.5YR3/3暗褐色粘質土ブロック少量混じる
2b　10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック・炭化物混じり、
　10YR5/6黄褐色粘質土［近世末・明治初期の整地層］
6　7.5Y6/3オリーブ黄色礫質土［基盤層］

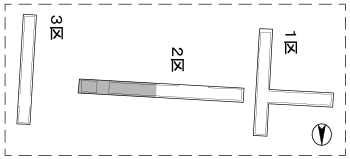
1　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
2a　10YR5/6黄褐色粘質土10YR3/3暗褐色粘質土(混在)
　［近世末・明治初期の整地層］
3a　10YR4/6褐色粘質土2.5Y5/3黄褐色粗砂一部含む
4　10YR3/2～4/2黒褐色粘土
6a　10YR5/2～6/2灰黄褐色粘質土～シルト［基盤層］

ピット-1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
ピット-2　2.5Y5/2暗灰黄色粘質土
落ち込み148　2.5Y4/2暗灰黄色粘土

1区実測図2（1：100）

図版4　遺構

2区実測図1（1：100）



E-E’

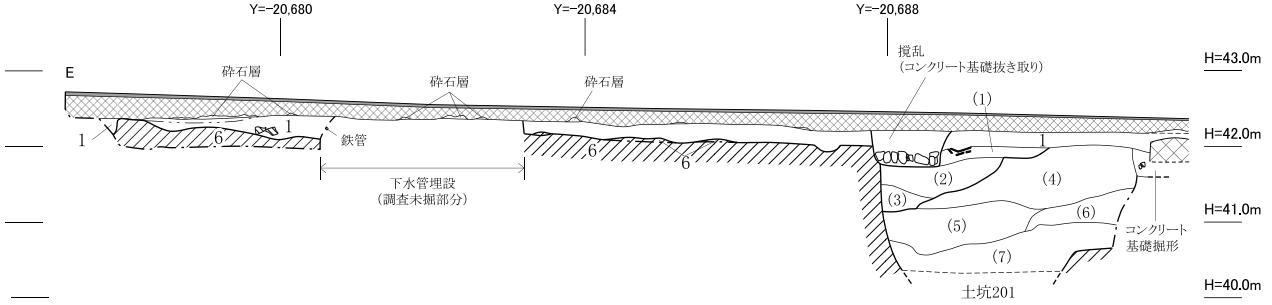
1　5YR6/2灰オリーブ色礫混じり粘質土
2a　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
2b　10YR7/8黄橙色粘質土
2c　10YR5/6黄褐色礫混じり粘質土
2d　10YR4/6褐色粘質土
2e　10YR7/4にぶい黄橙色礫混じり粘質土　近世末・明治初期の整地層
4a　10YR4/4褐色粘質土
4b　7.5YR3/1黒褐色（炭層）
5a　7.5YR3/3暗褐色粘質土、炭少量含む、上面に部分的に2.5YR5/6明赤褐色焼土少量混じる炭が被る
5b　7.5YR3/4暗褐色粘質土、炭少量含む
5c　10YR6/4にぶい黄橙色炭・ブロック混じり粘質土　秀頼期の整地層
5d　7.5YR4/6褐色礫混じり粘質土（白色チャート顕著）　14世紀以前の整地層
6　10YR6/8明黄褐色礫質土［基盤層］

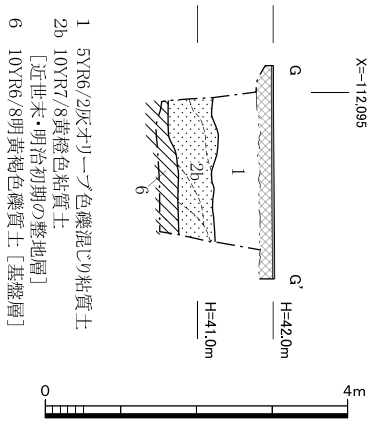
土坑202-1　7.5YR6/6橙色粘質土
土坑202-2　7.5YR4/3褐色礫混じり粘質土
土坑202-3　10YR4/4褐色粘質土
溝203-1　10YR5/6黄褐色粘質土
溝203-2　10YR4/6褐色粘質土
溝214　2.5YR5/6明赤褐色焼土混じり粘質土、10YR2/1黒色炭混じる
溝215　7.5YR3/4暗褐色粘質土
溝221　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
土坑220-1　10YR7/8黄橙色粘質土ブロック混じり10YR6/2灰黄褐色粘質土
土坑220-2　10YR7/8黄橙色粘質土ブロック混じり10YR4/2灰黄褐色粘質土

土坑201埋土
(1)　7.5Y6/3オリーブ黄色粘質ブロック混じり10YR5/8黄褐色礫質土
(2)　10YR5/2灰黄褐色礫混じり粘質土（大仏殿所用瓦顕著に含む）
(3)　10YR6/1褐灰色粘質土
(4)　10YR7/8黄橙色礫混じり粘質土
(5)　10YR5/8明黄褐色礫混じり粘質土
(6)　10YR5/6黄褐色礫混じり粘質土
(7)　10YR6/8明黄褐色礫混じり粘質土

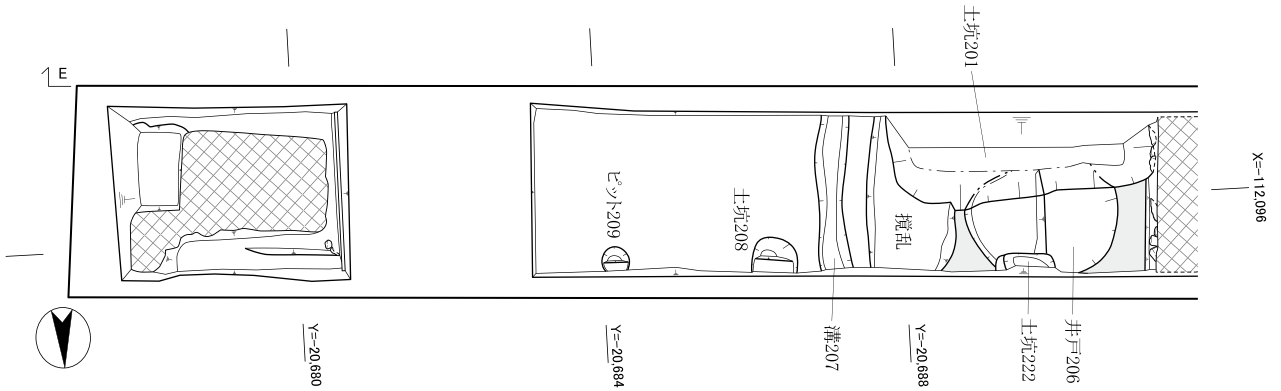
アスファルト
コンクリート
コンクリート・地中梁

2a～2e層：近世末・明治初期の整地層
5a～5c層：秀頼期の整地層
5d層：14世紀以前の整地層

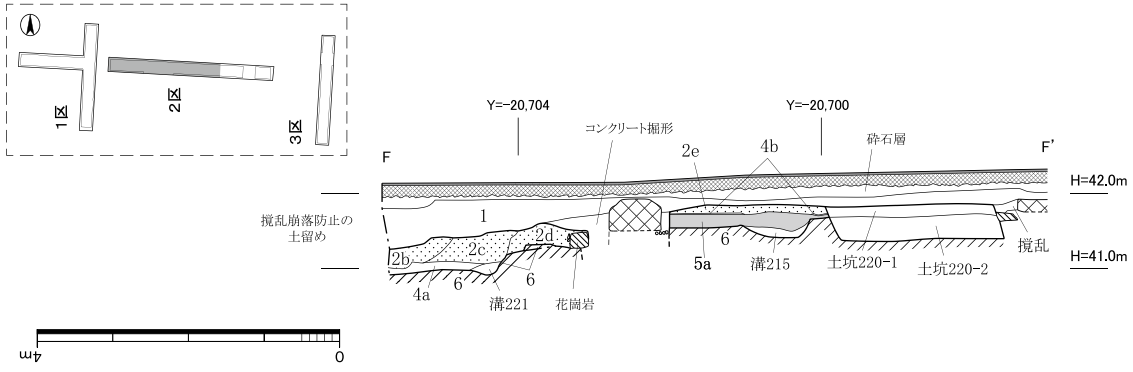




1　5YR6/2灰オリーブ色礫混じり粘質土
2b　10YR7/8黄橙色粘質土［近世末・明治初期の整地層］
6　10YR6/8明黄褐色礫質土［基盤層］



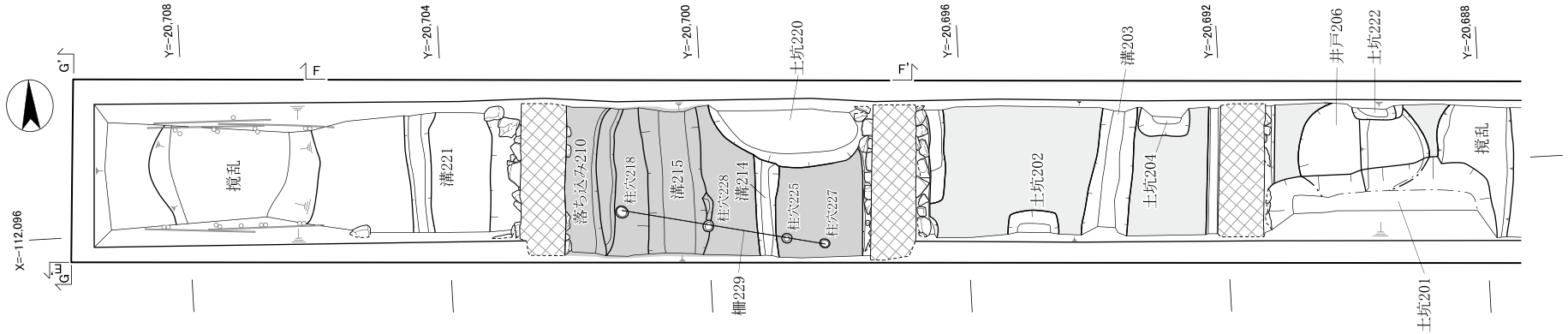
図版5　遺構

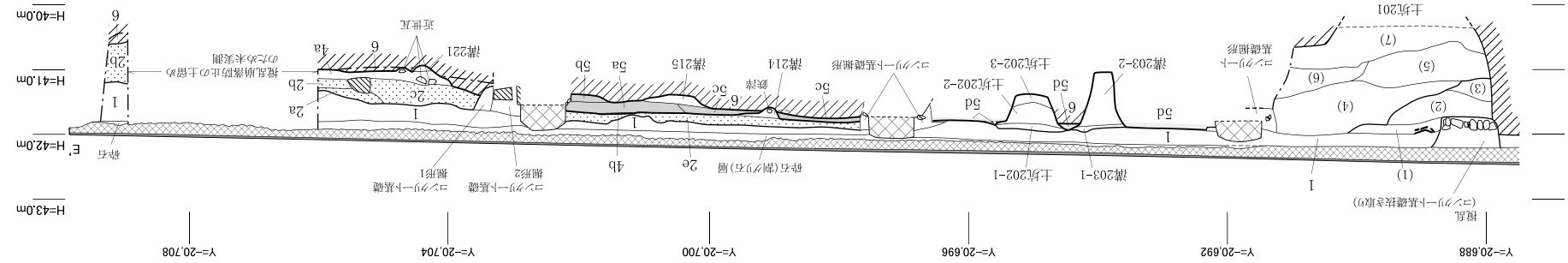


1　5YR6/2灰オリーブ色礫混じり粘質土
2b　10YR7/8黄橙色粘質土
2c　10YR5/6黄褐色礫混じり粘質土
2d　10YR4/6褐色粘質土
2e　10YR7/4にぶい黄橙色礫混じり粘質土
4a　10YR4/4褐色粘質土
4b　7.5YR3/1黒褐色(炭層)
5a　7.5YR3/3暗褐色粘質土、炭少量含む
　上面に部分的に2.5YR5/6明赤褐色焼土少量混じる炭が被る
6　10YR6/8明黄褐色礫質土［基盤層］

近世末・明治初期の整地層

溝215　7.5YR3/4暗褐色粘質土
溝221　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
土坑220-1　10YR7/8黄橙色粘質土ブロック混じり10YR6/2灰黄褐色粘質土
土坑220-2　10YR7/8黄橙色粘質土ブロック混じり10YR4/2灰黄褐色粘質土



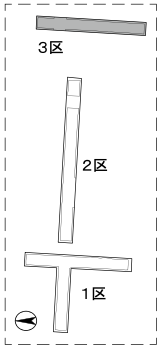


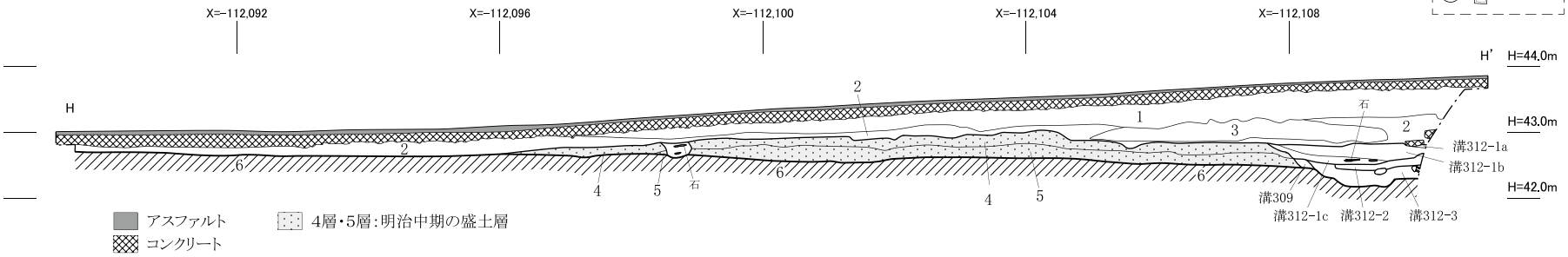
2区実測図2（1：100）

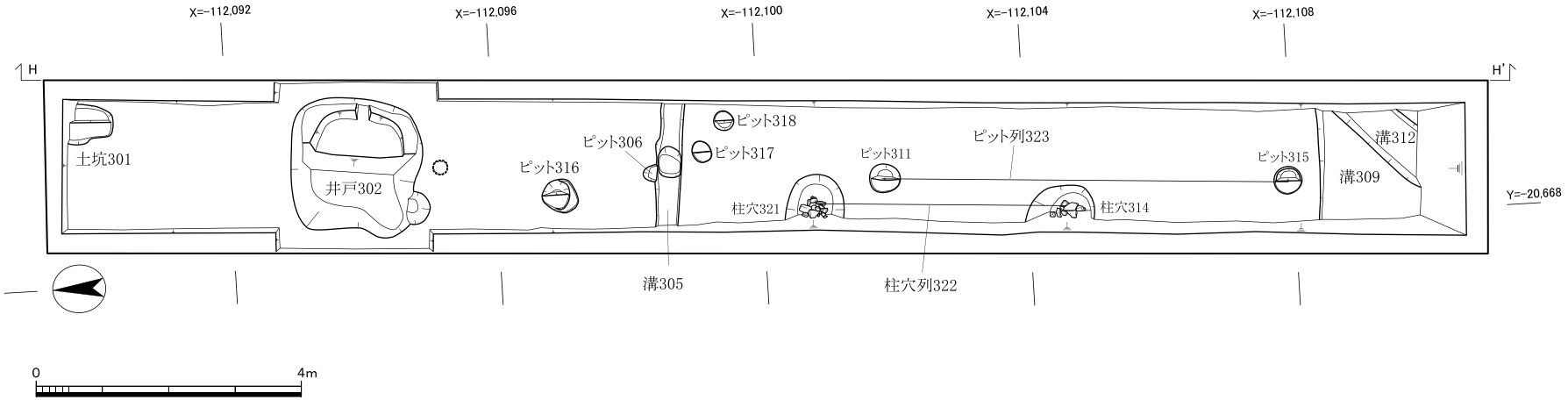
図版6　遺構

1　10YR4/2灰黄褐色礫質土混じり10YR3/4黒褐色礫質土［現代盛土層］
2　10YR3/2黒褐色礫質土
3　2.5Y4/4暗灰黄色礫
　　大正の盛土層
4　10YR3/3暗褐色壌土～粘土
5　10YR4/4褐色粘質土
　　明治中期の盛土層
6　10YR7/8黄橙色粘質土［基盤層］

溝309　10YR4/3～2.5YR4/3にぶい黄褐色粘質土
溝312-1a　10YR4/3 にぶい黄褐色礫質土
溝312-1b　2.5YR3/3暗オリーブ褐色礫質土
溝312-1c　10YR2/2黒褐色壌土～粘土
溝312-2　10YR4/4褐色粘質土
溝312-3　10YR3/4暗褐色粘質土





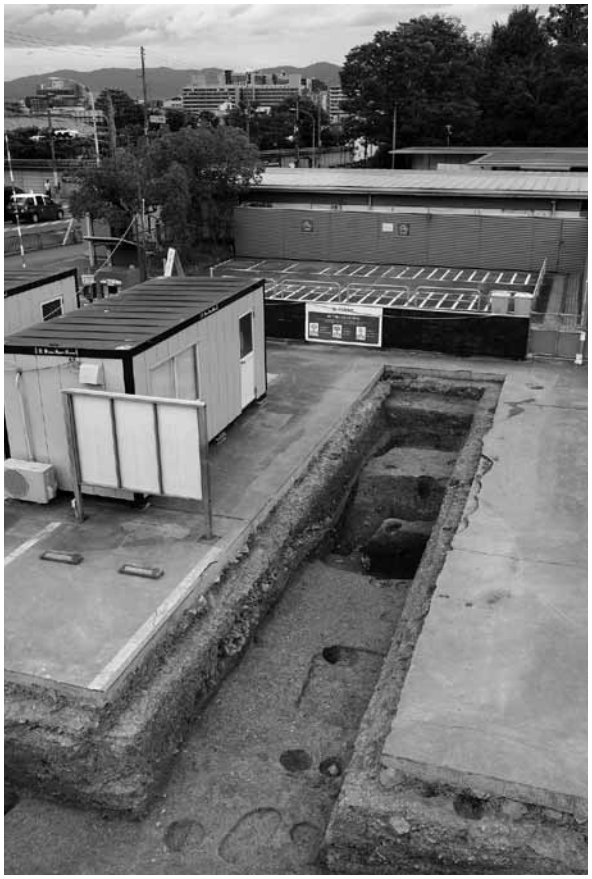


3区実測図（1：100）

１　１区・２区全景（東から）

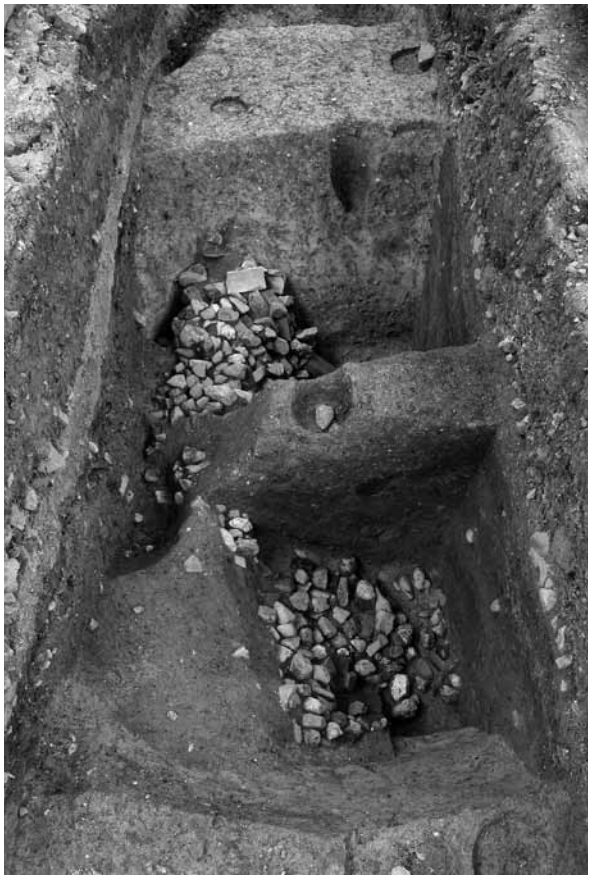
２　１区全景（北東から）

1　1区南半（北から）



2　1区西半（北東から）

3　溝111（南から）



1　溝111　礫群検出状況（東から）

2　溝111　礫群検出状況（北西から）

3　土坑102（北から）

1　池状遺構101（北東から）

2　池状遺構101（南東から）

3　土坑137・138（北東から）

1　２区全景（北西から）

2　溝214・215（南西から）

1　２区西端　基盤層傾斜状況（南西から）

2　井戸206・土坑201（東から）

3　井戸206（オルソ画像、南から）

1　土坑202（北から）

2　溝203（南から）

1　３区全景（北から）

2　井戸302（北西から）

1　柱穴列322（北から）

2　柱穴列322：柱穴314（東から）

3　柱穴列322：柱穴321（東から）

4　溝305（東から）

5　溝309・312（北西から）

4

5

6

7

9

10

11

14

15

18

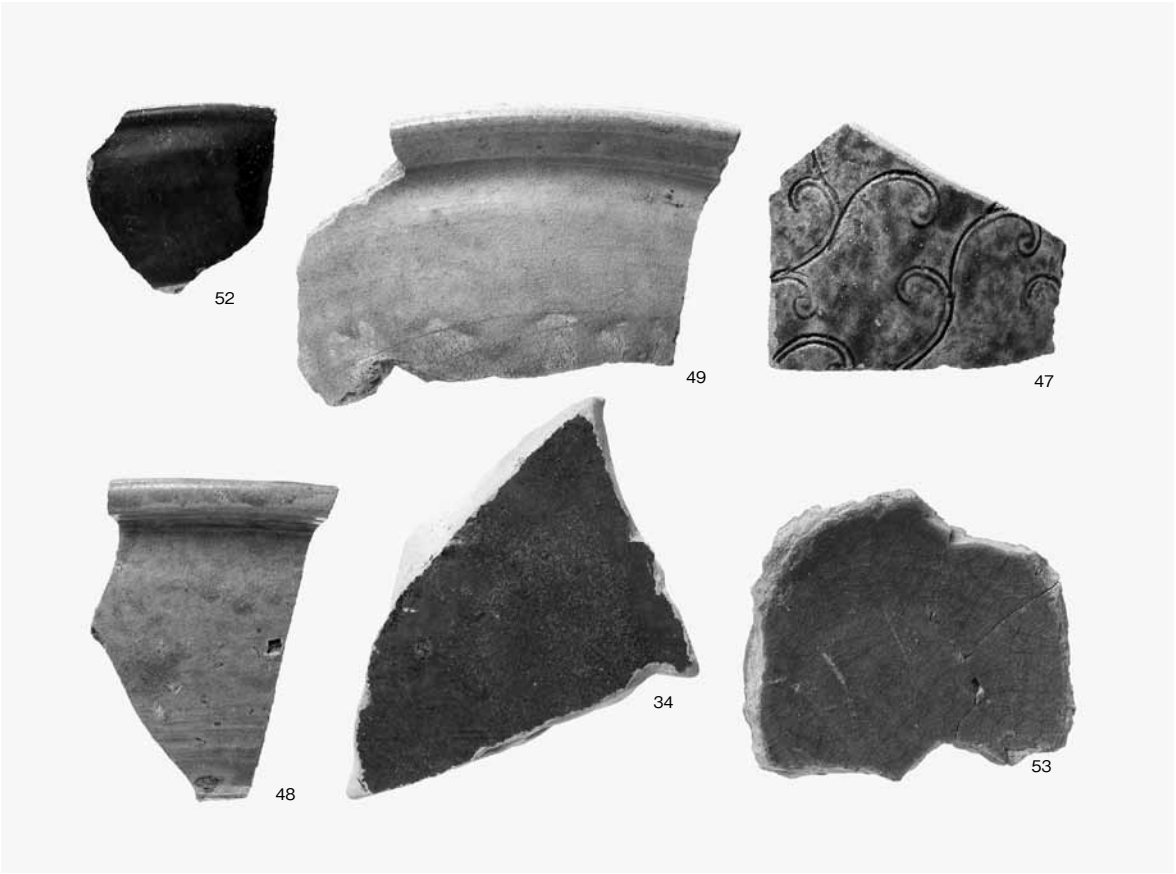
20

22

39

58

溝111・井戸302・井戸206・基本層序４層出土土器



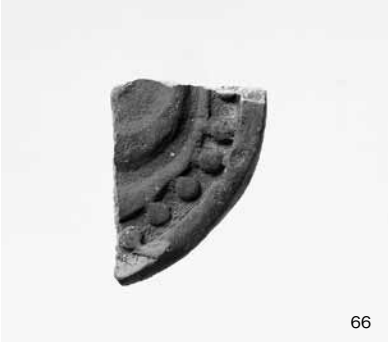
1　施釉陶器

2　須恵器・瓦質土器

瓦質土器炉

59

77


66

67

60

61

62

69

68

70

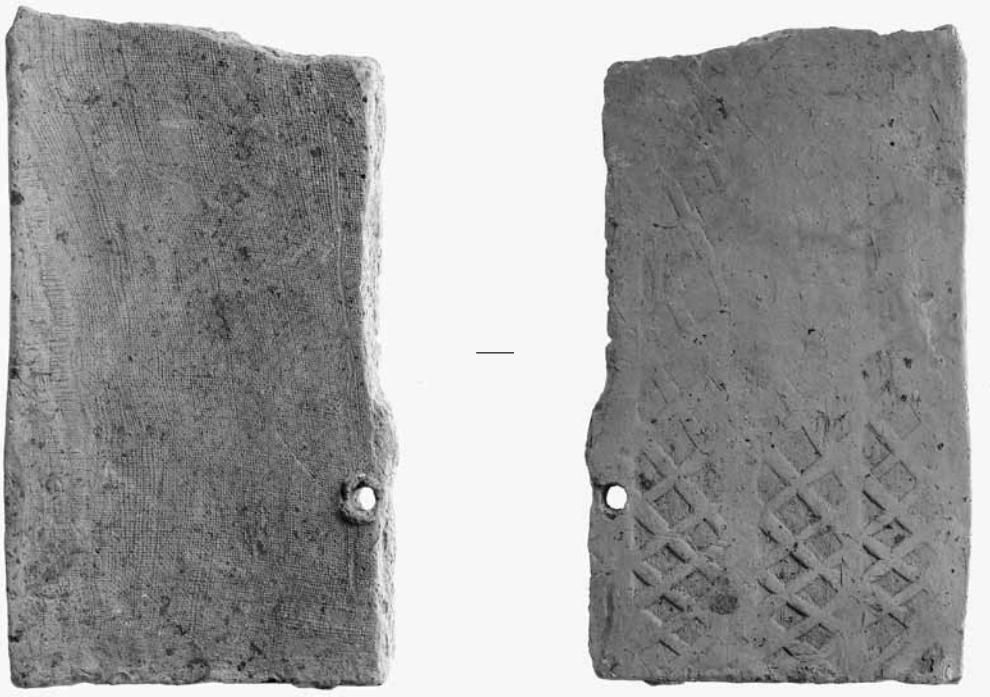
78

79

80

溝111・井戸302・井戸206出土軒瓦

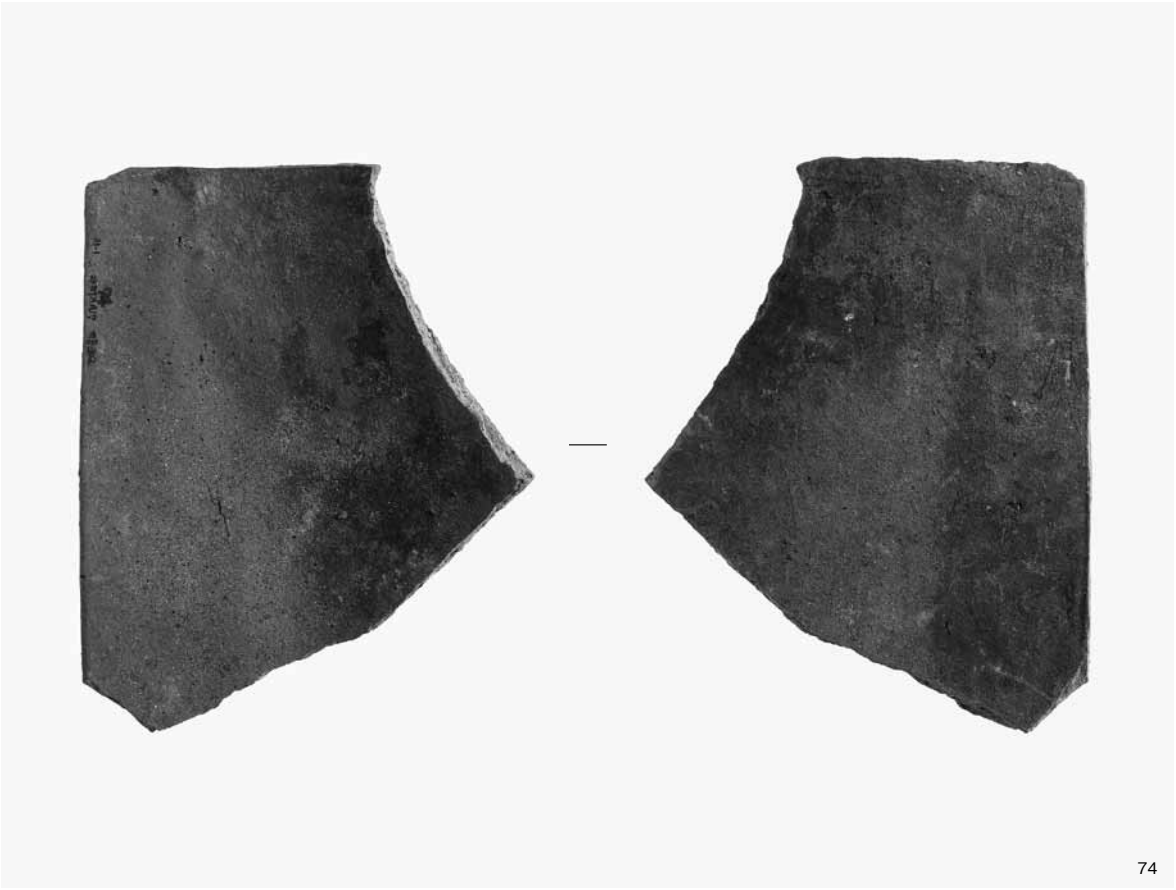
63



64

溝111出土平瓦

71



74

井戸302出土丸瓦・平瓦

95

104

114

117

105

97

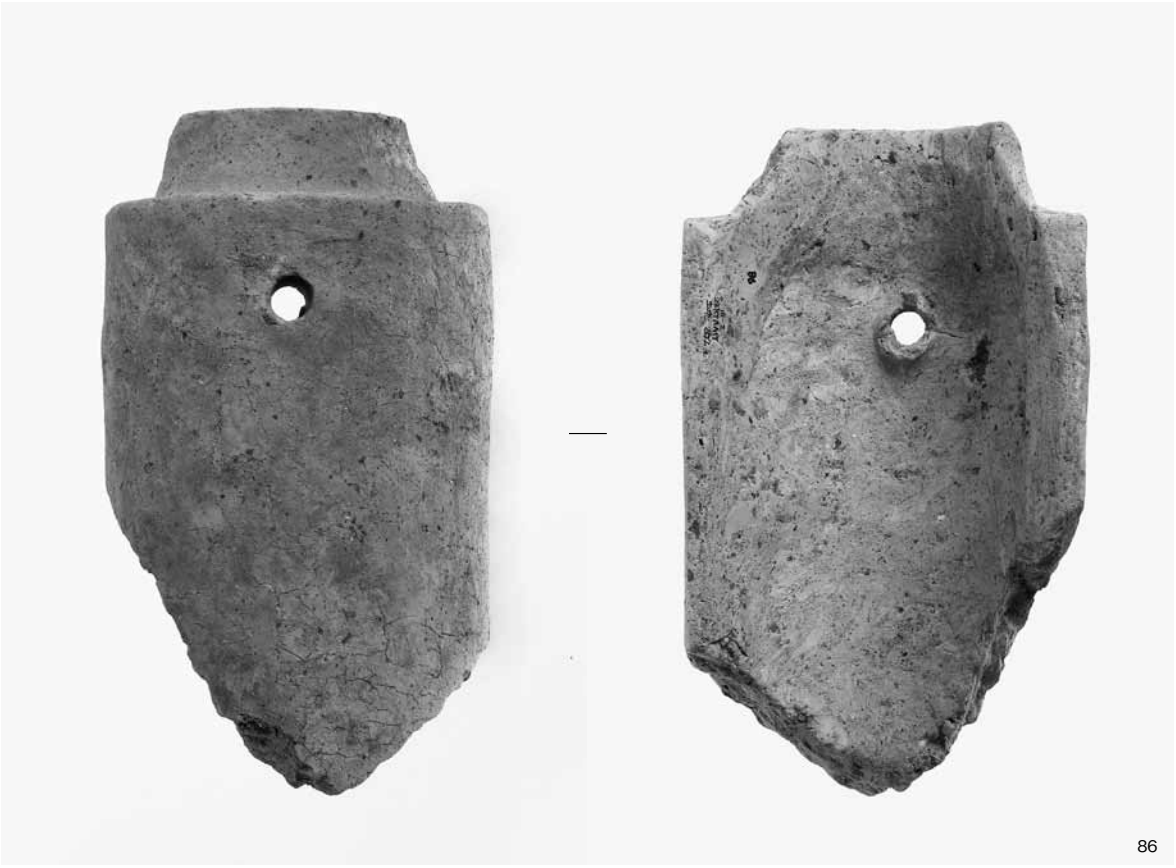
107

106

109

116

池状遺構101・土坑201・その他遺構・基本層序４層出土軒瓦



86

111

土坑202・土坑201出土丸瓦

99

98

101

113

100

103

池状遺構101・土坑201出土平瓦・桟瓦・道具瓦

87

88

89

90

91

92

93

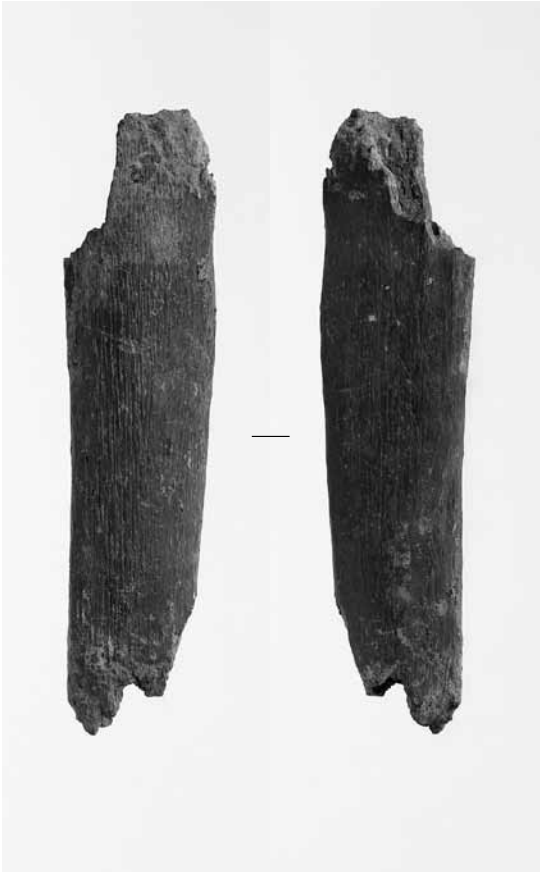
98

112

土坑202出土道具瓦・金箔瓦、池状遺構101・土坑201出土瓦刻印

1　土製品・石製品

2　木製品



3　骨（ヒト）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ほうじゅうじどのあと・ろくはらせいちょうあと・ほうこうじあと
書　　名	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２３－５
編 著 者 名	古閑正浩
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2024年３月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
法住寺殿跡（ほうじゅうじどのあと） 六波羅政庁跡（ろくはらせいちょうあと） 方広寺跡（ほうこうじあと）	京都市東山区（きょうとしひがしやまく） 茶屋町（ちゃやちょう）527	26100	546 540 541	34度 59分 22秒	135度 46分 24秒	2023年６月26日～2023年９月29日	241.4㎡	国立文化財修理センター(仮称)整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
法住寺殿跡 六波羅政庁跡	寺院跡 離宮跡 都城跡 邸宅跡	平安時代後期～室町時代前期	溝、井戸、土坑	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、緑釉陶器、焼締陶器、施釉陶器、瓦、木製品、生物遺存体	方広寺所用瓦に想定される金箔瓦の断片が出土した。
方広寺跡	寺院跡	桃山時代～江戸時代前期	溝、落ち込み、土坑	施釉陶器、瓦、土製品	
		江戸時代後期	柱穴列、柵、ピット列、池状遺構、溝、土坑	土師器、瓦質土器、磁器、瓦、土製品、石製品	
		幕末～明治時代	溝、土坑、整地		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2023-5

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

発行日　2024年3月29日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358　TEL 075-467-5151